
久留井三兄弟の非現実的な日常

高平しま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久留井三兄弟の非現実的な日常

【Zコード】

Z0556U

【作者名】

高平しま

【あらすじ】

飛鳥川琉奈は幼い頃から、突然見ず知らずの空間に意識を飛ばされるという不思議な現象に悩まされていた。原因も解決方法も分からぬまま年月は過ぎ、高校へ進学して2年目のある日、クラスに転校生がやってくる。久留井祥吾といふ名の端整な転校生には、同じく美形の兄と弟がいる。不思議な能力を有する彼らとの出会いが琉奈を変えていく。

あつと思つた時にはもう遅い。

全身を襲う、沼の中へと沈んでいくような感覚。そして、眼前に現れる古びたアパートの一室。

脚をガムテープで補強したちやぶ台。

皺だらけの敷布団。

ひび割れた羽で風を送り出す扇風機。

そこら中に散乱しているビール瓶。

喧しく鳴き続ける蝉。

そこまで知覚したところで突然、今度は海底から急浮上するような感覚がやってくる。すると、周囲の風景は元に戻る。

「アスカ！」

そう呼ばれ、飛鳥川琉奈は我に返る。

アスカ、とあだ名で琉奈を呼んだのは、隣に立っている友人の松下綾だ。

「またいつもの？」

「うん。でももう大丈夫」

綾に声を掛けられたのをきっかけに、次第に周囲の雑音も琉奈の耳に入つてくる。

廊下を行き交う、同じ制服を着た多くの男女がおはよつ、と挨拶を交わす声。

数人の女子グループが次の定期試験の範囲の広さを嘆く声。
それ違つた女子生徒を見た男子生徒たちが何やら小声で話し合つ

声。

普段と変わらない日常。現実に戻つたことを実感する。

「やつぱり。急に立ち止まつてぼんやりし始めたから、またかなつて」

「そつか……。『めんね』

琉奈が手を合わせて謝ると、綾は心配そうに琉奈を見つめた。

飛鳥川琉奈は幼少の頃から、先程のような不思議な現象に繰り返し遭遇している。

その現象に襲われている最中、琉奈は綾曰く、「魂が抜けたようにはんやりしちゃう」のだが、現象は時間も場所も構わず、いつも突然やつてくる。

今までそれが原因で怪我をした、といふことは幸いにもなかつたが、今後この現象が原因で大きな怪我をしたり、事故に遭う可能性もなくはない。

過去に様々な病院を訪ね、この現象の原因は何か、遭わないためにはどうすればいいのか医師に相談してきた。

しかし、どの医師もこの現象の原因も、治療方法も分からなかつた。

拳句の果てに、靈能者に悪霊が憑いてると言われ、お払いまで受けたが全く効果はなく、相変わらず不思議な現象に悩まされる日々を送つている。

「あつ、もつこんな時間！　早く教室に行かないとホームルーム始まつちやつよ、綾！」

「ホントだ！　急！」

琉奈は綾を急かし、足早に自分たちの教室へ向かう。

「そついたまは、知つてる？」

「何が？」

「今日うちのクラスに転校生が来るらしいよ。しかも男子ー。」

「へえー。さすが新聞部員、情報が早いね」「しかも、それだけじゃないんだよね……」

「？ どういうこと？」

琉奈がそう尋ねると、綾はやりと不敵な笑みを浮かべる。

「その転校生には三年の兄と中二の弟がいて、その二人もうちの学校に転校してくるんだけど……三人とも超絶イケメンらしいよ！」「超絶イケメンねえ……」

目を爛々と輝かせながら、宝物の隠し場所でも告げるような口吻で話す綾。

対して琉奈は興味なさ気に綾の言葉を反芻する。

「あ、琉奈には秋川がいるから興味ないか」

「だからあいつはただの幼馴染だつてば。ていうか、綾こそ桜井先輩がいるじゃん」

「彼氏がいても、イケメンにはときめいちゃうものな」

遠くを見つめながら、うつとりとした様子で語る綾。

琉奈は「そんなもんかなあ」と腑に落ちない様子で首を傾げた。

ホームルームの開始を告げるチャイムが鳴ると同時に二年A組の教室に飛び込んだ飛鳥川琉奈と松下綾の二人だが、担任教師の姿はまだなく、クラスメイトの大半が自分の席から離れ、友人と雑談を続けていた。

「焦つて損したね、綾」

「ホント……。軽く汗までかいたのに」

やや疲れた表情で言い交わす琉奈と綾の元に、一人の男子生徒が駆け寄つてくる。

「おはよ、アスカ、綾。一人とも遅刻かと思ったよ」

「おはよ、秋川。先生まだ来てないんだ？」

綾からの問いかけに「ああ、まだよ」と答えたのは、一人のク

ラスメイトであり、琉奈の幼馴染でもある秋川浩太あきかわこうただ。

「珍しいよな、沢木がホームルームに連れてくるなんてさ。何かあつたのかな？」

「きっと転校生を連れてくるからだね」

顎に手を当て、綾が探偵ぶつた口調で言つ。

「転校生？」

「あ、浩太も知らなかつたんだ。今日、うちのクラスに転校生が来るんだつて」

「マジで？ 男？ 女？」

「男！ しかもイケメン！」

声のトーンとテンションを上げ、答える綾。

「イケメン……!? アスカも気になつてたり……?」

「あたしは別に。どんな人がクラスメイトに加わるかつて意味では気になるけど、イケメン云々は特に。それがどうかした？」

「う、ううん、別に……」

琉奈の答えに浩太はあからさまにホッとした表情を浮かべる。そんな一人の様子を見ていた綾は小さなため息をつき、相変わらず報われないなあ、と独りごちた。

「はあーい、全員席ついて！」

一年A組の女性教師がウエーブのかかったロングヘアを靡かせながら入つてくるなり、クラス中に響き渡る大声でそう言つた。

琉奈たちを含め、生徒たちは慌てて自分の席へと走る。

「あれ？」

琉奈は自分の席 窓から一列目の一一番後ろの席に到着したところで、窓際の列の一一番後ろに、つまりは自分の隣に新しい机と椅子が用意されることに気づいた。

「転校生、琉奈の隣に来るんじゃない？」

琉奈の前の席に座つた綾が嬉しそうに言つ。

一方、琉奈は「かもね」と適当に流しつつ、席が増えたせいで隣

の列は狭そうだな、などと全く関係のないことを内心呟いた。

「にしてもさ、沢木ってやつぱり教師のビジュアルじゃないよね」「だね。キヤバクラの方がしつくりきそつだよね」

生徒全員が着席するのを教壇で待っている担任教師を見ながら呟いた琉奈の言葉に綾が同意する。

二人の担任教師の沢木はふくよかな胸を持つ艶っぽい女性である。その容姿と、英語を教えていることから、彼女は陰で生徒たちからグラマーとあだ名されている。

「静かに！ 知ってる人もいるかもしれないけど、今日からクラスメイトが一人増えます」

沢木の言葉に教室中が沸き立つ。「だから静かに！」と手を叩きながら沢木が呼びかける。

「今からみんなに紹介するから。……女子は心しどきなさい」

沢木の一言で興奮した女子の歓声と男子生徒の落胆の声が入り混じる中、沢木が「入つて！」とドアに向かつて呼びかける。

やがてドアが開き、その向こうから一人の男子生徒が教室に足を踏み入れる。

「！？」

鼻筋の通つた端整な顔立ちの美少年の姿に、一瞬の間の後、教室中から黄色い声が一気にあがる。転校生はその光景に目を丸くしつつ、沢木の隣に立つた。

「ちょっと、めっちゃカッコよくない！？ アイドルか何かかな！

？」

綾が興奮気味に呟く。琉奈も茫然と転校生を見つめながら、「おつきい目……吸い込まれそうだね」と答える。

クラス中の視線を独占している転校生は、沢木から白のチョークを受け取り、黒板に字を綴つていく。

彼の手からチョークが離れた時、黒板にはバランスのいい字で「久留井 祥吾」と書かれていた。

「初めてまして、久留井祥吾です。よろしくお願ひします」

正面に向き直り、転校生　久留井祥吾がハスキーな声でそう自己紹介した後、ペコリとお辞儀をする。

女子生徒からは熱烈な、男子生徒からは簡単な拍手が送られる。
「みんな仲良くしてあげてね。じゃあ、久留井くんはあの一番後ろの席に座つて」

そう言つて沢木が指示した席は綾の予想通り、琉奈の隣の席だつた。

クラスの女子の大半が目の中にハートマークを浮かべて見つめる中、祥吾は指定された席につく。

彼は隣に座る琉奈に目を向け、

「よろしくね」

と声をかけた。

「こつちこそ。何か分からないことあつたら何でも訊いてね」

「ありがと、助かるよ」

柔軟な笑顔でそう答えた祥吾は黒板の方へ視線を戻し、鞄の中身を机の中に詰めていく。

その様子さえ爽やかに見えた琉奈は、オートでキラキラする人つているんだなあと内心独りごちた。

授業の合間の休み時間。

琉奈は毎回自分の席から退避し、廊下側の列にある秋川浩太の席で彼と共に過ごすはめになつていた。

普段は琉奈の席に綾と浩太が集まり、三人で談笑して過ごしているのだが、今日は休み時間の度にクラスの女子たちが久留井祥吾のところへ、砂糖へ群がる蟻のごとく押し寄せるので、彼の周りに黒山の人だからができる、隣に位置する琉奈の席は休み時間の度に山に埋もれてしまう。

そのため、琉奈は自分の席で平穏な休み時間が過ごせない状態が

続いている。

「とてもじゃないけど休めないよ、あんな中じゃ……」

琉奈がため息混じりにそう零す。

「アスカは気にならないの、転校生のこと？」松下だつてあいつのところにいるのに

そう言って浩太が指差す先にいるのは、他の女子たちと共に祥吾に話しかけている綾の姿だ。

「綾は面食いだもん。それに、あたし以外にも久留井くんのところに行つてない女子いるじゃん」

言いながら琉奈が教室中に視線を巡らせる。

確かに休み時間中の教室には、自分の席で次の授業の予習をしていたり、読書をしていたり、机に突っ伏して寝ている女子もいる。が、それはあくまでも数人で、女子の大半は久留井祥吾の席に押しかけている。中には何人が琉奈が見たことない顔もある。他のクラスから来ている女子もいるようだ。

「アスカはあいつと何か話したりした？」

「そんなには。教科書のページ数教えたりする程度だよ。休み時間になった途端にみんな寄つてくるし」

「そつか……。アスカは他の女子と違うんだな！」

「違うのかな？でも、カツコイイとは思うよ、もちろん」

「え！？」

驚愕する浩太を見て、琉奈は「そんなに驚かなくても」と苦笑する。

「ていうか、誰が見てもカツコイイって思うんじゃない？ 浩太もカツコイイって思うでしょ？」

「うん。……つ！ ううん、別に思わないし！」

一旦は琉奈の意見に同意したものの、すぐに大げさに手と首を振つて否定する浩太。

と、次の授業の開始を知らせるチャイムがスピーカーを通じて教室に響き渡る。

琉奈は浩太に向かって小さく手を振り、彼の元を後にした。

「ごめんね」

自分の席に戻った琉奈に、久留井祥吾がそう声をかける。

「え？ 何が？」

「休み時間の時、人が集まっちゃって……」

「ううん、気にしないで。大変だね、モテちゃうと」

「もて……。今だけだよ。転校生だから興味があるってだけで」

「そうかなあ？」

そんなことないと思うけど、と琉奈が胸中で呟いたところで生物担当の老教師が入ってきたので、一人の会話はそこで途切れた。

転校生（後書き）

初投稿です。よろしくお願ひいたします。

授業終了のチャイムが鳴る。

昼休みに入った教室が一気にざわつく。

飛鳥川琉奈は鞄から弁当箱と水筒を取り出すと、また女子の集団に巻き込まれる前にそそくさと自分の席を後にする。

「アスカ！ 待つてよー！」

松下綾の声が琉奈の背中にぶつかる。

「早いよ、アスカ……」

「だつて、あの集団に巻き込まれたら大変だし。ていうか、綾こそ久留井くんのところに行かなくていいの？ あたしなんかでいいの？」

「いつも一緒に昼食てる仲じやん！ なに、拗ねてるの？ あたしがいなくて寂しかった？」

「うーん、そんなこともなかつたかな」

「ええ～！？ そんな悲しいこと言わないでよう」

「嘘。めちゃめちゃ寂しかった」

「仕方ないなあ、そんな君の側についてあげよう！」

芝居じみた口調で綾が言う。

思わず笑ってしまった琉奈につられ、綾も笑ってしまう。

二人はそれぞれの弁当箱と水筒を片手に教室を出た。

琉奈と綾がやってきたのは屋上。

二人は転校が悪いとき以外はいつも、屋上を囲うフェンスに沿つていいくつか設置されているベンチで昼食を楽しんでいる。

今日の天気は快晴。降水確率も0パーセントと、外で食べるには絶好の空模様だ。

一人が今日座つたのは、屋上の出入口の正面に位置するベンチだ。

腰を下ろすなり、早速胸を躍らせながら弁当箱の蓋を開ける。

「綾のお弁当つていつも彩りいいよね」

「ほんと冷凍食品だと思うけどね……。アスカは今日はサンドウイツチなんだ！ 美味しそう……」

「綾のお弁当のミートボールとどれか交換してあげよつか？」

「ホント!?」

「あ、でも卵焼きが挟んでるのはダメだからね？」

「はいはい。相変わらずの卵好きだね」

他愛のない会話を交わす琉奈と綾。

しかし、二人の平穏は突然の訪問者によつて破られることとなる。

自分の昼食に手をつけ始める一人。

口にした昼食に舌鼓を打つていたら、正面に見えるドアが突然、勢いよく開かれ、中から一人の男子生徒が息を切らせて入ってきた。一体何事かと呆然として彼を見つめる琉奈と綾、そして屋上にいるその他の生徒たち。

と、彼の目が琉奈たちを捉えると、一直線に一人の方へ駆け寄つてきた。

「綾、知り合い？」

「全つ然。アスカの知り合いじゃないの！？」

「あたしも知らないよ！」

困惑する一人をよそに、彼はどんどん近づいてくる。

そして、とうとう一人の目の前までやつて来た男子生徒は、

「ごめんね！ ちょっと後ろに隠れさせて！」

と言つや否や、一人が座るベンチの裏に入り込んだ。

訳が分からぬ琉奈と綾はそのままに、男子生徒は体を小さく屈め、背もたれからひょっこり顔を出して周囲の様子を伺う。

すると、再びドアが物凄い勢いで開け放たれ、今度は数人の女子

生徒が現れた。

彼女たちは屋上中をきょろきょろと見回し、どこに行つたのかしら、などと口々に言ひ合ひつつ、ドアの向ひへと戻つていった。

「「じめんね、急に邪魔しちゃって……。びっくりしたよね」屋上に静けさが戻るなり立ち上がった男子生徒が、琉奈と綾にそう謝つた。

「いえ、大丈夫で……す……」

振り返り、駆け込んできた男子生徒を見上げ、改めて彼の顔を見た二人は固まつてしまつた。

端整かつ精悍な顔立ち。切れ長で凛とした眼が印象的なその顔を見て、俳優か何かだろうかと琉奈は思った。

「……俺の顔、何か付いてる？」

「！ い、いえ、何も……」

答えながら、琉奈は隣の綾に目を遣る。

琉奈の予想通り、綾は久留井祥吾を初めて見た時と同じ目で彼を見つめていた。

「今日は朝からずっとあんな感じでさあ……。昼食は弟たちと食べるので約束してつからつつても全然聞いてくんないし。この学校の女子つて男子に飢えてんの？」

頭をぱりぱりと搔きながら、屈託のない口調で話す男子生徒。

琉奈は苦笑しながら、「共学ですから、そんなこともないとしますけど」と答えた。

「つと、早く行かないと昼休み終わっちゃうー……あのさ、食堂つてどこにあるの？」

「食堂なら一階ですよ。中等部との境にあります。……最近転校してきた、とかですか？」

「最近つていうか、今日ね。俺は三のBの久留井誠一。^{くるいせいいつ}よろしくね

「久留井……つてもしかして」

「久留井祥吾くんのお兄さんですか！？」

琉奈の言葉を遮り、綾が大声で尋ねる。

あまりに大きな声に男子生徒　久留井誠一は一瞬目を見張るが、
すぐに明るい笑顔を浮かべ、

「君たち、祥ちゃんと同じクラスの子なの？」
と尋ね返してきた。

「はい。あたしは飛鳥川琉奈です」

「松下綾です！」

「琉奈ちゃんに綾ちゃんか。よろしくね！　一人とも、祥ちゃんと
仲良くしてあげてね」

そう言つて笑いかけてくる誠一。綾は頬を紅潮させ、しゃちほこ
張りながら「もちろんです！」と答える。

「ホントにありがとね！　じゃっ！」

二人に向かつて手を振りながら屋上から去つていく誠一。

琉奈と綾もそれに応えながら彼を見送る。

「なんか……嵐のような人だつたね。突然現れたと思つたら、颯爽
と去つてつて」

「うん。でも太陽みたいな笑顔がすごく素敵だつたなあ……」

綾はそう言いながら、未だに誠一が出て行つたドアをぼんやり見
つめている。

「にしてもさ、久留井くんつてお兄さんとあんまり似てない気がし
ない？　どっちもイケメンには違いないけど」

琉奈の言葉に、「言われてみれば」と綾も思案顔で頷いた。

ぱつちりとした目をしている弟の祥吾に対し、兄である誠一は
切れ長の目をしている。それだけの差でも受ける印象がだいぶ違つ
た。

「それとさ、久留井くんの唇つてちょっと厚めなんだけど、お兄さ
んはちょっと薄めだつたよね」

「父親似か母親似つてことかな？」

「いつなると、もう一人の弟はどうなかつて気になるよね！」

おもちゃを見つけた子供のような顔で綾が言つ。

綾の情報では、一人の兄と共に転校してきた三男は中学二年生で、同じ学校の中等部にいるといつ。

「……食堂に行ってみよつよつと言つなら、あたしは行かないよ」

「！ それは……」

琉奈にあつさりと先手を打たれ、綾は次に言ひおひとした言葉を失つて口ごもる。

「久留井くんもお兄さんも、女子に囲まれたり追いかけられたりで大変そうじやん。もしかしたら中三の弟くんも同じ状態かもしけないし。お昼くらい、せめてあたしたちは邪魔しないであげようよ」

「ね？」と同意を求める琉奈に、綾も「そうだね」と頷いた。

「あーあ。大人だなあ、アスカ！」それともイケメンに興味ナシ？「全くないつてわけじゃないけど、みんなほどじゃないのかな」「ふうん……そういうもんか」

「飛鳥川さん！ 松下さん！」

屋上での昼食を終え、昼休み終了のチャイムが鳴る前に教室へ戻ろうと廊下を歩く琉奈と綾を呼び止める声が、後ろから飛んできた。一人が振り返ると、そこには久留井祥吾がいた。

「久留井くん！ どうしたの？」

琉奈がそう問いかける。

「さつきは兄貴がお世話になつたみたいで……ありがとね」

「お世話つて……そんな大したことしてないよ。ね、綾？」

「そうそう。特に何かしたつて訳じやないし。久留井くん、お兄さんたちと食堂で食べれたんだ？」

「昨日から約束しててさ。大きな食堂だからびっくりしたよ！ で、食べる最中に兄貴から一人の話を聞いて。兄貴も助かつたつて感謝してたよ」

「ここにこと笑みを浮かべながら話す祥吾。

彼の話を聞きながら、琉奈は女子たちに囲まれているヒカルとは違う、自然な彼の笑顔を始めて見たなあ、とふと思つた。

「あ、お弁当……」

綾が祥吾の手にある弁当箱に目を留め、呟く。

「そうだけど……どうかした?」

「何つて訳じやないんだけど、うちの学校の男子って学食のパンとかで済ます人が多いから」「不思議そうに尋ねる祥吾に綾が説明する。

「そりなんだ。最初で勝手も分からなかなつて思つて作つてきたんだけど」「……作つてきた?」

琉奈が祥吾の言葉を反芻する。

祥吾は慌てた様子で、

「あっ、いや、母がね! 朝作つてくれて!」

と弁明するが、嘘で言い繕つているのは誰の目から見ても丸分かりだつた。

「すごい! 久留井くん、料理できるんだ!」

胸の前で両手を組み、目を輝かせながら綾が言つ。言い開きを諦めた祥吾は照れくさそうに笑つ。

「前に女々しい趣味だつて言われたことがあつて……。でも、美味しいものを作るのは好きだし、それを誰かが食べて、笑顔になつてくれるのを見るのも好きだから。俺の場合は主に兄弟なんだけど」「じゃあ、今日は兄弟の分も作つたの?」

琉奈が尋ねると、祥吾は「大したものじゃないけどね」と答える。「す『』いつ! こんなにカッコ良くて、しかも料理までできちゃうなんて! ますます女子にモテちゃうね!」

小さく拍手をしながら嬉々として話す綾。

「……セツ、かな。なら嬉しいけどね」

嘘っぽい。すごく。

琉奈は内心呟いた。

嬉しい、と答えた祥吾だが、琉奈にはその言葉が先ほどまでは違い、ひどく空虚に聞こえた。

「あ、ケイタイ鳴ってる」

急にそう零した綾は制服のポケットから携帯電話を引っ張り出す。そして、二つ折りの携帯電話を開き、着信相手を確認するなり、「ごめん! 桜井先輩に呼ばれたから、ちょっと行ってくんね!」と言つて足早に立ち去つてしまつた。

「あたしたちも教室に戻る?」

「……もし迷惑じゃなければ、もう少し一緒に話してられないかな? 席に戻ると……その、また囮まれそうだし」

「久留井くんって女子が苦手とか?」

申し訳なさそうに雑談の相手を懇願する祥吾に、琉奈は素朴な疑問を口にする。

「そういうわけじゃないけど……ああやつて大人數に囮まれるのはちょっと。まして、前の学校は男子校だつたし、兄弟だつて男しかいないし」

「そういえば、お兄さんつてすごく明るい人なんだね」

兄弟、という単語から祥吾の兄である久留井誠一の人懐っこい笑顔を思い出し、琉奈が言つ。

「久留井くんもだけど、お兄さんも有り得ないレベルでカッコイイから、初め緊張しちゃつたけど、すごく接しやすいっていうか、人当たりがいいっていうか」

琉奈の感想に、祥吾は恥ずかしそうな笑みを浮かべる。

「馴れ馴れしかつたんじゃない? 『ごめんね、悪い人じゃないんだけど』

「ううん。話しててこっちまで楽しくなっちゃつた。弟さんもあんな感じなの?」

「弟は……あ、彰つて言つんだけど。そうだなあ……掴みどころがないっていうか。あいつを一言で表すのは難しいな。まあ、機会があれば紹介するね。飛鳥川さんはお兄さんとかいるの?」

祥吾の問いかけに、琉奈は少し考えてから首を横に振る。

「あたしは一人っ子。だから、久留井くんみたいな兄弟がいるのが羨ましいな」

「そうかな？ 兄弟いると大変だよ。夕飯の時はじょっちゅうおかずの争奪戦が起きるし、それが終わると今度はテレビのリモコン争奪戦！ 毎日大変なんだから！」

愚痴を言いながらも笑顔を絶やさない祥吾を見つめる琉奈。その顔には微笑みが浮かんでいるが、その瞳の奥に深い悲しみを湛えている。

しかし、話に夢中の祥吾はそのことに全く気づいていない。

二人の会話は午後の授業開始を告げるチャイムが鳴るまで続いた。

「昼休み、あいつと何話してた?」

放課後。

机を移動させた後の教室を箒で掃いていた琉奈に、雑巾を手にしている秋川浩太がおずおずと尋ねる。

ちなみに浩太は昼食をいつもバスケット部の仲間とともに、琉奈と綾とは一緒にいなかつた。

「あいつって……久留井くん? 別に大した話はしないよ」

答えながら、琉奈は教室近くの廊下で、相変わらずミーハーな女子たちに囲まれている久留井祥吾に目を遣る。

祥吾は女子たちに笑顔で対応しているものの、昼休みに見せていたそれより硬そうに琉奈には思えた。

「どんな話した?」

「ホントに普通の雑談だつてば。久留井くんの兄弟の話とか、料理が得意だとか。そんな話だよ」

「料理……。アスカは料理ができる奴が好き?」

「料理ができるから好きってことにはならないけど。でも、できないうちはできる方がいいかなとは思つけど」

「……」

「……?」

急に深刻な表情で俯き、何やらぶつぶつと呟く浩太。浩太を不思議そうに見つめる琉奈。

そんな二人の肩を、鞄片手の松下綾が立て続けにポン、叩く。

「今は掃除の時間だよ、お一人さん! いちやつくのは掃除が終わってから、『じゅっくり』

軽快なテンポでからかいの言葉を並べる綾。

真に受けて顔を赤くする浩太に対し、琉奈は呆れた表情でため息をついた。

「だから、そういうんじゃないって何度も言つてるでしょーに。浩太が久留井くんと何話してたんだってしつこいから、内容を少し話ただけ」

琉奈に自分との恋愛関係を完全否定され、浩太が激しく落ち込む姿を綾の視界が捉える。しかし、その姿は琉奈の目には映つてないようだ。

こういった光景に何度も出くわしているが、それでもめげない浩太に綾は最近、尊敬の念すら覚えている。

ある意味、未だに浩太の想いに気付かない琉奈の鈍感さにも。

「あたしは今週掃除当番じゃないから、部活に行くね。じゃ、掃除頑張つて。……あ、そうそう」

綾は手招きをして琉奈を呼び、彼女の耳元に唇を寄せ、「昼休みの後、江田さんがアスカのことすごく睨んでたよ」と耳打ちした。

琉奈は眉を顰め、祥吾を取り囲んでいる一団の中心にいるクラスメイトの女子を見つめた。

飛鳥川琉奈は久留井祥吾に一つ、嘘をついた。

どうして嘘をついてしまったのか。

その理由は琉奈本人にも分からない。

嘘をつく必要なんてなかつた。

けれど、楽しげに話す祥吾の姿を見て、琉奈は本当のことを話しあくなくなつた。

夕食。家族揃って食卓を囲む。

琉奈の向かいに座るのは、いつも穏やかな父。いつも優しい母。

そして隣には、琉奈の前ではいつも不機嫌な兄。

「ごちそーさん」

兄はさつやと夕食を済ませ、琉奈が視界に入らない位置にあるソファに座る。

側に琉奈がいることも、姿が見えることさえも腹立たしいようだ。

「今日は学校どうだったの？」

琉奈を気遣つてか、母が彼女に尋ねる。

「今日はクラスに転校生が来たよ。すごいイケメンで、クラスの女子の人気独占状態なの」

「そんなにカッコイイのか。お向かいの浩太くんよりもか？」

「ちょっと、お父さんまですぐ浩太を引き合いに出すし。あいつは

」

ただの幼馴染なの、という言葉を次ごとにしたが、突然テレビの音量が急激に大きくなり、親子三人の会話はアナウンサーにかき消された。

「……おなかいっぱいになっちゃった。『ごちそーさま』

琉奈は箸を置き、静かに席を立つ。

そして、一切自分と視線を合わせようとしない兄の背を一瞥し、二階にある自室へと急いだ。

物心付いた時にはすでに兄の対応は冷たかった。

父と母と話したりする時は普通なのに、琉奈の姿を目にした途端、兄の眼には一瞬のうちにあらゆる負の感情が宿る。

何故兄は自分に冷たいのか。

かつて琉奈が理由を尋ねた時、兄はこう答えた。

存在自体がムカつくから。

じゃあどうすればいいのかと訊くと、兄はこう答えた。

死ね。

事実、兄は自ら手をかけることはしないものの、海で琉奈が溺れてても無視したし、家の階段で誤って転んで頭を強打し、意識が朦朧

隕としている琉奈を放つてテレビドラマを観ていた。

兄は琉奈という存在が消滅することを願っている。

兄は大学進学を機に家を出ようと想えていたが、志望校に「ことじ」と落ち、結局近所にある無名の私立大学に通っている。

不合格通知を見る毎にどんどん落ち込んでいく兄の姿を見ていて、琉奈はとても気分が良かつた。

両親は兄の態度や仕打ちについて怒ることはない。

両親は兄に対して、何か後ろめたいことがあるだろつか。

そう思うものの、実際に訊いたことはない。

気にはなるが、訊いてしまったら両親との関係まで壊れてしまいそうな気がした。

一つ、嘘をついた。

けれど、他は全て嘘じゃなかつた。

「……久留井くんみたいな兄弟がいるの、羨ましいな」

ドアを閉めた自分の部屋で、昼休みに久留井祥吾に言った言葉を繰り返す。

久留井くんみたいな“仲のいい”兄弟がいるの、羨ましいな。

#古松者（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日 の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

三人目

1 - 4

「アスカ……おはよ……」

翌日。

登下校に使つてゐる自転車を駐輪スペースに置き、鍵を掛けた飛鳥川琉奈の背中に、元気のない声がかけられた。

琉奈は振り返り、声の主の姿を見て絶句した。

そこにいるのは、生氣をすっかり失い、目の下ははつきりとした隈まで作つてゐる松下綾だつた。

「ど……どうしたの、綾！？」

「後で説明するよ……。一緒に教室行こ」

「う、うん……」

琉奈は負のオーラを漂わせている綾と共に、自転車の籠に入れた鞄を肩に掛け、校舎へと歩を進める。

昇降口へ向かう途中、突然二人の鼓膜を劈かんばかりの歓声が下駄箱の方から聞こえてきた。

「な、何！？」

「特ダネの匂いがする！ 行つてみよ、アスカ！」

先ほどまで、世界中の不幸を背負つたかのような顔をしていたのが嘘のように元気を取り戻し、テンションのギアを一気にトップに入れた綾に引きずられ、琉奈も歓声の中心へと向かう。

「……あつ、アスカ！ 見てみ！」

「わつ……！」

足を止め、何かに見惚れている女子の波を搔き分けた先にいたのは、靴から上履きに履き替え、廊下を歩く三人の男子生徒たち。

そのうち一人の顔に、琉奈も綾も見覚えがあつた。

「あ、琉奈ちゃん、綾ちゃん。おはよー！」

三人のうちの一人が琉奈と綾に気づき、暢気に手を振ってきた。

周囲の視線が一気に琉奈と綾に集中する。

二人はいたたまれず、とりあえず声をかけてきた男子生徒　久

留井誠一に小さく手を振り返す。

誠一の隣に佇む男子生徒　弟の久留井祥吾は手を額に当て、呆

れ果てた様子で頭を振る。

「？　どうしたの？　元気ないよ、一人とも。特に綾ちゃんは隈す
ごいし」

周囲の様子が目に入つていらないらしい誠一は一人の下へ歩み寄り、
心配そうに尋ねる。

「大丈夫です、ちょっと寝不足なだけで……」

「だめだよ、ちゃんと寝ないと！　女の子はいつも元気じゃないと
！」

にこりと優しげに微笑む誠一。それを見た綾は　何故か周りの
女子まで　頬を朱色に染める。

「おはよ、飛鳥川さん」

綾と誠一のやりとりをほんやり見ていた琉奈に祥吾が声をかける。

「おはよう、久留井くん」

「ごめんな。うちの兄貴、考えるよりまず行動しちゃうタイプでさ
……」

「ううん、大丈夫。……後ろにいるのは弟くん？　名前は確か……」

「彰だよ。彰、こっちおいで」

祥吾に呼ばれ、中等部の制服に身を包んでいる男子生徒が琉奈の
前にやってきた。

垂れ目が印象的な、彰と呼ばれた男子生徒は一人の兄同様顔立ち
が整っているのだが、彼は特に、神の手で造形されたかのような美
しさを持つた顔立ちをしている。また、兄たちよりも長身で、手足
も長い。

彰を茫然と見つめるクラスメイトを、祥吾が弟に紹介する。

「彰。彼女は俺と同じクラスの飛鳥川琉奈さん」

「は……初めまして。飛鳥川琉奈です」

「……ども。久留井彰です。名前は母親が付けましたが、由来は分かりません」

低く小さな声で久留井彰が言つ。
俯きがちの顔に表情はない。何か気に障ることを言つてしまつたのかと琉奈は心配になつた。

「気にしないでね。こいつ、すんごく人見知りなだけだから」

琉奈の心に不安が渦巻いたことを察したらしい祥吾がそう言つてフォローする。

「じゃあ、また後でね」

祥吾はそう告げ、周りの女子とあれこれ話している誠一と自分の名前についてぼそぼそと何かを呟いている彰を連れ、その場を後にした。

「なんか……一人ずつでも十分立つのに、三人揃うとすごいね。ただの廊下もレッドカーペットに見えるっていうか。……綾、聞いてる?」

「え? あ、『ごめん。聞いてる聞いてる』

廊下の向こうに消えていく三人をぼーっと見ていた綾が琉奈の声で我に返る。

絶対聞いてなかつたでしょ、と琉奈は綾を小突く。

「久留井くんの弟、すんごい美形だつたね」

「え? そうなの!? 全然見てなかつた」

綾の返答に琉奈は「へ!?」と素つ頓狂な声を上げる。

「イケメンレーダー持つてる綾にしては珍しいね」

「誠一先輩の話が面白くて。そっちほとんど見てなかつたよ」

「そつか。つてか、誠一先輩つて……」

「あ、話の途中でね。先輩、あたしらのこと名前で呼んでるでしょ?だから、自分の中でも名前でいいよって。さすがに先輩をくん付けて呼べないから、名前プラス先輩つてことに落ち着いたの」

「なるほどね。そういえば、初めて会った時から名前で呼ばれてた

つけ

綾に指摘され、琉奈は自分が誠一に名前で呼ばれていることを初めて自覚する。

それくらい、彼に名前で呼ばれることに違和感を覚えなかつた。まして琉奈は親しい友人である綾にすら、名前ではなく苗字から来るあだ名に呼ばせているのに。

「先輩は誰に対しても気さくに名前で呼んだりしてそうだよね」「だね。ああいうことを自然にできる誠一先輩ってすごいなあ……」ぽんやりと遠くを見つめる綾の瞳には、大きなハートマークが浮かんでいる。

それを見た琉奈は、また始まつた……とぼやいた。

三時間目。体育。

今日はバスケットボールの授業。

男子と女子に分かれ、それぞれ5～6人のチームを作り、短時間の試合を行う。

琉奈と綾は三人組の女子グループと組むことになった。

数分の練習時間の後、体育教師が作った対戦表にしたがつて試合を進めていく。

「うちらがBチームで、対戦はAチーム……江田さんたちのトコだね」

貼り出されている対戦表を見た綾が言つ。

対戦相手のチームは、どんな時も同じメンバーで一緒にいる、典型的な女子グループだ。

特に久留井祥吾に付きまとつてゐるそのグループの中心人物が江田留菜である。

一年生の時は彼女と別のクラスだったが、彼女とその友人がクラスメイトの女子をいじめ、転校にまで迫いやつたという噂は知つて

いた。

琉奈も綾も正直あまり関わりたくない人物である。

そして、琉奈が他人に自分のことを「アスカ」と呼ばせている理由も彼女にある。

同じ「ルナ」の音の名前を持つ者として、一緒にされたくないのだ。

だから彼女は親しい人には名前の琉奈ではなく、苗字の頭二文字のアスカ、と呼んでもらうことにしている。

とはいって、久留井誠一には先に名前で呼ばれてしまつたが。

「おーい、女子と男子のそれぞれAとB、試合始めるから集まれー！」

体育担当の男性教師がボールをドリブルさせながら大声で呼びかける。

整列のために慌てて駆け出す琉奈と綾。

ふと視界に入った、男子の試合を行うコートの中に、久留井祥吾の姿があるのが目に留まつた。

三人目（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

甲高いホイッスルの音が体育館中に響くと同時にバスケットボールが宙に放られ、それぞれのチームの代表がボールに手を伸ばす。弾かれたボールは琉奈のチームメイトの手に渡つた。

チームメイトはドリブルをしながら敵陣へとコートを駆けていく。途中、相手チームのディフェンスに進路を阻まれたチームメイトは近くにいた綾にボールをパス。

綾はドリブルしながら更に進んでいく。

「ねえ、飛鳥川さん」

琉奈をマークしている江田留菜が声をかけてくる。

「何？」

「祥吾くんとはどういう関係なの？」

「……はあ？」

「はあ、じゃなくて。ちゃんと答えなさいよー。」

「今そんな話してる場合じゃないでしょー！」

綾の側を駆けていく琉奈。

追い抜きざまにパスされたボールを受け取る。

「人の気も知らないで、抜け駆けなんて信じらんないー！」

「ちょっと……意味分からんないんだけど」

江田留菜が投げつけてくる言葉に呆れつつ、琉奈はジャンプショットを放つ。

放物線を描いたボールはゴールリングにぶつかり、相手チームの手に渡る。

全員、一斉に反対側のゴールへと駆け出す。

「さつきだって祥吾くんのこと見てたじやない！？」

「一瞬目に入つただけだってばー！」

いい加減、他人の被害妄想に構うのも面倒臭くなつてきたのか、

琉奈はスタミナ無視で走るスピードを上げた。

「！ 待ちなさいよっ！」

慌ててそれを追いかける江田留菜。

彼女の手が琉奈の着ているジャージの裾に掛かつた。

「 ッ！」

バランスを崩した琉奈の体が一瞬宙を舞う。

次の瞬間、琉奈は派手な音を発して体育館の床に倒れこんだ。

「アスカ！？ 大丈夫！？」

試合そっちのけで駆けつけた綾に、琉奈は「大丈夫だから」と答える。とはいえ、全身に痛みが走った琉奈の表情は険しく、眉間に皺が寄っている。

「飛鳥川、大丈夫か？」

体育教師もやって来る。

体育館中の視線を浴びた琉奈は恥ずかしそうに立ち上がった。

「すみません。大丈夫です。試合の続き、始めて下さい」

「そうか？ ならいいが。無理はするなよ」

体育教師はそう忠告すると、試合再開のホイッスルを鳴らす。再び走り出した琉奈を江田留菜は無言で見つめていた。

「ひつどい女！ 信じらんない！」

試合が終わり、休憩のために空いているスペースに腰を下ろすなり、松下綾が叫んだ。

「ちょっと、綾！ 声が大きいってば」

「ドリブルの音で聞こえないよ！ 見た！？ アスカのことを見つめるあいつの目！ あんたが勝手に転ぶから悪いのよとでも言わんばかりでさ！ ああもう思い出しだけでムカつく！！」

「まあまあ、あたしはちょっと擦りむいたくらいだから……」

大声かつ早口で一気にまくし立てる綾を、転ばされた本人である飛鳥川琉奈が宥める。

もし綾が肉食獣だつたら今頃、江田留菜を噛み殺していることだろつ。

「ホントに信じらんない！ 何様！？ きっと水道管レベルのぶつとい神経してんだろうね！？」

「水道管って……すごい例えだね」

「いや、もつと太いかも……。水道管より太いのって何だろつ？」

「うーん、光通信用の海底ケーブルとか？」

「それ何……？」

「アスカ！ さっきは大丈夫だつた！？」

会話の方向がずれ始めた琉奈と綾の間に、男子の試合を終えたばかりの秋川浩太が割り込んでくる。

「浩太！ うん、ちょっと擦りむいたくらいでたいしたことないよ。そつちの試合、どうだつた？」

「もちろん勝つたよ。でもさ、あの転校生があんまり使えなくて。大変だつたよ」

「秋川と同じチームだつたんだ？」

「うん。すぐスタミナ切れるもんだから、使いもんにならなくて。それでもギャラリーの女子は、あいつがボールを持つだけでワーキヤー言つてさあ」

話しながら、江田留菜を中心とするグループに早速囮まれている久留井祥吾を睨む浩太。

「アイドルが何か食べたり飲んだりするだけで歓声があがるのと同じだと思つよ。でも、久留井くんにも苦手なことつてあるんだ。勉強すごくてできるし、短所なんてなさそつたけどなあ。誠一先輩共々

「松下、誠一先輩つて誰？」

「久留井くんのお兄さん。三年生」

「え！？ 知り合い！？ しかもアスカも！？」

「うん。色々あつてね。すぐ明るい人なんだよ」「で、イケメンなんだよね」

琉奈の説明に綾が補足する。その表情は新しいおもちゃを見つけた子供のそれだ。

綾の言葉に「そつそつ」と、何の悪気もなく素直に同意する琉奈。浩太の顔はすっかり青ざめている。

「？ どうかしたの、浩太？ 顔色良くないよ？」

「いや……何でもないよ。ホントに何でもな」

突然、綾と浩太の声が遠のいていくのを琉奈は感じた。

速攻、と叫ぶ声も。ボールをドリブルする音も。外の雀の泣き声も。

体育館中に充満する熱気さえも。

やがて訪れる、全身が沼の中に沈み込んでいく感覚。來た。

またいつものあれだ。

こうなった以上、またあの古びたアパートの一室の情景を田にし、

その後自然に戻るまで待つしかない。

そのはずだった。

「飛鳥川さんっ！！」

気が付くと、琉奈の意識は体育館に戻っていた。

……違う。戻ったんじゃない。

琉奈はそう確信した。

戻らされたのだ。

琉奈の腕を強く掴んでいる久留井祥吾によつて。

敵視線（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

「……あれ？ 保健の先生いないや。まあ、その方が好都合だけど」
飛鳥川琉奈は久留井祥吾に連れられ、保健室へとやつて来た。
バスケットボールの試合中に転倒したショックで頭がくらくらするみたいなので、などと祥吾が体育教師にペラペラと嘘を並べ立て、琉奈を保健室に連れて行く許可を取り付けて、半ば強制的に連行したのだ。

自分と祥吾を見つめる、クラスメイトたちの唖然とした顔が琉奈の脳裏に浮かぶ。

江田留菜の般若のような形相も。

ますます面倒なことになる予感を抱き、嘆息する琉奈。
それに気付いたらしい祥吾が「どうしたの？」と問いかけてくる。
「ううん、何でもない。それより……久留井くんはどうしてあたしをあそこから戻せたの？ ていうか久留井くんはあれが何か知ってるの？ あれって一体何？」

琉奈は質問を一気にぶつける。

今まで散々困らされてきた現象について知っている人間がようやく、初めて現れた。

その嬉しさから、矢継ぎ早に訊かずにはいられなかつた。

興奮気味の琉奈に、祥吾は両手の手のひらを向け、「落ち着いて」と宥める。

「どこから説明すればいいのかな……。とりあえず、飛鳥川さんが連れて行かれそうになつた場所は、普通の人間が行くべき場所じゃなくて、本来は死んでから行く場所なんだ」

「死んでから……！？ それって天国ってこと？ 見る風景は毎回天国つて感じのしないアパートだけど」

「天国とか地獄って言う概念は実際のところ、死後の世界を知らない生者が懲罰や宗教的に利用するために作つたとも言つべきものだからね」

「……んん?」

「要するに、実際は天国も地獄もないってことだよ」

祥吾が説明を簡単にしてことと、琉奈の思考を混乱の渦から掬い上げる。

「そうなの!? 天国つてないの!?

「ないない。至極真っ当に生きた魂も、殺人を犯した魂も、死後は全て同じ場所に送られるんだよ。とはいって、そういう犯罪を犯した魂は穢れが溜まって、次第に魂 자체のエネルギーが減っていくんだけど。で、最期は転生する力すら失つて消滅したり、他の魂のエネルギーにされて消滅つてことになるわけ」

祥吾は教科書を暗証するようにすらすらと説明する。

が、それを聞いている琉奈は話の内容をいまいち把握しきれていないらしく、彼女の顔には大きなハテナマークが書いてあった。

「できれば全部きちんと説明したいんだけど、もうすぐ三時間目が終わっちゃうし……。何も予定がないんだつたら、今日の放課後にも教室かどつかで話せないかな?」

「予定はないけど……学校では難しいと思うよ。だつて久留井くん、学校じゃ女子に追いかけられっぱなしでしょ? 落ち着いて話せない可能性がなくない?」

琉奈の指摘に祥吾は顔を顰め、「確かに……」と答える。

現に今日も朝からずっと、休み時間の度に女子に囮まれ、追いかけられていた。

校内に落ち着いて話せる場所はなさそうだった。

「俺の代わりに兄貴に説明してもいいってのは……無理だよなあ、多分」

「お兄さんも知ってるの?」

「うん。でも、向こうも俺と似たような状態っぽいし。彰は話をす

ぐに脱線させそうだし……そうだ！」

祥吾は保健医の机の上にあるボールペンを手に取り、側にあるメモ用紙に何かを書き付ける。

そして、書き終えたメモを琉奈に手渡した。

琉奈は渡されたメモに視線を落とす。

「これ……住所？」

「そう、うちの住所。下校途中に寄つてもらつていい？」

「えつ！？」

「うちでなら落ち着いて話せるでしょ？」

「それはそうかもしないけど……」

「あ、できれば少し経つてから来てもらえる？　いろいろ準備があるからね」

「えつと……でも……」

「飛鳥川さん」

祥吾が改まって琉奈を呼ぶ。その表情は真面目かつ真剣そのものだ。

「正直、君の状況は楽観視できるもんじゃないんだ。だから、早めにケリをつけないといけない」

琉奈は余命宣告でもされたような気分だった。

握り締めているメモ用紙が、琉奈の手の中でクシャ、と鳴いた。

昼休み。本日も快晴。綿菓子のような雲が蒼穹をふわふわと漂う。

「え！？ 帰りに久留井くんの家に行くことになった！？ 何それ！？ なんでもまたそ もがつ」

驚きのあまり大声で叫んだ松下綾の口を、琉奈は全力で塞ぐ。

「ちょっと、声大きいって！」

「ごめんごめん、あまりの超展開にびっくりして……」

「江田一味の誰かに聞かれたらどうすんの！？」

「江田一味つて……もはや敵だね。って、そんなことより！ なん
でそんなことになつたの！？」

綾は手にしている箸をマイクのようにして琉奈の口元に寄せる。
「あたしの体に起ることについて久留井くんが説明してくれるつ
て言うんだけど、学校じゃ落ち着いて話せる場所がないじゃん。で、
それなら久留井くんの家で話そつてことになつたの」

「なるほどねえ。確かに久留井くんは四六時中女子に付きまとわれ
ているし、誠一先輩も追いかけられてるみたいだし、弟の彰くんも
お兄さんたちと似たような状況つて話だしね」

「そりなんだ。……つていうか、その情報はどこから？」「

「ふつふつふ。新聞部の情報網を侮るながれ」

綾は不敵な笑みを浮かべ、ついでにブイサインまで作る。

「でさ……綾も今日は部活バスして一緒に来てくれないかな……？」

「え？ あたしも行つていいの！？」

予想外の申し出に、綾は目を見張る。

「うん。できれば、だけど。無理だつたらいいんだけど……」

「それは大丈夫だけど。なんでもまた？」

「なんて言つか……クラスメイトの男子の家に一人で行くのがちょ
うと」

「秋川の家は何度も行つたことがあるんでしょ？」

「浩太とは昔からお互いの家を行き来してるし、浩太ん家の家族と
も知り合いだから、今回とは違うよ」

「ふうん。アスカもなんだかんだ女子つてことだね」

綾はしみじみと呟きつつ、内心「秋川、哀れなり」と独りごちる。
「学校でよく一緒にいるのは綾だから、綾にも知つてて欲しいって
話したら、久留井くんもオッケーしてくれたし」

「よく一緒にいるつてのなら、秋川も誘つてみたら？」

「うん、後で訊いてみようかなつて。でも、あいつも部活あるし、
どうかな……」

「多分大丈夫だと思うよ。十中八九、行くつて即答するよ」

「そうかなあ？」

鶏肉のから揚げを箸で転がしながら零した琉奈の言葉は、穏やかな陽気の中に溶けていった。

下校した飛鳥川琉奈と松下綾、そして綾の予想通り、二つ返事で久留井家への同行を同意した秋川浩太の三人は、久留井祥吾から渡されたメモに書かれている住所を頼りに、彼の自宅へと向かつた。途中で道が分からなくなり、携帯電話で調べたりしつつ自転車を走らせることが約二十分。

三人は住宅街の一角に位置する、とある一軒家に到着した。

灰色の外壁に黒い屋根。こじんまりとしたガレージに停められている白の軽自動車は、きちんと洗車が行き届いている。玄関付近には花壇があり、色とりどりの花々がそよ風に揺れている。

インターホンの横に「久留井」という表札が掛けられたその家は何の変哲もない、ごく普通の一軒家だった。

近くに自転車を停め、簡素な門の前に立つ三人。意を決し、琉奈はインターホンを鳴らした。

『はい？』

程なくインターホンの向こうから女性の声が返ってきた。

「あ、あの……私、久留井くんのクラスメイトで、飛鳥川と申しますが……」

『クラスメイト……あ、祥吾が言つてた子たちね。今そつちに行かせるからちょっと待つてて頂戴』

そう告げると、女性の声は切れた。

「今、久留井くんのお母さんかな？」

「かな。ずいぶん若そうな声だったね。あれだけのイケメン三人のお母さん……美人かな？」

琉奈の問いに綾が問い合わせる。浩太は不機嫌そうに唇を歪める。

そういうしていると、久留井家の玄関のドアが開かれ、中から久留井誠一が現れた。

「ごめんね、待たせちゃって。祥ちゃんは今お茶の準備してるから、先に入っちゃって」

相変わらずの明るい笑顔で三人に呼びかける誠一。

三人はその言葉に応じ、門を開けて歩を進める。

「「「お邪魔します」「」」

玄関に入り、三人は声を揃えて挨拶する。

「どーぞどーぞ。……ところで、君はどちら様?」

三人を自宅へ招き入れた誠一が、ストレートに浩太に尋ねる。

「秋川浩太といいます」

「彼も私の友人なんです。だから、一緒に話を聞いてもらいたくて」浩太の自己紹介に琉奈が補足説明を加える。

「そりなんだ。俺は三年の久留井誠一。よろしくね。で、浩太くんはどうちの彼氏なの?」

思いもよらない誠一の質問に、浩太は赤面し、「へ!?」と素つ頓狂な声を上げる。

「どっちの彼氏でもありませんよ! あたしと浩太はただの幼馴染で、綾と浩太はただの友人。それだけです」

お決まりの説明をする琉奈。

浩太もいつも通り、がっくり肩を落としている。

誠一は「ふうん、そりなんだ」と納得の意思を示しつつも、「でもさあ、浩太くんの方は琉奈ちゃんのこと好きなんですよ」と綾にこつそり耳打ちする。

綾は苦笑しながら頷いた。

協力者（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

誠一に連れられ、琉奈・綾・浩太の三人は久留井家のリビングへやつて来た。

「いらっしゃい、飛鳥川さん、松下さん、秋川くん」

三人の姿に気付いた祥吾が声をかける。

「じめんね、まだ準備ができてなくて。適当に座つてもらえる?..」

「うん、ありがとう」

琉奈が礼を言い、近くのソファに腰掛ける。

リビングにはソファやダイニングテーブル、テレビなどの家具が置かれており、それらは黒や茶色などのシックな色で統一されている。

ソファの側にあるコンポの横に佇む棚には数多くのCDが収納されている。

有名な日本人アーティストのものから、聞いたことのない外国人のもの、中には演歌もある。

「うち、音楽の好みがバラバラでや」

琉奈がCDを注視しているのに気付いたらしい誠一が言う。

「邦楽のは俺とか恭子さんの。洋楽はほとんど祥ちゃんのかな。彰が好きなのはゲーム音楽と演歌。変わってるでしょ?..」「すごい組み合わせですね」

琉奈が笑いながら答える。

「誠一先輩、恭子さんって誰ですか?」

「ああ、母親だよ。久留井恭子っていうの」

「お母さんを名前で呼んでるんですか?...?」

綾が不思議そうに尋ねる。

誠一は一瞬言葉に詰まるも、「うひつて変わり者ばつかだからね

といつもと変わらない、明るい口調で答えた。

「おまたせー」

そんな台詞と共に、ティーポットとカップを載せたトレイを手にした祥吾が四人の元へやつて来る。

祥吾の後ろには、同じくトレイを持った女性が一人。

「初めまして。母の久留井恭子です」

ソファ近くに置かれたテーブルにトレイを置きながら、女性久留井恭子が琉奈たちに自己紹介する。

「飛鳥川琉奈と申します」

「松下綾です！」

「秋川浩太といいます」

三人はしゃちほこばつて挨拶した。

思わず姿勢を正さずにはいられないほど、久留井恭子は見目麗しかつた。

彼女の輪郭をなぞるのは、短くも艶やかな黒髪。彼女の顔の白さを際立たせている。穏やかな目元と、紅を差している唇の右下にある小さなホクロが印象的な麗人だ。

「久留井誠一です！」

「知ってるわよ！」

琉奈たちを真似て自己紹介した誠一に、恭子が素早くシッコミを入れる。

「お菓子、遠慮しないで食べてね。……ちょっと呑わないかもしぬくもないかもしねりだけど」

そう複雑に忠告しながら恭子が三人に差し出したのは、籠の中に大量に入った煎餅。

「なんで煎餅買うかな……」

ティー・ポットからカップに紅茶を注ぎながら祥吾が愚痴を言つ。

「だつて、お茶に合うお菓子って言われたらお煎餅を思い浮かべるじゃない、誰だって！」

「恭子さん、俺が紅茶好きなの知つてるでしょ！？ なんで緑茶を

思い浮かべちゃったの！？」

「違うわよ、煎茶を思い浮かべたの！」

「そんなのどっちでもいいわい！」

「いいじゃない、お煎餅も美味しいんだから……じゃ、『むりくりね』

自分の主張を終えてすつきりしたのか、恭子は一方的に話を切り上げ、キッチンへと戻つていった。

「……なんか、色々面白いお母さんだね、久留井くん」

琉奈は素直な感想を述べる。祥吾は疲れた表情で「まあね……」と答えた。

綾と浩太は茫然と恭子がいた場所を見つめ、誠一は必死に笑いをこらえている。

「……わ。お茶どうぞ」

「祥ちゃんのお茶は格別だよ！」

祥吾と誠一薦められるまま、琉奈たちは出された紅茶や煎餅に口をつけた。

「そういえば兄貴、彰はまだ帰つてないの？」

「うん。何してんだろうな？　まいなくとも大丈夫じゃない？」

「……だね。あいつがいると話が脱線しかねないし。さてと」

祥吾は真剣な表情で三人へ向き直る。

「じゃあ、飛鳥川さんが襲われてる現象について説明するね。多分長くなると思うけど、出来る範囲できちんと説明するから」

「分かつてると思つけど、飛鳥川さんの身に起きてることは、常人にはあり得ないことなんだ。あり得ないし、あつてはならない」「あつてはならない……」

琉奈は祥吾の言葉を繰り替える。

「じゃあ、なんでその、あつてはならないことがアスカには起きるんだ！？」

「順に説明していくから」

興奮気味の浩太に誠一が話しかける。

祥吾は話を続ける。

「飛鳥川さんが引き込まれている世界は違う次元にある世界で、そこには本来、死者の魂しか存在しない世界なんだ」

「つてことは……天国！？ それとも地獄……とか？」

綾の質問に祥吾は首を横に振る。

「天国とか地獄っていうのは、あくまでも生者が作り出した架空の概念で、実際には存在しないんだよ。死者の魂はどんな悪行も善行も関係なく、全て一つの場所に送られる。そこは……そうだな、鏡の向こうの世界とでも考えてくればいいかな。生者に干渉されることはない、異次元の世界。

田の差すことのないその世界を、俺たちはトコトコ国って呼んでる」

「トコトコ国……」

琉奈たちは口々に復唱する。

祥吾は更に説明を続ける。

「トコトコ国は魂の集積所みたいな役割を果たしてるんだ。トコトコ国に辿り着いた魂は、トコトコ国の中に生前の自分と深い関わりのある場所を作り出し、その場所に居ついて次の転生の時を待つ。トコトコ国はそういう場所なんだ。

そして、飛鳥川さんが引きずり込まれた世界こそ、このトコトコ国つてわけ

「次の転生を待つ場所……。でも、どうしてあたしがそんな場所に？」

「それについて、俺たちも分からない点があるんだ」

琉奈の疑問に答えたのは誠一だ。

「トコトコ国は魂のエネルギーが大きく作用する世界でね。

元々トコトコ国は何もない、広く暗いだけの空間だったんだ。けど、次第に多くの魂が集まり、その魂たちが記憶している生前の風景が次々と作られていった。その結果、今のトコトコ国は様々な建

物とかが無秩序に、流動的に構築されている状態になつてゐる。

魂があらゆる事象に関わるトコロノ国においては、例えば魂が現世に行きたいと願えば、魂の状態ではあるけど行けるし、逆に誰かをトコロノ国に引きずり込みたいと願えばそれも叶う

「じゃあ……誰かの魂があたしをトコロノ国に引きずり込もうとしてるってことですか……？」

「そういうことだね。神隠しつてあるでしょ？あれって実は死せる魂が生者をトコロノ国に完全に引きずり込むことを言つんだよ」

そう説明した後、誠一は手にした煎餅を前歯でパキリと割る。

「で、飛鳥川さんのケースで俺たちが分からぬ点が二つ

祥吾はそう言って、人差し指と中指を立てる。

隣で誠一が握り拳を作り、「勝つた！」と呴く。「違うでしょ」と祥吾がツッこむ。

「一つは、誰の魂が飛鳥川さんをトコロノ国に引きずり込もうとしてるか。……心当たり、ない？ 身内で君に強い思いを抱いて亡くなつた人とか」

琉奈には心当たりはないらしく、彼女は小さく首を傾げた。

「……そつか。まあ、それについてはこれから調べるとして。二つ目は、飛鳥川さんが現世に戻つてきてる点」

「アスカが戻つてきちゃマズイってのか！？」

「違う違う。そうじやなくて、どうしてこいつにに戻つてくることが出来るのかつてこと」

祥吾が慌てて浩太に弁明する。

「あそこまで引きずり込まれたら、普通はそのままトコロノ国から出られなくなつて野垂れ死に、っていうパターンになるはずなのに、飛鳥川さんは戻つてこれてる。それが不思議なんだよ」

「それも誰かの魂の意志、とか……？」

「あり得なくはないけど……まだ何とも言えないね」

綾の問いかけに答え、祥吾は紅茶を口にする。

「ひさやつて一気に説明されても良く分からぬかもしけないけど、

いつか全てをからだで実感せざるを得ない時がくると思つ。でも、安心していいからね、琉奈ちゃん。その時は俺たちもついてるから

誠一が力強く宣言する。

琉奈はその言葉を信じ、深く頷いた。

常住国（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

「……一つ、訊いてもいいですか？」

おずおずと手を上げ、綾が言つ。「何?」と誠一がそれに応じる。
「誠一先輩や久留井くんは、どうしてそんな話を知ってるんですか?」

「……わたくしの話の中に、現世に戻つてしまつた魂や、琉奈ちゃんのように生者をトロツノ国に引きずり込む魂が出てきたよね。そいつらの多くは生者に危害を加えたり、時には死に至らしめることがありますからね。」

俺たちの一族は古くから、人々をそういう悪い魂から守つてきたんだ。だから、こういったことには詳しいわけ

「一族……つてことは、先輩たちも悪い魂から人を守ることができるんですか?」

「もちろん。オレにも祥ちゃんにも、彰にもね。だから、オレたちはその力で琉奈ちゃんを守る」

「……もし、狙われるのがあたしでも、同じように守つてくれますか?」

「? 当然! 綾ちゃんのことも守るよ、全力で」

綾の質問の意図を図りかねたらしい誠一は戸惑つた表情を浮かべたものの、すぐにいつもの笑顔に切り替え、断言する。

その言葉を聞き、すっかり頬を紅潮させて喜ぶ綾を見た琉奈の胸を、ある考へが過ぎた。

に移しつつ、紅茶と煎餅をみんなで堪能し終えた時、太陽はその身をコンクリートの山々の向こうにすっかり沈めていた。空は宝石のように輝く星たちを塗した漆黒の帳に完全に覆われている。

「「めんね、長居しちゃつて」

履いた靴のつま先を地面に数回、軽く打ちつけながら琉奈が謝った。

「つうん。わざわざ来てくれてありがとね。帰り、送つていかなくて大丈夫？」

祥吾の気遣いを、琉奈は首を振つて遠慮する。

「まだそこまで遅い時間じゃないし、みんな帰り道はほとんど同じだから」

「浩太くんもいるもんね」

琉奈が挙げた理由に誠一が付け加える。

急に自分の名前が出てきたことに驚いたのか、浩太はびっくりと体を震わせる。
「そうですね。まあ、久留井くんや先輩に比べたら頼りないかもしれないんですけど」

苦笑しながら琉奈が答える。

側でそれを聞いていた綾は、また浩太が落ち込むのではないかと思ひ、憐憫の視線を彼に向ける。

が、すぐにその目は小さな驚きに包まれることになった。

浩太は一切落ち込んではおらず、むしろ挑戦的な目で祥吾たちを見つめてすらいた。

「あたし、誠一先輩のこと好きになっちゃつた」

帰路の途中。

家路を急ぐ足止め、綾が突然言い放つ。

驚き、唖然としている浩太に対し、琉奈はやつぱり、と言わんば

かりの表情で溜息をついた。

「桜井先輩はどうするの？ 振るの？ まさか一股？」

「桜井先輩とはもう別れたの。昨日の夜、電話で振られちゃった。でも、思つてたよりはショックじゃなかつたんだよね。きっとあたし、屋上で初めて誠一先輩と会つた時から、桜井先輩より誠一先輩の方が好きになつてたんだと思つ」

「……そつか。なんとなくそんな気はしてたけどね」

「やっぱアスカにはバレたか。あたし、アスカに感謝してるんだ。アスカのおかげで誠一先輩との接点ができる。……アスカは大変かもしれないけど」

申し訳なさそうに俯く綾に、琉奈は優しく微笑みかける。

「そんなこと気にするなんて、綾らしくないよ」

「……それってあたしがいつも無神経つてこと？」

「あれ、自覚なかつたの？」

「アスカ～！？」

「うそそぞ。……応援、するからね」

軽口の応酬の後、琉奈が真面目な顔で言つ。

綾は心底嬉しそうな表情を浮かべ、「ありがと」ひと言答える。

浩太はそんな二人を見つめていた。

「俺、そんなに頼りない？」

道の途中で綾と別れ、一人きりで歩いている時。

浩太が急に足を止めるなり、そんなことを言い出した。

「え？」

「なあ、俺つてそんなに頼りないのか？」

「なんなの、突然……」

しつこく問い合わせる浩太。

琉奈はそんな浩太に戸惑いを隠せない。

「久留井くんたちに比べて頼りないかもつて言つたの、気にしてるの？ あんなの、いつもの」

「あいつら見るとムカつくんだ！」

忌々しげに言い捨て、浩太は側にある電柱を蹴りつける。

「あいつら……自分たちは特別だつてふんいき丸出しですか。自分たちならお前を守れるつて……。んなこと、俺にだつてできるし！俺だつてお前のこと守れるし！ それに、あの誠一とかつて先輩、お前のこと名前で呼びやがつて。なんで俺とか松下には苗字で呼ばせてんのあいつはいいんだよ！？ なんで

「浩太！」

琉奈が浩太の言葉を遮り、彼の名を叫んだ。

「何をそんなに怒ってるの？ あの人たちはあたしのために協力してくれるつて言つてるんだよ。なのになんで？ 彼らがあたしを助けてくれることの何が不満なの？」

息もつかず、一気にまくし立てる琉奈。

琉奈を直視していた目を背けた浩太は、小さく「『めん』」という言葉を捻り出した後、嵐のように走り去つていってしまった。

琉奈はただ、遠ざかっていく浩太の背中を見つめることしかできなかつた。

久留井彰が自宅に帰ってきたのは、夜八時を過ぎた頃だつた。
「遅かつたね、彰。ケータイにも出ないから心配してたんだぞ」
彰が帰宅したと聞き、玄関に駆けつけた祥吾が話しかける。

「今日も女子に追い掛け回されてたのか？」

続いて玄関にやつてきた誠一が冷やかす。

彰はいてつくようなま眼差しを一人に向け、答えた。

「女性ね……うん、女性でしたよ。トロコノ国からのお客様は

「！」

誠一と祥吾は目を見張る。

「僕の能力は防御中心で、某RPGで言えば後列に配置しなくちゃ

いけないキャラなので、多少は苦労しましたが、ざつにか散りしてきました

「そつか……。『めんな、助けに行けなくて』

謝る誠一に、「いえ、自力で何とかなりましたから」と答えた彰

は、顎に手を当てつつ言葉を次いだ。

「それにも……思つてたより危ない場所かもしれないですね、

この町は」

交錯心（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

「アースカ！ おはよ！」

翌日。

昇降口にある下駄箱から自分の上履きを取り出そうとしていた飛鳥川琉奈に、松下綾が猪突猛進という言葉を体現したかのような勢いで突進し、抱きついた。

「お、おはよう、綾。朝からテンションMAXだね……」

綾の元気っぷりに気圧されつつ、琉奈が言つ。

「ふつふつふ。昨日の夜、誠一先輩と電話でいっぱい喋っちゃつた！」

「ホント!? つていうか、いつの間に電話番号を……」

「昨日先輩の家にお邪魔した時にね。アスカがトイレ行って話が中断してた合間に。ついでに久留井くんの番号もゲット！」

綾は歯を見せてにんまりと笑い、更にブイサインまで作る。

「ついでにつて……この前まで久留井くんにもキヤーキヤー言ってたのに」「今はもう誠一先輩一筋なの」

組んだ両手を右頬に寄せながらはしゃぐ綾。周囲にはハートマークが飛んでいる。

綾が恋をする度に見るお決まりの光景に、琉奈は肩を竦めて苦笑した。

「ア、アスカ……おはよつ……」

教室に入るなり、琉奈にそう声をかけるクラスメイト。秋川浩太だ。

浩太の顔を目にした途端、昨日言い放たれた言葉が琉奈の頭にこだ。

だます。

「あの……昨日は急にキレたりしてごめん……」

「ううん、大丈夫」

「もうあんなふうにキレたりしないから。できれば忘れて欲しいんだけど」

「……うん、分かった」

「え？ 何？ 何の話？」

琉奈と浩太の間に何があつたのか知らない綾が二人の間に割り込んで探りを入れるが、二人は何も答えず、琉奈はさつさと自分の席へと去ってしまった。

やれやれ、と言わんばかりにため息をついて椅子に座った琉奈は、自分の机に違和感を覚えた。

琉奈は恐る恐る、机の中に入れっぱなしにしていた教科書を取り出す。

「！？」

「琉奈、それ……」

遅れて自分の席 琉奈の前の席だ についた綾が、琉奈の教科書を見て顔を顰めた。

琉奈の数学の教科書はズタズタに裂かれていた。

とてもではないが、もう教科書としての機能を話しそうにない紙の束を見つめ、茫然とする琉奈と綾。

刹那。琉奈は全身を射抜かれたような感覚に陥る。

明確な殺意を持った矢の放たれた方へと視線を向けると、そこには今にも取つて喰わんばかりの鋭い眼光で琉奈を睨む江田留菜がいた。

穏やかな蒼穹には、ふんわりとした小さな雲があちこちに浮かび、太陽からは暖かな陽光が降り注いでいる。

「江田さんの仕業だね、多分」

「多分っていうか。確實にそうだね。アスカに嫉妬してるんだよ、久留井くんのことで」

「いつものように毎食を屋上のベンチでひとり一人。

どちらもその表情にいつもの明るさではなく、深い苦惱の色に塗れている。

「あの人は敵に回すと厄介だよ。部活でもたまにあの人の黒い噂聞くし」

「だよね……。まいっただな、久留井くんとは何もないのに」

琉奈は箸を咥えたまま、海よりも深いため息をついた。

「江田さんはきっと久留井くんを独占してるとつもりでいるんだよ。で、自分の許可なく久留井くんと親しげにしてるアスカがムカつくとか」

「何その思考回路……意味分かんない」

「……正直あたしは分からぬくもないんだけど。でも自分の彼氏でもないのに。極端だよ、あの人。どうにかならないかなあ？」

「何が？」

「「！」」

突然、背後から会話に割り込んできた第三の声　しかも男の声に驚き、思わず飛び上がる琉奈と綾。

そんな一人を見て、「ビックリし過ぎだって」と笑っている声の主は、久留井誠一だった。

「誠一先輩！」

「脅かさないでくださいよ！　すつじぐびっくりしたんですからー！」

「ごめんごめん、まさかそんなにビックリするとは思わなくて」

誠一は顔の前で両手を合わせ、小さく舌を出す。

他の男子　例えば秋川浩太あたりに同じことをやられたら余計に腹立たしくなりそうだが、誠一の場合は素直に許してしまいたくなる。

イケメンは得だなあ、と琉奈は内心呟いた。

「ところで、一人は何の話してたの？俺が一人のベンチの後ろに回り込んでの気付かないくらい真剣だったけど」

誠一の質問に、琉奈と綾は顔を見合わせ、困惑の表情を浮かべた。今回の、江田留菜によるいじめの一件には、確實に久留井祥吾が絡んでいる。

そのことを祥吾の兄である誠一に素直に話していいものか逡巡したのだ。

二人の様子から、おいそれと話せない事情があると悟ったのか、誠一は優しげに微笑み、

「まあ、話したくなつた時に話してよ。オレで良ければいくらでも聞くからね」と語りかけた。

「じゃ、オレは食堂に行くから」

「ま、また久留井くんのお弁当ですか、誠一先輩？」

「オレも彰も、祥ちゃんの手作り弁当！ じゃ、またね！」

そう言い残し、誠一は爽やかに屋上を後にした。

「……あたし、母親から料理習おうかな」

去り行く誠一の背中を見つめながら、綾がぼつりと呟いた。

丁寧にとつてているノートのあちこちに、大きく書かれたバカだの死ねだのという罵詈雑言が踊っている。

数学と現文、日本史のノートが犠牲になつた。

こんなことしている暇があつたら、昼寝でもしていた方が充実した昼休みを送られたのではないか。

ノートを開いたまま沈黙している琉奈は胸中でそう吐き捨てた。と、微かな笑い声が琉奈の鼓膜を震わせる。

声のした方へ視線を巡らせるが、教室の隅に江田留菜とその取り巻きが琉奈を見つめたまま、クスクスと小さく笑っている姿があつ

た。

「アスカ……」

琉奈のノートの惨状を目の当たりにした綾が、心配そうに琉奈を呼ぶ。

久留井祥吾はそんな琉奈と綾を無言で見つめていた。

それから数分後。

授業が始まってからしばらくして、琉奈のケータイがスカートのポケットの中で震えた。

琉奈はポケットからケータイを取り出し、教師に見えないようにして開く。

ケータイのディスプレイには、「新着メール受信」の文字。メール受信ボックスを開いてみると、未登録のアドレスからのメールが届いていた。

放課後、屋上へ来い。

恐る恐る開いたメールには、その一言しか書かれていなかつた。一体誰からのメールなのかも分からぬ。だが、心当たりはある。

江田留菜。

琉奈は彼女のメールアドレスを知らないし、命令形で書かれているのも彼女らしいと思つた。

指示に従おうかどうか迷つたが、従うことに決めた。

ここで突っぱねたら嫌がらせが悪化する可能性があるし、面と向かつて彼女の誤解を解いておきたい。

自分は久留井祥吾とは何でもないのだと。

加害者（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

飛鳥川琉奈は重い足取りで階段を踏みしめていく。

階段の先にあるドア。

そこを開けると、江田留菜を中心とする女子グループが並んで仁王立ちでもしていたりするのだろうか。

その光景を想像する度、琉奈は堪えきれずに溜息を零した。辺り着いてしまった一枚のドア。

普段何気なく開いているそのドアが、妙に重々しく見える。

琉奈は意を決し、地獄へ通じてるだろうドアをゆっくりと開いた。眼前に広がるのは、西から東へかけて、橙から濃紺へと変化していくグラデーションが美しい夕暮れの空。それだけだった。

「……あり？」

拍子抜けしてしまう琉奈。

そんな彼女の元へ遅れてやつてきたのは、予想外の人物だった。

「飛鳥川先輩」

「！ 君は、確か……」

「久留井彰です」

久留井三兄弟の末子である彰がぺこりと礼をする。

「あなたをここへ呼び出した張本人は祥吾兄さんなんですが……。誠一兄さんはともかく、祥吾兄さんまでまだ来てないなんて」

思いもよらない人物の登場に困惑する琉奈を放置したまま、辺りを見回しながら彰が呟く。

「久留井くんが？ てことは、例の……何だっけ、何とかの国の話？」

「トコヨノ国のことですか。あ、僕も全て知っているので、遠慮しなくて構いませんよ。まあ、能力的には僕はそれほど優れているわ

けではありませんが」

「能力……？ 昨日久留井くんが言つてた、悪い魂から守る力のこと？」 それって超能力か何か？」

「超能力とはまた違いますが、僕たちは 」

「『ごめん！ 遅れた！』」

慌てた様子で屋上に飛び込んできた久留井祥吾が彰の言葉を遮り、簡潔に謝る。

「遅いですよ、祥吾兄さん」

「ごめんごめん。ちょっと話が長引いちゃつて。飛鳥川さん、来てくれて良かった」

「久留井くんからだつたんだね、あのメール。本文に名前書いて置いてくれば良かったのに」

「江田さんだと思った？」

「…？」

心の中に留めておいたとした言葉を肉声にされ、驚く琉奈。

□□もる彼女を見て、祥吾は優しげに微笑む。

「兄貴はまだ？」

「ええ、遅刻です。まあ、いつものことですけどね」

「だな。そのうち来るだろうから、先に始めてよっか。……飛鳥川さん、君の『家族のことについて詳しく聞きたいんだ。その方が解決が早くなると思うから』

「家族……？」

「亡くなってる方はもちろん、生きてる』家族のことも。基本的に悪さをする魂つてのは死者の魂なんだけど、稀に生者の魂と結託して悪さをすることもあるから。話しくいことがあるかもしれないけど、できれば全て、正直に話してもらえないかな」

「死者の魂にしても、生者の魂にしても、あなたに影響を及ぼすのは、あなたに強い感情や思念を持っている者です。それが良いものであれ、悪いものであれ。僕たちはその原因を突き止め、適切に対処したいんです」

「強い感情……」

祥吾と彰の話を聞いているうちに、琉奈の脳裏に浮かんだ家族の顔の中で、急激に、鮮明に、巨大になつていいく顔が一つあつた。

「……兄が……」

「兄……？ 飛鳥川さん、一人っ子って言つてなかつた？」

「ごめん……あんまり兄の話をしたくなくて」

虚言の述べたことを謝る琉奈を、祥吾は「気にしなくていいから」と慰める。

「飛鳥川先輩のお兄さんが、先輩に対して何か異常な感情を抱いていようと？」

「異常とまで言えるかは分からないけど……兄は昔からあたしのことが嫌いみたいで。ほとんど口もきいてくれないし、たまに話しても一言田には「死ね」だし……」

「酷いね。お兄さんはどうしてろんなことを？」

祥吾の質問に、琉奈は力なく首を横に振る。
「分からぬ……。訊いても教えてくれないの。両親も分からぬ、の一点張りで」

「……ご両親も？」

「とりあえず、先輩のお兄さんが原因である可能性が高いですね、現時点では。そこから『ご両親を含め、調べを進めていくのが得策だと思しますけど。……ん？』

突然、疑問符を頭上に浮かべた彰が上空を見上げる。つられて同様に見上げる祥吾と琉奈。

「どうしたの、二人とも？ 何かあるの？」

一通り上空を見回すも、琉奈の田にはオレンジ色に染まる空しか見えない。

が、祥吾も彰も、無言で上空のある一点を凝視している。

「……おかしいな。ちやんと散らしたはずだったんですけど」

「彰……お前……」

「『ごめん… 今日も女子に超追いかけられてさあ』

彰が不思議そうに眩き、祥吾が額に青筋をたて、三兄弟の長兄である久留井誠一が暢気に屋上へやつて来た瞬間。

琉奈は三兄弟たちと共に、フラッシュのように強く眩い光を受け、反射的に目を閉じた。

夕暮時（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

1 - 1 - 1

やがて、おそるおそる目を開けた飛鳥川琉奈の目の前に広がるのは、先ほどまで見ていた視界いっぱいの夕暮れではなかつた。

一面の、漆黒の闇。

他には何もない。

「飛鳥川さん、大丈夫？」

先ほどまで一緒にいた久留井祥吾の声が琉奈の鼓膜を叩く。

「久留井くん……？ 近くにいるの？」

「いるよ。彰も兄貴もみんな。そのうち目が慣れてくるから」祥吾の言つとおり、目が暗闇に慣れてくるにつれて、うっすらと周囲にある物体の輪郭が見えてきた。

観覧車。

ジオラマコースター。

お化け屋敷。

メリーゴーランド。

その他、様々なアトラクション。

「……遊園地？ なんで？」

広大な空間のあちこちに置かれている無数のアトラクションを見て、琉奈は思わず呟いた。

「いや、ここはトマノ国だよ」

茫然としている琉奈に、ようやく彼女の目に映るようになった祥吾が告げる。

「トマノ、国……ここが……」

「俺たちを引きずり込んだ魂の影響を受けて遊園地になつてゐるけどね。生前に遊園地で働いてたのか、それとも遊園地で素敵なデートをしたことがあるのかな」

「なあんで屋上に来た瞬間にトコロノ国ー？ ビーなつてんの、祥ちゃん！」

「詳しいことは彰に訊いた方が早いと思つよ、兄貴。ビツやらお知り合いみたいだから」

頭を抱えて喚く兄・誠一に祥吾がアドバイスする。

「……いや、僕はちゃんと散らしたんですよ、昨日。なのになんでこつなりますかね？」

「完全に散るの、見届けたか？ しつかりはつききつちつ見たか？」

誠一の指摘に、弟の彰はしばらく視線を虚空に泳がせた後、えへへ、と笑う。

「おまえー！ ちゃんと最後まで確認しろつていつも言つてんだろおー？ アレ、ぜつてえ彰が昨日散らした後に再結合した魂だかんなー？」

誠一が叫びながら指差した先に現れたのは、皓々と輝く、拳ほど

の大きさの光の塊だ。
ゆらゆらと宙に浮いているそれを、琉奈はぽかんと口を開けたまま見つめる。

「あれが……魂？」

「そう。俺と彰が屋上で見てたのがあれ。今は飛鳥川さんにも見える？」

「うん……」

「俺たちをここに連れてきたにがあれね。だから、俺たちはあれをどうにかしないと……！？」

突然、白く輝く魂の輪郭が波打つたかと思つと、それはあつとう間に若い女性の姿に変化した。

白いワンピースをまとつた、黒のロングヘアの女性は琉奈たちに目を遣り、鬼神の如き形相で睨みつけてくる。

その迫力に脚が竦み、ふらつく琉奈の体を誠一が支える。

「大丈夫だよ、琉奈ちゃん。俺たちが守るから」

白いワンピースの女性を毅然と見つめたまま、誠一が言い放つ。

琉奈は無言で頷く。

『許さない！！』

ワンピースの女性が咆哮をあげる。

刹那、周囲に置かれたアトラクションの電飾が点り、辺りが急に明るくなる。

ジョットコースターやメリー・ゴーランドなどが動き出し、不気味な雰囲気に不釣合いな明るい音楽がどこからともなく響いてくる。

「な、何……？」

戸惑う琉奈を背中に隠し、祥吾が周囲を警戒する。その時。

「！」

猛烈なスピードで下り坂を滑り降りていた無人のコースターがレベルから外れ、琉奈たちの方へ突進してきた。

とてもではないが避け切れる速さではない。

圧倒的な絶望が琉奈の体に絡みつき、身動きを封じる。

琉奈は瞬時に死を覚悟した。

だが。

「彰！」

誠一に鋭く名前を呼ばれた彰は他の三人を背にしてコースターの前に立ちはだかり、両手の平をコースターに向けて翳す。

「何を……！」

琉奈は我が目を疑つた。

彰が翳した掌の向こうに、金色に輝く大きな光の壁が現れ、必殺の勢いで突進してきたコースターを防いだのだ。

光の壁によつて進路を阻まれたコースターはプレスされたように拉げ、やがて地面に崩れ落ちた。

『な……！？』

驚愕するワンピース女を、溜息混じりに光の壁を消した彰の視線が真つ直ぐに射抜く。

ワンピースは視線を観覧車へ向ける。

すると、観覧車の「ゴンドラが外れ、二十個はあるだらう鉄の塊が一斉に四人に向かつてくる。

だが、ゴンドラは琉奈たちの元へ迫り着く前に「ど」からか飛来した金色の矢によつて次々と迎撃されていく。

『！？』

「おしまい！」

最後のゴンドラが地面に叩きつけられるのを見届けた祥吾が琉奈に微笑みかける。その右手には、先ほどの彰の光の壁と同じ色で光り輝く大きな弓が握られている。

『な……なんなんだ、お前たち……』

うろたえるワンピース。

次はどのアトラクションで攻撃しようか迷っているらしい彼女の側に、一人の男が音もなく忍び寄る。

その影にワンピースが気付いた時には手遅れだった。

「ダメダメ、余所見してちゃ」

『！！』

ワンピースの腹を横一文字の光の筋が走る。

次の瞬間、ワンピースの体が一閃し、弾け飛ぶ。

「……もう再結合はなさそうだね。帰ろ、みんな」

金色に輝く剣を手にしている誠一が、琉奈たち三人に告げる。

刹那、周囲のアトラクションが次々と崩壊していく。次第に霞んでいく風景。

そして、次に瞬きをした時、四人の姿は学校の屋上にあった。家路を急ぐ鳥たちが行き交う夕暮れの空。校庭から響いてくるサッカー部員の掛け声。下校する生徒の笑い声。いつもと変わらない風景がそこにあつた。

「飛鳥川さん、大丈夫？ 怪我はない？」

茫然自失状態で立ち尽くしている琉奈に、祥吾が心配そうに声をかける。その手に光る』はない。

「……今の……」

「トコヨノ国で人間に悪さをする魂だよ」

同じく光の剣を手放している誠一が答える。

「あの魂は昨日、僕が現世で遭遇した魂です。他の人間に危害を加えようとしていたので散らしたはずだったんですが、想像以上にしぶとい魂だったようで再結合してしまって。僕の失態に兄さんたちや飛鳥川先輩まで巻き込んでしまい、すみませんでした」

ペコリと頭を下げる彰。反省しきりの彼に、気にするなよなどと声をかけ、慰める誠一と祥吾。

一方、トコヨノ国で襲われた時に感じた死の恐怖が未だに心にこびり付いたままの琉奈は、両腕で己の体を抱きしめ、ガタガタと震えていた。

「琉奈ちゃん、大丈夫……じゃないね。今日はもう帰ろっか。送るよ」

「いえ……もうすぐ浩太が……部活、終わるから。江田に見られたらヤバいし……」

「……そつか。ごめんね、怖い思いさせて」

「あの……あたし、このままだといつかまた、あんな目に遭うかもしれないんですね？」

もし、いつものようにトコヨノ国から自然に現世に戻れなかつたら、あのアパートの中で誰かの魂に襲われるのか。
それは嫌だつた。

もうあんな恐怖を味わいたくはなかつた。
だが、告げられた事実は的確かつ残酷で。

「残念ながら、その可能性が高いね」

「でも、その時のために俺たちがいるから」

誠一の言葉を聞いて絶句する琉奈に祥吾が言つ。心に刻み付ける
ように力強い口調で付け加える。

「俺たちの力はそのためにあるんだから」

「琉奈、どうしたの？」

母親に呼び止められ、琉奈は振り返る。

「……何が？」

「なんだか顔色悪いわよ」

「大丈夫、ちょっと疲れただけだから」
力なくそう答え、琉奈は再び一階にある自室へと歩き出す。
疲れたのは事実だ。肉体的にも、精神的にも。
今までに体験したことのない、衝撃的な戦闘と死の恐怖。
ずっとその傍らにいたのだ。

「！」

琉奈の部屋の隣のドアから兄が出てきた。

普段着ではない。どこかへ出かけるようだ。

兄は顔面蒼白の妹に目もくれず、まるで琉奈が存在していないか
のような素振りですれ違い、去っていく。

……兄なんだろうか。

琉奈は内心自問する。

自分が死ぬことを願い、祈り続けている兄。

彼が自分をトコヨノ国へ引き込んでいるのだろうか。

ならば、あのアパートは一体何なのだろうか？

それに、なぜ自分は現世に戻つてこれているのだろうか？

琉奈は様々な疑問が渦巻く頭を抱え、その場に座り込んだ。

攻防（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

1 - 12

飛鳥川琉奈の姿は、足早に教室へと急ぐ生徒であふれ返る昇降口にあつた。

新しく始まる今日とこつ田への期待と希望に満ちた笑みを浮かべている彼らに対し、琉奈の顔は苦渋に満ちている。

「アスカ、おはよー……どうしたの？」

琉奈の姿に気付き、後ろから声をかけた松下綾は琉奈の顔を見て、それまで浮かべていた笑顔から一転、不安げな表情で琉奈に尋ねた。

「おはよ、綾。……いや、や……今日は何されるんだうつて思つて」

琉奈の答えの意図を察した綾は「ああ……」と呟く。

今日は江田留菜にどんな嫌がらせをされるのか。琉奈を憂鬱にさせる悩み事その一がこれだ。

昨日は教科書とノートが犠牲になつた。次は上履き、という可能性がある。

そう考へると、下駄箱を開ける手が鉛のよつに重くなつてしまつ。「綾。もし綾にまで危害が及びそうになつたら、あたしのことは放つておいていいからね」

沈鬱な面持ちで琉奈が言つ。

綾は一瞬目を見開いた後、琉奈を真つ直ぐ見つめ、

「今度そんなこと言つたら、ほっぺた引つ叩くからね」と舌頭鋭く聲明した。

「綾……」

「とりあえず、もし上履きがアウトだったら、職員室に来客用のスリッパ借りに行こ

語りかける綾の笑顔につられ、琉奈もようやく今日最初の笑みを

浮かべる。

綾の言葉で、笑顔で元気を取り戻した琉奈は意を決し、自分の下駄箱を開けた。

刃物で切り裂かれた上履き。マジックで落書きされた上履き。針を天に向けた画鋲を敷いた上履き。

悲惨な状態の上履き各種を脳内に並べていた琉奈だったが、眼前の上履きの状態はそのどれにも当てはまらなかつた。

「……あり？」

普段通りの姿で下駄箱の上段に鎮座している自分の上履きを姿に琉奈は拍子抜けし、唇から間の抜けた声を零す。

「良かつたね、上履き無事で」

綾が琉奈の肩を叩く。

琉奈は胸を撫で下ろす。が、まだ油断はできない。

「教室の私物に何かされてるのかも……」

琉奈の言葉に綾が顔を強張らせる。

昨日の下校時に持てるだけの私物をバッグに詰め、江田留菜の魔の手から避難させたが、持ちきれなかつた辞書など数点は教室に残したままだ。

今度は辞書をぼろぼろにされているかもしれないし、机に油性ペンで落書きされているかもしれないし、机と椅子を廊下に放置されているかもしれない。

悪い予感は尽きない。

「とりあえず、教室に行ってみよう。まずは事態をきちんと把握しないと」

「……そだね。行こう」

綾の提案に同意する琉奈。

一人は無言で一年A組の教室へと向かつた。

高等部校舎の三階に位置する一年A組の教室には、琉奈と綾が想像していたものとは異なる光景があつた。

琉奈の机も椅子も前日同様、落書きなどの異常は一切ない状態でいつも通りの場所に佇み、主の登校を待っていた。

昨日琉奈に嫌がらせをした主犯格だろう江田留菜は、琉奈が来たことに全く気付かぬ様子で、やたらと機嫌良く取り巻きの面々と何やら話している。

そして、いつもは多くの女子たちに囲まれている久留井祥吾は、たつた一人の人物と対峙している。

相手は 秋川浩太。

「秋川、久留井くんに何の用だろ?」

「何だろ?」

冷静に対応している祥吾に対し、浩太はヒートアップしているようだ。

「あ、飛鳥川さん、松下さん。おはよ」

歩み寄る琉奈と綾に気付いた祥吾が一人に声をかける。浩太はバツが悪そうに琉奈たちや祥吾から目を背ける。

「何なに、何の話してたの?」

新聞部員根性が疼いたのか、取材記者のような口ぶりで綾が尋ねる。

「大した話はしていないよ。男同士の話し合いを少し。ね、秋川くん

？」

「……ああ」

祥吾の問いかけに同意する浩太。その表情は苦虫を噛み潰したようだ。

「うーん、特ダネスメルがふんふんするんだけど」

「ここから先はプライベートだよ。ほら、もづ先生來たし。この話はもう終わり」

「グラマーメ、いつもはもうちょい遅いのに……」

教室に入ってきた担任教師に、綾は恨めしげな視線を投げつける。ナイスタイミング、とばかりにその場を後にしようとする浩太の腕を琉奈が掴み、引き止める。

「何の話してたの？」

「別に。久留井が言ってた通り、大した話じゃないよ」

「……あたし絡み？」

浩太はしばらく琉奈を見つめた後、無言で琉奈の手を振り解き、何も語ることなく立ち去った。

前兆（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

「変なことだらけ！」

昼休み。

綾は灰色の雲に面積の大半を奪われた空に向かつて叫んだ。ベンチに腰掛けている琉奈も深々と頷く。

「なあんか江田さんウキウキだし、アスカに対するいじめストップしたし、久留井くんと秋川は何やら話し合いしてたし。何がどうなつて何が起きてるの！？」

一頻り喚き終えた綾が琉奈の隣に座る。

「……浩太が久留井くんと話してたのは、多分あたしのことだと思う」

「アスカのこと？ 何、一人でアスカの取り合いで？」

「なんですぐ考えがそっち行くかな」

苦笑する琉奈。だが、すぐに真顔になる。

「昨日ね、久留井くんたちと一緒にトコトコノ国に引きずり込まれたの」

「トコトコノ国って……アスカがいつも飛ばされるところだよね？」

「うん。でも、昨日はいつも飛ばされるところじゃなくて。別の魂に引きずり込まれたせいで、遊園地みたいなところだった」

「遊園地？ アパートじゃないんだ？」

「そう。で、結構怖い目に遭っちゃって。久留井くんたちは慣れてるのか、へっちゃらな顔してたけど。それで、一人で帰る気分じゃなかつたから、浩太と一緒に帰つたの。浩太に心配させないよう普通に振舞つてたつもりだつたけど、モロバレだつたみたい」

「そつか。それで秋川は何があつたのかつて久留井くんを問い合わせたつてことね」

「多分そういうことだと思つ」

「ていうか、そういうこと」

「「！」」

予期せぬ第三者の声に琉奈と綾は飛び上がる。

「お、驚かせないで下さいよ、先輩！」

田論見どおりの展開になり、満足げに微笑む久留井誠一に琉奈が抗議する。

しゃちほこ張り、「こ、こんにちは、誠一先輩！」と声をかけてきた綾に、誠一は「こんにちは、綾ちゃん」と笑顔で返す。

彼を見つめる綾の瞳には巨大なハートマークが浮かんでいる。「祥ちゃん曰く、かなりの剣幕だつたみたいよ。アスカに何したんだ！」って。ごめんね、昨日は怖い思いさせちゃって」

頭を垂れ、謝る誠一。

琉奈は「もう大丈夫ですから、頭を上げてください！」と慌てる。「彰の奴がねー。一昨日の時点でちやんと散らしといってくれたら、あんなことにならなかつたのに」

「散らす……？」

綾が不思議そうに誠一の言葉を反芻する。

「悪い魂を退治することを、俺たちは散らすって勝手に言つてんの。俺らが倒したり。穢れが溜まつて弾けた魂は消滅するんじやなくて、細かく散つていぐだけだからね。本来はその後、ただのエネルギーになって、別の魂に吸収されたり、新しい魂を生むエネルギーになるんだけど、たまに一度分散しても、再び結合して魂としての力を取り戻す場合もある。だからいつも注意しきつつてたのにさあ……」

一通り説明した誠一は、不甲斐ない弟を思い出し、深い溜息をついた。

「まあでも、どうにか倒せたから良かつたけどね」

「……先輩たちはいつもあんな危険なことを？」

「まあね。俺らは小さい頃からあんなことしてるから慣れてるけど、

初めての人は怖かったよね。ホント「めんね」

「！ いえ、そんな……」

「もうあんな目に遭わせたりはしないから。俺はもちりん、祥ちゃんも彰も気をつけるし」

はつきりと明言する誠一。

安堵の表情を浮かべる琉奈の横で、綾は嬉しさと悲しさが入り混じった複雑な顔で琉奈と誠一を見つめている。

「あ、祥ちゃんといえば。クラスでの嫌がらせは止まつた？」

「え？」

突然の、思いもよらない質問に、琉奈は啞然として誠一を見つめる。

「クラスメイトの中に祥ちゃんのこと嫌がらせてるんでしょ？」

「ええ、まあされてるとこえばされますけど。……あ、でも、今日は何もなくて」

「今日何もないうことば、きっともう大丈夫だよ」

「……それってどういうことですか？ 先輩、何か知ってるんですか？」

訝る琉奈に誠一は笑いかけ、彼女の肩をぽん、と叩く。

「祥ちゃんが説得したんだよ。近々一緒に出かけようつていう約束と一緒にね」

「え！？」

琉奈と綾は顎が外れんばかりに大口を開け、目を瞬かせる。

誠一はそんな二人をよそに、話を続ける。

「説得っていうか、いじめつてカツコ悪いよね的なことでも言ったんじゃないかなあ。祥ちゃん口が達者くんだから、そのあたりうまくことやつたんだと思うよ。それプラス、一緒に出かける約束を取り付けることで、江田さん……だけ？ 祥ちゃんは私が好きって彼女に思い込ませて、彼女の目を琉奈ちゃんから逸らせるつて寸法」「じゃあ、久留井くんは江田さんのことは……？」

にんまりと笑みを浮かべ、ピースサインを作る誠一に綾が尋ねる。
誠一はそのままの笑顔で「全然」とあっさり断言した。

「酷いって思うかもしれないけど、俺らとしては琉奈ちゃんには今回この件に集中して欲しいし、単純にいじめつて大っキライだし。祥ちゃんの力で事態が好転するならやつた方がいいって話になつたの。まあ、江田さんに叶わぬ夢を見せるのはちょっと可哀相だけど」

「久留井くんが江田さんを好きになることはないんですか？　あの人に、見た目結構可愛くて、本性知らない男子の中には恋しちゃってるのも何人かいるくらい」

「絶対ないよ」

誠一が言い切る。天地が逆さになつても不变だと言わんばかりの口吻で。

「祥ちゃんは誰に対しても優しいけど、誰かを好きになることはないの」

「なんでそう断言できるんですか？」

「……それはいつか、本人が言いたくなつた時に聞いてあげて」「詳しいことは口にせず、ただ微笑む誠一。

けれどその笑みはどこか寂しげだった。

「……アスカ、ごめん」

昼食を終え、教室に戻る途中。綾はそう言って足を止める。

「え？　何が？」

「アスカのメアドと番号、あたしが誠一先輩に教えたの。聞き忘れたから教えてつて。江田さんのことも、昨日誠一先輩と電話した時、心配過ぎてつい喋っちゃつて……。先輩たちがあんな行動に出るとは思わなかつた。……嫌な気分になつたよね？」

「……正直言うと、江田さんとのことに介入されたのはいい気分じゃないけど、いじめが止まること自体はありがたいことだし。だい

たい、綾のことを怒つたりはしないよ」

しょんぼりと落ち込み、俯く綾に琉奈が語りかける。

更に歯を見せて笑いかけ、綾に対して不快感がないことを強調する。

その笑顔に綾もようやく胸を撫で下ろした。

「にしても、久留井くんが誰も好きにならないってのはなんでだろ

うね？ あれだけカッコイイならより取り見取りだらう？」

「なんでだらうね、ホントに？」

綾の問いかけに、先ほどの誠一の言葉を脳裏で反芻させながら、

琉奈は首を捻る。

「心に決めた人がいる、とか？」

「それだと誰かは好きってことでしょ。誠一先輩は誰も好きにならないって言ってたから、それはないんじゃない？」

「だよね……。何だろ？ トライアウマ的な何かがあつたのかな？」

いくら話し合つたところで結論は出ず、二人はただ首を傾げるしかなかつた。

疑問（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

それから何事もなく過ぎ去った数日後の日曜日。

布団の中で惰眠を貪っている飛鳥川琉奈の携帯電話がリズミカルな電子音を奏で、着信を知らせる。

琉奈は布団に包まつたまま、ベッドの上から机に手を伸ばし、手探りで携帯電話を探す。

しばらくして無事携帯電話を手にした琉奈は、一いつ折り携帯電話を開き、ディスプレイに視線を落とす。

電話着信、という文字の下に表示されているのは電話番号のみ。名前が出ないということは、登録されていない番号だ。

応答しようか迷つたが、久留井三兄弟からの電話という可能性に思い至り、通話ボタンを押す。

「はい、もしもし」

『あ、琉奈ちゃん？ 久留井誠一です』

予想通り、相手は久留井三兄弟の長男である誠一だった。

「先輩！ おはようございます」

『おはよ。突然だけど、琉奈ちゃん今日ヒマ？』

『ええ、まあ予定はありませんけど』

『ホント…？ ジャあさ、一緒に駅前の何とかパークに行かない？』
「へ…？」

予想外の誘いに琉奈は一オクターブ高い声を上げる。

駅前の何とかパーク、という言葉から琉奈は駅の東口側にある、アミコーズメントの大型複合施設を思い浮かべる。誠一が指しているのは多分そこだ。

『前から行ってみたいと思ってたんだけど、彰と一人で行つても盛り上がりがちなさそだから。琉奈ちゃんも一緒にどうかなあと思って。

「どう?』

「いいですよ」

『マジ! ? 良かつたあ。そしたら、十一時に駅の東口で。あと、綾ちゃんと浩太くんも誘つとくからー。じゃ、後でね!』

「! 先輩、多分二人とも今日は部活が……って切れちゃってるし」

一方的に通話が切られた携帯電話に琉奈は溜息をついた。待受画面に表示されている時計がさしている現在の時刻は九時三

十二分。

駅までは徒歩十分ほどで着くが、早めに外出の支度をしておくに越したことはない。

琉奈はベッドから降り、顔を洗いに洗面所へと向かった。

十時五十三分。

琉奈が駅の東口に到着すると、そこには既に琉奈以外のメンバー

久留井誠一、久留井彰、松下綾、秋川浩太 の姿があった。

「綾と浩太は部活どうしたのよ?」

「風邪つて言つてサボっちゃつた」

「俺は親戚に不幸つつつといた」

目を丸くしながら駆け寄る琉奈に、綾と浩太がそれぞれ説明する。

「おはよ、琉奈ちゃん」

「おはようございます、飛鳥川先輩」

「おはおうございます。ごめんなさい、お待たせしちやつて」

「ううん、大丈夫だよ。まだ約束の時間まえだし。じゃ、行こつか

!」

明るい口調で誠一が言つ。その声をきつかけに歩き出す五人。

アミューズメント施設へ向かう途中、琉奈の脳裏を一つの疑問が過ぎつたが、すぐに自分で答えが見つかったので、それを口にすることになかった。

何故次男の祥吾がいないのか、と。

きつと今頃、江田留菜と一緒にいるのだろう、と。

「綾、今日はばずいぶんと気合入ってるんじゃない？」
ボーリングの受付をしている男性陣から一歩離れた場所にいる琉奈と綾。

琉奈は今日の綾の服装 花柄のキャミソールに薄手にピンクのカーディガン、水色から紫色へのグラデーションが鮮やかなフレアスカート をまじまじと見て尋ねる。

「そりやね。好きな人に会うんだもん。おしゃれくらいするよ」
綾は笑みを浮かべる。にこやかなその顔には、学校では禁止されている化粧まで施されている。

対して琉奈は、水色のキャミソールにグレーのパーカー、細身のジーパンにパンプス、とおしゃれ心があまり感じられない「カーディネートだ。

綾は琉奈を見つめ、やがて溜息をつく。

「琉奈はもうちょっとおしゃれした方がいいんじゃない？ せっかく元がいいのに」

「いーの。しなきやいけないときはちゃんとしるし。それに、今日は体を使うことが多いそうだつたし」

「琉奈ちゃん！ 綾ちゃん！ 受付終わったから、シューズとボーリ選んで！」

二人の会話を割って入った誠一が、一人にボーリング開始の準備を促す。

言われるまま、二人はシューズのレンタルカウンターへと急いだ。

投じられたボールがレーンを一直線に駆け抜け、規則正しく並べられたピンを一瞬にしてなぎ倒す。床に倒れた十本のピンたちはやがてレーンの外に押し出された。

「つしゃ！ ストライク！」

誠一が満面の笑みでガツッポーズを決める。

琉奈と綾が賞賛の拍手を送り、浩太が対抗心に燃える中、次にボールを投げる彰は黙々と準備をする。

「先輩、ボーリング上手いですね！」

隣に座る誠一に綾が声をかける。誠一は満更でもない様子で「そんなことないよ」と答えた。

その間に彰がレーンの前に立ち、ボールを構える。

腰を落とし、両手で持ったボールを二、三度振り子のように前後に揺らして勢いをつけた後、手放す。

ようようと力なく滑るボールは的確にピンにぶつかり、次々と倒していく。彰の頭上のモニタにストライクの文字が踊る。

「……なんであれで五連続ストライクが取れんのか、不思議でたまんないんだけど」

誠一が抑揚のない声で口にした咳きに琉奈、綾、浩太の三人が無言で深々と頷く。

振り返った彰はにやり、と不敵な笑みを浮かべる。

次に順番が回ってきた浩太はすくっと立ち上がり、自分のボールを手にレーンの前へと向かう。

意を決し、浩太が投げたボールもまた一直線にピンへと向かうが、離れた位置にあるピン一本が残ってしまった。

「あちゃー。次は片方を弾くように倒して、残った方を弾いたピンで倒すしかないね」

ぽつんと残った二本のピンを見つめながら誠一が言う。

「……先輩」

「ん？ 何、琉奈ちゃん？」

「今日はお気遣いいただいてありがとうござります」

「何が？」

「私がまたトコヨノ国に引き込まれるのを警戒して、私の側にいるために今日誘ってくれたんですね。しかも綾と浩太まで誘つてくれて。本当にありがとうございます」

「……やつぱバレてたのね」

誠一は頭をがしがしと搔きながら、ぱつぱつが悪そうに咳いた。

「いつもは祥ちゃんに任せきりだからね。今日は祥ちゃん用事があつたし。あ、誤解しないでね！俺は嫌々ガードしてるわけじゃないから！俺たちが勝手に琉奈ちゃんを守りたいって思つてるだけで。気遣いとかじやなくて、むしろ俺たちのわがままっていうか」「いえ、嬉しいです。でも、どうして先輩たちはあたしをここまでして守つてくれるんですか？」

琉奈が口にした疑問は、彼女がずっと胸に抱いていたものだつた。トコトコノ国について詳しく、他者を守る力も持つてゐるから自分を守つてくれる。

それは分かるが、それにしても休日今までいつぱつて側で見守つてくれるは何故なのか？
自分を守つてくれるにしても少し必死すぎやしないか？
ずつとそう思つていた。

「ねえ、先輩」

琉奈は誠一の顔を覗き込む。

見てはいけないものを見てしまつた。

そう思えてしまうほどに誠一の表情は弱々しく、痛々しく、悲しく、憐れだった。

普段の明るく楽しげな表情とは真逆のそれに、琉奈は思わず彼から顔を背ける。

「他者と違うところがあると、それなりの苦労があります」

誠一の様子を見かね、彰が言つ。

「僕たちは先輩の苦しみを理解できます。だからこそ、僕たちはその苦しみを消す手助けをしたいんです」

「……そつか。ありがとう、彰くん」

琉奈は彰に微笑みかける。

だが、まだ内心納得できていなかつた。

誠一のあの表情を見てしまつたから。

思念（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://n1198u/tu.com/>

久留井三兄弟のお引越し <http://n1078u/tu.com/>

1 - 15

ボーリングは「ゲーム行い、彰の圧勝」といつ形で終了した。

続いて五人がやつてきたのは、同じ施設内にあるカラオケボックスだ。

誠一は率先して受付を済ませ、店員に指定された部屋へと他の四人を誘導する。

「誠一兄さん、歌上手いんですよ」

綾と共に前を歩く誠一に聞こえない程度の声で、彰が琉奈と浩太に言う。

「うん、なんか上手そうな感じするね」

「僕にボーリングで負けたのが悔しかったのかな」

「え？ それでカラオケかよ？ 確かに言いだしつぺはあの人だつたけど」

「いつも兄貴風吹かせてますけど、本当は僕たち兄弟の中で一番負けず嫌いで子供っぽいんです」

小首を傾げた浩太に、彰が苦笑しながら答える。

「……でも、彰くんとつて大好きなお兄さんなんだよね？」

琉奈が言う。彼女には彰の苦笑いが、愛があるゆえのものだと分かつていた。

彰はややはにかみながら、

「ええ。大切な兄です」

とはつきり答えた。

「カオスだよ、これ……」

選曲用の機械を見つめ、綾が呟いた。

「？ どうしたの、綾？」

隣に座る琉奈が綾の手中にある機械のディスプレイを覗き込む。皓々と光る画面の上部にあるのは、『履歴TOP100』の文字。その下には、これまでの一時間に琉奈たち五人が歌った歌のタイトルが並んでいる。

最近発売になった新譜。一昔前に流行した曲。アニメソング。演歌。韓流歌手の曲。懐メロ。ゲームのテーマソング。有名アーティストの人気曲。いどものうた。

共通点のない曲のタイトルが同一画面上に表示されているのを見て、琉奈も「確かにカオスだね」と頷いた。

「綾ちゃん、次の曲入れたー？」

マイクを手にしたまま誠一が尋ねる。「今入れます！」と綾が慌ててタッチペンでアーティスト検索を始める。その時だった。

琉奈の心臓が一際大きく跳ねた。

全身の感覚が現実と乖離していく。同時に襲いかかってくる、あの感覚。

こんな時に！？

琉奈の心の叫びが聞こえたのか、それとも第六感で察知したのか、マイクを投げ捨てた誠一と彰が琉奈に駆け寄り、彼女に触れる。隣に座る綾が琉奈にしがみつき、浩太が誠一の服の裾を摑む。次の瞬間、琉奈たちの眼前の風景が一変した。

琉奈にとつては見慣れた、他の四人にとっては見慣れぬ風景に。

「ここは……アパートか」

室内を見回しながら誠一が呟つ。

誠一も、彼の意見に「そうですね」と同意する彰も至つて冷静に周囲を觀察する。

一方、初めて異空間

トコトコノ国に引きずり混まれた綾と浩太

は顔を強張らせ、落ち着きなくあちこちに目を遣つてゐる。

「ずいぶん年季の入つたアパートだね」

一頻り辺りを見回し終えた誠一が漏らした感想に「はい」と琉奈が応じる。

木造と思しき六畳一間のアパートの中には、ガムテープで脚をぐるぐる巻かれた丸いちゃぶ台が置かれ、その横には万年床と思われる布団がしわくちゃのまま敷かれている。カタカタと不快な音をたてながら風を送り出している扇風機の羽はひび割れ、相当年使つていることが伺える。見慣れぬラベルが貼られた空の茶色いビール瓶がフローリングの上や狭い台所など、あちこちに放置されている。強い日差しが差し込む、ひびの入つた窓の向こうから絶えず聞こえてくるのは、何匹ものツクツクホウシの鳴き声だ。

「誠一兄さん」

彰が誠一を呼ぶ。

その手には新聞が一部握られている。

「どうした?」

「これを見て下さい。……ここです」

差し出された新聞を受け取り、誠一は彰が指差す箇所に視線を落とした。

「……平成十八年八月二十四日? 今から十五年も前じゃん」

「おそらくこの空間の設定が十五年前の八月二十四日なんでしょう。飛鳥川先輩、この日付に何か心当たりはありませんか?」

琉奈は無言で首を横に振る。

平成十八年の八月二十四日という日付に聞き覚えはないし、その日に何か縁がある人物にも覚えはない。

「ひつ……!」

不意に綾が引きつった声を上げ、近くにいる誠一にしがみついた。

「どうしたの、綾ちゃん!/?」

「あ、あれ……包丁……!」

体と声を震わせながら綾が指差す先にあるのは、米びつの側にあ

る一本の包丁。誠一は田を凝らし、ようやく綾が恐怖している理由に気付いた。

ゆっくりと包丁へと歩み寄り、摘み上げる。

その場にいる全員が息を呑んだ。

包丁は血みどろだった。血は既に乾いており、どす黒く変色している。

その姿に誰もが戦慄する中、琉奈は頭の中に何か引っかかるものがあるのを感じた。

見覚えがある気がした。血みどろの包丁に。

一体どこで目にしたのか。記憶の森から一枚の木の葉を探し始めたようとした時。

「 「 ! ! ! 」

何かに感づいたらしい彰が厳しい眼で周囲を警戒し、誠一は右手に光の剣を宿した。

「な……何だよ、その剣! ? 」

誠一の剣を初めて目にした浩太が喚く。綾も驚いた様子で剣を凝視する。

「前にトコロノ国は魂の力が作用する世界つて言つたよね。これもその作用の一つの形なんだ」

「魂の力の作用……? それでなんで剣が! ? 」

「僕たちは自分の魂の力を具現化することができんんです」

今一つ理解できていないらしい浩太に彰が説明を付け加える。

「普通の人たちはただ体内に溜め、消費していくことしかできない、精神エネルギーとも言うべき魂の力を引き出して操り、武器や防具の形に具現化することで、人に危害を及ぼす魂を散らすことができるんです。僕たちはそういうことが生まれつきできる一族なんですよ」

「 ! 彰 ! ! 」

突然、誠一が叫んだ。

刹那、どこからか現れた白い光の塊が猛スピードで彰に突進し、

彼の体を壁へと弾き飛ばした。

「彰くん！」
「……やれやれ。不意打ちつて言つのはかなり卑怯な行為だと思つ
んですけどね」

彰は体勢を崩したものの、すぐに立ち直る。
彼の体の前には光の壁が現れており、彼と光の塊の間に悠然と立
ちはだかっている。

「油断しちゃだめだろ、彰」

誠一が言つ。その視線は宙に浮かぶ光に注がれている。彰もまた、
光を見つめたまま「すみません」と謝つた。

「琉奈……あれ、何なの？」

「魂なんだつて。多分、あたしを何度もここに引きずり込んでる魂」「
魂！？ あれが！？」

「さてと。一体どこのどなたさんでしようかね？」

誠一が剣を構える。

彼の声に呼応するかのように、白い光の塊の輪郭が揺らぎ始める。
その時。

「誠一兄さん！」

少し離れたところから周囲の様子を伺つていた彰が鋭く誠一を呼
ぶ。

その視線は、白い光の塊でもなければ、誠一でも、琉奈たちでも
なく、別の中に向けられている。

「……マジ？」

誠一が茫然と彰と同じものを 琉奈の背後に現れた、新たな光
の塊を見つめる。

もう一つの塊は五人の顔を確認するよつて浮遊した後、急にフラ

ツシユを焚いたように強く輝いた。

あまりの光の強さに目を開けていられなくなつた琉奈たちは、反射的に瞼をきつく閉じる。

やがて光が收まり、おそれおそれの目を開けてみると、元のカラオケボックスの中に戻つていた。

トコヨノ国に引きずり込まれる前に入れておいた、彰が選曲した演歌の渋いメロディが流れ、大きな画面の中では一人の女性が崖の上に立ち尽くしている。

「戻つて、きたの……？」

事態の変化についていなければ、綾が誰にでもなく問いかける。

「ええ。どうやら現実世界に強制送還されたようですね。こんなこと、普通はないんですけど。どう思いますか、誠一兄さん？」

彰が更に誠一に問いかける。

「詳しいことは分からんけど、多分途中で乱入してきた魂が関係してんじゃないかな。普通、一つの空間には一つの魂しか住み着かないのに、同一空間に一つの魂がいたっていうのはおかしいし。そんでもって、おそらく最初に現れた魂が琉奈ちゃんをトコヨノ国に引き込んでる原因の魂で、次に現れた魂が琉奈ちゃんをトコヨノ国から現実に戻してくれる魂だと思う」

「あのもう一つのが、あたしを？」

「間違いないと思うよ。あの魂のおかげで琉奈ちゃんはこっちに戻つてこられてたんだ。問題は、あの二つの魂が琉奈ちゃんにどう関わってるのかってこと」

誠一は光の剣が消え失せた右手を顎に当て、視線を宙に巡らせる。

「彰、どう考える？」

「そうですね……僕の勝手な印象ですが、初めに現れた魂からは強い憤怒を感じました。おそらく最初の魂は飛鳥川先輩に対して強い怒りを覚えています。もう一つの魂ですが、こちらからも激情を感じましたが、感情の種類は真逆でした。飛鳥川先輩を守らなければ

ば、という慈愛に満ちた感情が感じられたんです。その辺りがポイントになるのではないでしようか？」

「憤怒……慈愛……」

一つの単語を聞いた時、琉奈の脳裏に三つの顔が浮かんだ。

憤怒で思い出されるのは兄の顔。

慈愛で思い出されるのは両親の顔。

しかし、彼らは生者であり、兄はともかく両親が自分をトロロ国に引き込むほどの感情を抱いているとは琉奈には思えない。

琉奈の頭は混乱するばかりだった。

「ねえ、平成十八年の八月二十四日って何かあった？」

帰宅後、家族揃つての夕食時に琉奈は思い切つて両親に尋ねてみた。

問いかけた瞬間、ビールを呷っていた父親は盛大にむせ、母親は手から箸を滑り落とし、兄は普段以上に鋭い目つきで琉奈を睨んだ。「ど、どうして急にそんなこと訊くの？」

母親が言う。平静を装つてはいるが、動搖しているのは誰の目から見ても明らかだ。

怪しそうぎる。

琉奈は内心ひとりじめである。

「別にどうつてことはないけど、訊いてみただけ」

「そ、そうなの。何かありましたつけ、お父さん？」

「さ、さあ……どうだつたかな？ 誰かの誕生日だつたかな？」

必死にその場を取り繕つ両親に不審の眼差しを向ける琉奈。

しかし、これ以上訊いても今は何も話してくれそうにないので、更に問い合わせるのはやめることにした。

現代にはインターネットという便利なものがある。明日、学校の

PCで調べれば何か分かるはずだ。

そう決意する琉奈を、兄はじつと見つめていた。

久留井三兄弟の次男である久留井祥吾が帰宅したのは、兄の誠一と弟の彰、母親の恭子が夕食を済ませ、片づけまで終えた午後九時過ぎのことだった。

「遅かったね、祥ちゃん。……なんか疲れてない？」

弟を出迎えた誠一は、祥吾の顔を見るなり眉間に皺を寄せた。

「そりや疲れるよ、ずっと外にいたんだし。やっぱり家は落ち着くね」

「祥吾」

苦笑しながら兄の横を通り過ぎようとした祥吾の腕を誠一が掴み、引き止める。

「どうした？ 何があつた？」

尋ねる誠一の声色は優しいが、誤魔化しを許さない厳しさも孕んでいる。

祥吾はその顔から一切の笑みを拭い去り、深い溜息を零す。

「……あの人、すごくしつこかつたから。だから、ちょっと自虐ネタに走ったんだ。そしたら……思いのほか精神的にダメージ食らっちゃつて」

「自虐って、まさかお前……」

「なんで俺、こういう時は不器用なのかな？ なんでかな？ ……ねえ、兄貴。俺ってなんでこうなんだろ？？」

無理に口角を釣り上げて唇を歪め、不自然に笑う祥吾。

繰り返し兄に疑問を投げかけるその声は、ところどころ震えている。

誠一は何も言わず、俯く弟の頭を抱きしめた。

「きやつ！ 兄さんたち、そういう仲だつたんですか！？ こんなに長く一緒に住んでたのに気付かなくてすみません！」

「「違うわ！！」

通りかかった弟の勘違い発言に対する一人の同時ツッコミが久留井家にこだました。

1 - 17

翌日。月曜日。

一年A組の教室へと足を踏み入れた飛鳥川琉奈は、室内に普段とは異なる、不穏な空気が充満していることに気付いた。クラスメイトたちは皆、数人で固まり、遠巻きにある人物を見ながら小声で何か言い合っている。

四方から注目されているのは、久留井祥吾。

「アスカ！ ちょっと！」

眉間に皺を寄せ、ドア付近に立ち尽くしている琉奈の腕を誰かが強く引く。

「！ 紗、これ何なの？」

琉奈は自分の腕を引いた人物 松下紗に尋ねた。

祥吾のモテつぶりに嫉妬していた男子生徒たちはもうろこん、今まで散々祥吾に付きまとい、事あるごとに黄色い歓声をあげていた女子生徒たちまで祥吾から離れ、「そこそと何か話し合っている。

一体これほどの変化を及ぼすほどの何が祥吾にあつたのか、琉奈には皆目分からなかつた。

「これじゃまるで久留井くんがいじめられてるみたいじゃん」

「それがね……その、「久留井祥吾はイケメンなのに、男としては役立たず」って噂が朝から流れてんの」

「はー？」

琉奈は思わず素つ頓狂な声を上げてしまった。

「あたしがその噂を聞いたのは、新聞部の同級生から。その子はうちのクラスじゃないから、多分他のクラスにもちらほら広まってると思つ」

「そうなの？ ていうか、なんて下世話な噂……」

男として役に立たないとはどういう意味なのか、さすがの琉奈にも分かる。

考えれば考えるほど辟易し、琉奈は肩を竦めた。

何故そんな噂が広まってしまったのか。

誰がそんな噂を流しているのか。

「……ねえ、綾、もしかして」

考え始めてすぐにあるクラスメイトの顔が脳裏に浮かび、琉奈は綾に声をかける。

綾も同じ顔が浮かんでいるらしく、一人は教室の隅で他のクラスメイトたちと話している一人の女子に視線を向けた。

妙にすつきりした表情で談笑している彼女の名前は、江田留菜。昨日祥吾と一緒に出かけていたどう女子だ。

「こんなことするの、あの人ぐらいしか思いつかない

「だよね。アスカにも嫌がらせしたし。あんな噂流すつてことは、よっぽど酷いふられ方したのかな？」

琉奈と綾に見られていることに気付いていないらしい江田留菜はいつもの取り巻き面々と楽しそうに会話している。

一方、不名誉な噂を流されている祥吾は周囲の様子など全く気にすることなく、革のブックカバーをかけた文庫本を熟読している。

ホームルームの時間が近づき、一年A組の生徒たちは続々と自分の席へと戻る。

「お、おはよう、久留井くん」

「あ、おはよ、飛鳥川さん」

琉奈が声をかけると、祥吾はいつもと変わらぬ様子で挨拶を返す。

「昨日はボーリングとカラオケ行つたんだって？ 楽しかった？」

「う、うん。彰くん、ボーリング上手いね。先輩も歌上手いし」

「彰の投球フォーム、ふざけてるでしょ？ あれでストライク連発つておかしいよね」

明るく微笑む祥吾につられ、琉奈も昨日の彰のボーリングを思い

出して笑う。

「カラオケでは大変だったみたいだね。みんな怪我とかなかつた?」

「うん。先輩と彰くんのおかげで無事だつたよ」

「そつか、良かつた。八月二十四日だけ、あの日のことは何か分かつた?」

「……ううん、何も」

「そなんだ……。多分飛鳥川さんの身に起つてることと何か関係あると思うんだけど」

「それより! 久留井くんは大丈夫なの?」

琉奈と祥吾の会話に綾が口を挟む。

すぐに綾が言わんとしていることを察したらしい祥吾は、笑顔を崩すことなく「大丈夫だよ」と明言する。

「俺は別に気にしてないし、大丈夫なんだけど。……このこと、あの人耳に入つてなきゃいいけど」

「あんた、俺の弟に何してくれてんの？」

江田留菜の問いを無視し、男子生徒　久留井誠一が抑揚のない声で、江田留菜を見下ろしながら言い放つ。

圧倒的な威圧感に江田留菜は言葉を失い、茫然と誠一を見つめる。

「なあ、あんた、俺の弟に何してんの？」

「あ……あの……」

「何？　よく聞こえないんだけど？」

「兄貴！」

祥吾が誠一と江田留菜の間に割って入る。

「！　祥ちゃん！」

「頼むから落ち着いてよ、兄貴。俺は大丈夫だから、兄貴がこの人にキレる必要ない。分かった？」

「けど、こいつは……」

「誠一兄さん」

有無を言わせぬ祥吾の強い口吻に、誠一は返そうとした言葉を飲み込む。

「これは俺が招いた事態なの。十分想定もしてた。怒ってくれるのは嬉しいけど……俺は大丈夫だから。誠一兄さんは自分のクラスに戻つて」

祥吾が言つ。反論を許さぬ強い語氣に気圧され、誠一は「分かったよ」と渋々祥吾に同意する。

「心配してくれてありがと」

「……ん」

誠一は微笑み、祥吾の頭を撫でた。

そうして無言で二年A組の教室を後にしようとした時。

「祥吾兄さん！　大丈夫ですか！？」

慌てて教室に駆け込んできたのは、中等部の制服を着た長身の男子生徒。

彼の姿に誠一と祥吾は思わず苦笑した。

「落ち着いてよ、彰」

「そりそり。もう済んだから、帰るぞ」

「へ？ そ、 そうなんですか？ なんだ、せっかくマッハ2で走つてきたのに」

残念そうに呟く男子生徒 久留井彰を、「お前は飛行機か」とツツ「コミを入れた誠一が引き連れ、二人は二年A組の教室から去つていく。

彼らの様子を茫然と見つめるA組の生徒たちの頭上を、スピーカーから流れたチャイムの音色が暢気に通り過ぎていった。

「あの兄弟、なんか変だよ」

全ての授業とホームルームが終わつた清掃の時間。やる気なく箋で教室のごみを集めていた秋川浩太がそんなことを口にした。

「変つて何が？」

隣で塵取りを手にしている琉奈が言つ。

「なんか仲良すぎつーか、べつたりしすぎつーか。俺も兄貴いるけど、休日まで四六時中一緒にいないし、もし俺が久留井と同じ状態になつたとしても、うちの兄貴はあんなふうに教室来たりしないよ」

「あたしも同感」

琉奈と浩太の会話に綾が割り込む。

「あたしも妹いるけど、姉妹でもあそこまでべつたりしないよ。べつたりつていうか、互いに依存し合つてるよう見えてるね、あの三兄弟は。でも、誠一先輩力ツコ良かつたなあ」

教室に突入してきた誠一の姿を思い返し、うつとりとした目で宙を見つめる綾の横で、琉奈は「依存か……」と彼女の言葉を繰り返した。

1 - 18

松下綾曰くの久留井誠一二年A組突撃事件から数日後。

平成十八年八月二十四日についての情報は得られぬまま、けれど穏やかな飛鳥川琉奈の日常を破つたのは、幼馴染である秋川浩太から来た一通のメールだった。

放課後、部活へ向かおうとする綾と軽く談笑をしていた琉奈の元にそのメールは届いた。

内容は『今すぐコンピューター室へ来い』という、至ってシンプルなものだった。

コンピューター室は高等部の特別棟四階にある。PCおよそ五十台が並んでおり、放課後は生徒たちがPCを使えるように開放されている。

詳しいことは分からぬまま、とりあえず琉奈は特ダネの匂いがあると言い張る綾と共にコンピューター室へと急いだ。

「あれ？ 琉奈ちゃんと綾ちゃんじゃん！」

コンピューター室へと向かう途中、琉奈たちは久留井誠一・彰兄弟と鉢合せした。

「もしかして誠一先輩たちもコンピューター室に？」

「うん、祥ちゃんに呼び出されて」

「久留井くんにですか？ あたしたちは浩太に呼ばれたんですけど。一体なんですかね？」

「とにかく今はコンピューター室へ急ぎましょ。詳しいことは後でお一人から聞けばいいですし」

彰に促され、四人は共にコンピューター室へと向かつた。

コンピューター室のドアを開けると、数人の生徒たちがPCを使

用しており、その中に琉奈たちを呼び出した張本人である秋川浩太と久留井祥吾の姿もあった。

「どうしたの、浩太？ 急に呼び出すなんて。ていうかあんた部活は？」

「見せたいものがあるんだ。これ見て」

歩み寄る琉奈の問いに答えることなく話を進める浩太。

琉奈は彼が指差す画面を覗き込む。彼女の後についてきた綾、誠一、彰たちも同様にモニターに目を遣る。

「これは……！？」

「秋川くんが見つけたんだ。俺たちだけで調べるのも限度があるし、秋川くんはよくパソコン使つて聞いてたから、ここ何日か協力してもらつて。で、調べてたら出てきた記事だよ」

祥吾が説明する記事とは、今PCのモニターに表示されている、平成十八年八月二十六日付の、一件の刺殺事件の小さな記事だ。

『首を刺された夫婦の遺体発見 A市のアパート』

26日午後3時5分頃、A市の市営アパート3階にある穂積悟さん方で、男女とみられる二体の遺体が発見された。遺体は穂積悟（30）と妻の明美さん（29）と確認された。一人は首を刺され殺害されたとみられる。遺体の状態から、死後2～3日経過している模様だ。なお、長女（2）は無事だった。警察は殺人事件として捜査を進めている。』

「事件の日付が二十六日じゃん。二十四日じゃないけど」

「よく読んでよ。死後二、三日経過つてあるでしょ？ だから、この夫婦の遺体が見つかったのは二十六日だけど、亡くなったのは二十四日つて可能性もあるじゃない」

祥吾の返答に、誠一は「なるほどね」と頷く。

「事件発生から発覚までタイムラグを考えないで、平成十八年の八月二十四日に起こった事件についてだけを調べてたから何も見つか

んなかつたんだよ。調べる日付を広げた結果、他にも何件か似たような事件がヒットしたんだけど、この事件に絞ったポイントは生き残った一歳の女の子。今から十五年前に一歳だつたってことは、今は十七歳になつてゐる。飛鳥川さんの年齢と合致するでしょ？」

「それは、そうだけど……そりじゃなくて」

震える声で答える琉奈は酷く動搖していた。

年齢が合致しているのはもちろんだが、それ以上に琉奈を混乱させたのは、記事の中にある「長女」の一文字だ。

もしこの記事の中にある子供が自分であるとするならば、自分は

。

「！ アスカ、大丈夫？」

パニックを起こしかけている琉奈に気付き、浩太が声をかける。

琉奈は「大丈夫」と返そうとしたが、口をぱくぱくと魚のようじに動かすことしかできなかつた。

とてもじゃないが、嘘でも「大丈夫」などと言える状態ではなかつた。

「！ アスカ！」

浩太の呼びかけに応じることなく、琉奈は脱兎のじとくロンピューター室を出ていった。

「……どうやら作戦失敗だみたいだね、秋川くん」
祥吾の台詞に浩太が「そうだな」と応じる。

「作戦？ 作戦って何なの、祥ちゃん？」

「いや、まず年齢に注目させて、長女云々つていうのは後からゆっくり解明していこうつて秋川くんと話してたんだけど……鋭いね、すぐ気付かれちゃつた」

「なになに、なんで長女つてところがダメなの？」

「頭悪いですね、誠一兄さん」

「なにい！？」

「長女つてことは、この生き残った女の子は死んだ穂積夫婦の娘つてことになるじゃないですか。で、今のご両親は本当の親じやない

つてこともありますし

「……あつ！」

彰に指摘され、ようやく事態の深刻さに気付いた誠一は一際大きな声を上げ、手を打つ。

「あたし、アスカ追いかけます！」

「うん、お願ひ、松下さん」

祥吾の後押しを受け、綾は琉奈を追つてコンピューター室を後にする。

残った男四人は再びPCのモニターに向き直る。

「この事件の続報つてないの？」

「新聞の地方版には載つてたかもしれないけど、ネットで探した範囲では何も……。なんせ古い事件だし、他の凶悪事件の陰に隠れちゃって」

苦々しげにモニターを見つめ、時折スクロールバーを上下に繰り返し動かしながら浩太が言う。

「本当にこの長女つていうのが琉奈ちゃんのかな？」

「可能性は十分あると思いますよ。飛鳥川先輩の本当の両親が同一の部屋で死んだのなら、二つの魂が同一の空間にいたのも納得できます。ただ、父親の魂か母親の魂か分かりませんが、本来子供を保護すべき親の魂が子供をトヨノ国に引きずりこんで攻撃までする、というのが気になりますね。その点を解明するためにも、事件の経緯をもつと詳しく知るべきですね」

「……飛鳥川さんには辛い思いをさせちゃったね」

刺殺事件やトヨノ国での出来事について考察する兄弟たちの横で、祥吾は誰に聞かせるでもなく静かに呟いた。

琉奈の姿は一年A組の教室にあった。

「アスカ……」

「ごめんな、取り乱したりなんかして」

窓から差し込む西日によつて橙色に染め上げられ、普段と違う顔

をしている教室は、綾にはトコトコノ国のように別次元なものに感じられる。

そんな空間で唯一人、自分の席につき、机上の鞄に視線を落としたまま琉奈が謝った。

「仕方ないよ。だつて……あんなこと知つたら、誰だつてそうなるよ」

「でもね、あたし……心のどこかでずっと思つてたんだ、小さい頃から」

「アスカは薄々分かつてたんじゃないかな」

琉奈の心情に思いを巡らし、沈黙する久留井三兄弟に浩太がそう切り出した。

「それってどういいうこと、浩太くん？」

「うちでも何度も話題に上つたことがあるんですけど……あいつ、他の家族の誰とも似てないんです」

「…………」

「強いて言えば母親に多少似てると思つけど、それでも一人が並んで立てばようやく分かるくらいで」

「お父さんとは全然似てないし、もちろん父親似の兄とも似てない。近所のおばさんとか、友達の親とか、無神経な人たちからも似ていわねつて言われたことが何度かあつたの。だから、確かにショックだったけど、やっぱりねつて気持ちもあるんだ」

淡々と話す琉奈。

綾は琉奈の頭を無言で撫でる。

「今日はつきりさせるよ。そして、何かが起きる前にトコトコノ国のことも解決しなくちゃ」

「お父さん、お母さん。あたし、一人の実の娘じゃないの？」

夕食後。一家団欒の時間。

ソファで一人テレビを見ている兄を背に、両親と共にお茶を飲んでる最中、琉奈はそう切り出した。

両親は茶を啜るのをやめ、「どうしてそんなこと言うの？」と母親が琉奈に問いかける。

「八月二十四日のこと調べてたら刺殺事件の新聞記事を見つけたの。そしたら、そこに長女って文字があった。あたしは本当は穂積つて夫婦の娘なの？」

問いを重ねる琉奈に対し、両親は沈黙する。

「ねえ、教え……」

「もういいだろ」「もういいだろ」

琉奈の言葉を遮ったのは、彼女の背後にいた兄だった。彼は更に続ける。

「もう話せばいいだろ、一人とも。ここまで知られた以上、隠し通せねえだろ」

「兄さん……」

「俺はお前の兄じゃない。俺はお前の従兄弟だ」

「従兄弟……！？」

「母さんの妹の名前は明美。亡くなつた穂積明美さんは母さんの妹なんだ」

絶句する琉奈に父親が告げる。隣に座る母親の顔には涙が滲んでる。

「明美ちゃんが悟と結婚したのはお前が生まれる一年前のことだった。結婚当初の二人は幸せそのもので、お前を妊娠してると分かっ

た時、一人は本当に幸せそうだった。……本当に幸せだつたんだ、あの時の二人は

「あの時は？ その後何があつたっていうの……？」

「お前が生まれてからしばらくして、悟が勤めていた会社が倒産したんだ。その後の再就職もうまくいかず、悟は次第に荒れ始めた。昼間はギャンブルに明け暮れ、夜は延々と酒を飲み、やがて明美ちゃんに手を上げるようになつてしまつた」

「典型的な暴力夫だな」

兄が横槍を入れる。琉奈も内心確かに、と思つた。

テレビドラマや生き別れた肉親を探す番組の再現映像などでは見たことがあるが、それが現実に、しかも自分の実の父親がそんな人間だつたとは。

ショックだつた。

「悟くんは初めはそんな人じゃなかつたのよ」

それまで沈黙を貫いていた母親が口を開く。

「昔は明るくて、礼儀正しくて。この人なら明美を幸せにしてくれるつて、私もおじいちゃんたちも信じてたの。なのに……」

「明美ちゃんは頑張り屋さんで、他人に対しても気遣いすぎるところがあつた。俺たちが悟がしていたことの全て知つたのは、事件が起きた後だつた。もつと早く気付いてあげていれば、あんなことはならなかつたのかもしれない。明美ちゃんにも、お前にも申し訳ないことをした」

「一体何があつたの？ どうしてあたしの実の親は殺されたの？」

母親の言葉を引き取り、語り続ける父親に琉奈が問う。

父親は重苦しい溜息を一つ、何かを決意するように吐き出し、話し始める。

「平成十八年八月二十六日、近所の人からの通報で、悟と明美ちゃんの遺体が家から見つかった。二人の死因は刺し傷による失血死だつた。お前は多少腹を空かしていたものの、至つて元気だつた。

二人を殺した犯人は誰なのか、警察が捜査した結果、分かつたの

が今から話すことなんだが……お前にとつてすゞくショックな内容だと思ひ。それでも全て聞きたいか？」

父の言葉に琉奈は無言で頷いた。

ショックな内容、といつ言葉にしり込みをしなかつた訳じゃない。けれど、それ以上に真実を知りたいという気持ちが強かつた。

この気持ちが強いうちに全てを聞いておかなければ。

琉奈はそう感じた。

「……分かつた。お前の覚悟を尊重しよう。

まず、明美ちゃんを殺したのは悟だ。明美ちゃんは刺される前、全身を殴られていた。悟の手には、明美ちゃんを殴った時に負つただろう傷もあつた。遺体の検視結果から、死ぬ直前まで悟は酒を飲んでいたことも分かつてゐる。おそらく酔つた勢いで明美ちゃんを殴り、包丁で刺し殺したんだろう。

そして、悟を殺した犯人だが……包丁からは一種類の指紋が出た。一つは悟のものと一致した。そしてもう一つの指紋は……琉奈、お前のものと一致した

「……？」

「あくまで状況から推理した警察の見解だが……明美ちゃんを殺した後、そのまま眠つてしまつた悟を、琉奈が明美ちゃんの体から引き抜いた包丁で刺して殺したんだろう」

琉奈は告げられた事実の大きさと重さに茫然とし、目を見張り、体を震わせる。

「あ……あたしが……殺し、た？」

「お前を引き取つてしばらくした頃、母さんが包丁を持つのを見て、「それでお魚を動かなくするんだね」と言つたことがあつた。おそらくお前は明美ちゃんが刺し殺されるのを遠くからか、明美ちゃんの腕からか見ていて、包丁イコール生き物の動きを止める道具だと思つたんだ。だから、母を殴る父を止めたい一身で母の首から包丁を抜き取り、寝ている父の首に突き立てたんだ。

決して殺すつもりはなかつただろう。まだ死というものを理解で

きるはずがなかつたからな。それに、悟の暴力は時々お前にまで及んでいたんだ。父を止めたいと思つて当然だよ。だから、お前はちつとも悪くないんだ、琉奈

「で、でも……でも！　あたし……あたしが……あたしが！　ホントの父を殺したんだ！　この手で！」

「琉奈！」

「この手……この手で……殺したんだあ……！」

「！」

両親が気付いた時には既に遅かつた。

琉奈は椅子から立ち上がるなり、田代も籠おりぬ速さで血弾から駆け出していく。

だからか。

あたしが殺したからか。

あたしに殺されたからか。

だから父の魂は怒りに満ちていたのか。

恨みを晴らしたいからトロコノ国に引きずり込んでいたのか。

あてもなく走り続けながら、琉奈は頭の隅で考える。

普通じやないことが起きている自分に、普通じやない過去がある」とは覚悟してゐつもりだつた。

けど、ちょっとこれはハード過激。

内心ひとりじめ。

涙が溢れて止まらない。

なんで泣いているんだろう？

両親が実の親じやなかつたから？

実の親が死んでいたから？

自分が父親を殺したから？

「飛鳥川さん！？」

唐突に名前を呼ばれ、琉奈は反射的に立ち止まる。

眼前にいるのは、スーパーで買い物を済ませたばかりらしい久留井祥吾だった。

いつの間にか、やや離れているはずの彼らの生活圏にまで来てしまっていたようだ。

「ちょっと、どうしたの！？ 大丈夫！？」

何か拭く物はないかとジーパンのポケットを漁りながら駆け寄つてくる祥吾に琉奈は縋りつき、声をあげて泣いた。

子供のように、感情の向くままに。

祥吾は黙つて琉奈の背中に手を回し、優しく撫でた。

久留井家の人々は、祥吾に連れられてやつて来た、目を真っ赤にした琉奈を暖かく自宅へ招き入れた。

優しく、一体何があつたのか問われ、琉奈は少しずつ、ゆっくり話し始めた。

自分が一歳の時にあつた出来事を。

父が酔つた勢いで母を殺したこと。その父を、殺すつもりはなかつたとはいえ、己が手に掛けたこと。やはり今の両親は本当の親ではなかつたこと。

飛鳥川夫婦から知らされた真実の全てを彼らに話した。

彼らは黙つて琉奈の告白に聞き入つた。

「てことは、やっぱりあの二つの魂は琉奈ちゃんの『』両親のものだつたんだね」

全てを聞き終え、誠一が言つ。

「ですね。先輩に攻撃を仕掛けたのが父親の魂で、あの時僕らをトココノ国から脱出させたのが母親の魂と考えるのが妥当でしょう。父親の魂は殺された恨みから先輩をトココノ国に引きずりこんで殺さんとし、母親の魂は先輩を守るためにトココノ国から脱出をせっていた。そういうことでしょうね」

「飛鳥川さんはどうしたい？」

祥吾の言葉に琉奈は首を傾げる。

「君の父親の魂をどうしたいかってこと。俺たちは父親の魂を散らすことができるけど、君の父親の人格が魂に存在している以上、君の許可なしに散らす」とはできないから

「散らして欲しい」

琉奈は即答した。

一切の逡巡のない返答に、久留井家一同は少々面食らつ。

「話してゐるうちに落ち着いてきて、冷静に考えられるようにんつたんだけど、自分の本当の親とはいえ、人殺しのろくでなしに成り下がつた人間の魂なんだよね。それなら、他の魂の為になるように散らしてしまつた方がいいんぢゃないかなつて。

正直、穂積悟が本当の父親つて言われても実感がないの。あたしの両親は今あたしが住んでる家にいるし。あたしが穂積悟を殺してしまつたつていうのはショックだし、彼に殺されても仕方ないのかもしれないけど、あたしはまだ生きたい。殺されないで済む方法があるのなら、そっちを取る」

琉奈がきつぱりと言い放つ。

その言葉は全て、が揺るぎない強さを持つており、迷いなど欠片もないことが伺えた。

「琉奈ちゃんがそこまで言うなら、俺らは協力すうしかないな」

「だね。力になるよ、飛鳥川さん」

「僕たちが全力でサポートしますよ」

三兄弟の力強い申し出に、琉奈は「ありがとう」と、ようやく彼らに笑顔を見せた。

「……それで、いつ父の魂を散らしてもらえるんですか？」

琉奈の素朴な質問に、それまで頼り甲斐に溢れていた三兄弟は一様に、石化したように動かなくなつてしまつた。

「昔はね、現世の人間をトコヨノ国に送り込める、巫女と呼ばれる人がいたんだけどね」

そう話しながら歩み寄つてくるのは、三兄弟の母である恭子だ。彼女が手にしているトレーには、緑茶とマドレーヌという不思議な組み合わせが人数分並んでいる。

「残念ながら、今はその力を持つ人がいないのよ」

「ということは、向こうがあたしを引きずり込むのを待つしかないつてことですか」

恭子の言葉の真意を察し、琉奈は肩を落とす。

「でも、できるだけのことはするから」

「やつやつー 僕も祥ちゃんも彰も側で、いつ引き込まれても対処できるようにするからー。」

「はい。ありがとうございます、先輩」

琉奈は微笑むが、どこか不安を残した笑みだ。

「……あら、もうこんな時間。どうする、飛鳥川さん？ 帰るなら送らせるけど」

恭子の提案に、琉奈は俯いて考えあぐねる。

確かに三兄弟に送つてもらえばまだ十分安全な時間はある。けれど、今は帰つても両親や兄の前でどんな顔をすればいいのか分からぬ。

「なんなら泊まつてくれ？」

琉奈の心中を察し、恭子が囁つ。

「……いいんですか？」

「服は私でよければ使つてもらつて構わないし、お風呂は……この子たちが使つた後だから、シャワーでいいなら。遠慮することはないわよ」

「……じゃあ、お言葉に甘えていいですか？」

「もちろんー 子供なんだから、大人には甘えないと」

「大人あ？ 恭子さんが？」

「少なくとも、あんたよりは大人よ、誠一。……あんた、飛鳥川さんのシャワー覗き見したりしたらダメよ？」

「そんな、するわけないじゃん！ しないからね、琉奈ちゃん！」

恭子の忠告を否定しつつ、思わず身構えた琉奈に弁明する誠一だが、恭子は更に追い討ちを掛ける。

「そう？ あんたの本棚の奥にある本の数々を見る度に、あたしはあんたの性癖が心配で心配で」

「え？ それはこの前クローゼットの中に移動させたはず ツ！」

誠一は慌てて両手で口を塞ぐが、時既に遅し。

「彰、今度はクローゼットの中らしいわよ」

「ありがとうございます、母さん」

「なんつづ一母親だ……」

誠一の軽口に対し十倍以上の仕返しを成功させた恭子を見つめ、祥吾が呟く。

「飛鳥川さん、こいつらは私が見張ってるから、安心してシャワー使ってね。親御さんには私から連絡しておくから。今日はここを我が家だと思って寛いでね」

「恭子さん」

琉奈の寝具一式の準備を終え、客間を後にしようとした恭子を呼び止める声がした。

声の主は、彼女の正面に立っている誠一だ。

「どうしたの、誠一？」

「琉奈ちゃんの父親の魂を散らす話だけど、由香理さんに来てもらつたらどうかな？」

誠一の言葉に恭子は表情を曇らせた。

「一族の中でもどちらかといえば力はある方だし、あの人なら年の功でうまくやつてくれそうじゃん」

「それはそうかもしだいけど……大丈夫なの？」

誠一の側に歩み寄り、恭子は彼の頬に触れる。誠一は心配しないで、とでも言ひように微笑む。

「琴子さんでもできるんだろうけど、その場合、祥ちゃんのメンタルが心配だし。由香理さんなら祥ちゃんと彰は好かれてるしむ。俺なら大丈夫だよ」

「……ごめんな。私に力が残つてれば、あなたに辛い思いさせないで済んだのに」

「ないものねだりしても仕方ないじゃん、恭子さん。これくらいは耐えないと。俺は兄貴なんだから」

「ごめんな、誠一」

再度謝つた恭子が誠一を抱きしめる。

誠一は何も言わず、恭子の腕の中で深く、ゆっくり息を吸つた。

「シャワーありがとうございました。パジャマまで用意してもらつた

ちゃつて……」

入浴を終え、リビングへ戻ってきた琉奈がキッチンにいる恭子に声を掛ける。

「いいのよ。あ、さつき！」両親に連絡しておいたから

「ありがとうございます、何から何まで……」

「すごく心配なさってたから、なるべく早めに帰つてあげてね

「……はい」

まだどんな顔で両親と会えばいいのか分からない。

けれど、きちんと向かい合つて話す必要があるだろう。

「ねえ、学校でのあの三人つてどんな感じなの？」

「学校で、ですか？　ここにいる時と変わらないですよ。いつも仲が良くて、楽しそうで……」

あの兄弟、何か変だよ。

いつだつたかに浩太が言つた台詞が、不意に琉奈の脳裏に蘇る。仲が良すぎだ、と。べつたりしすぎだ、と。依存しているようだと。

あの時、浩太と綾はそう話していた。

琉奈自身は兄妹の関係が希薄なのでよくは分からないが、二人の話を聞く限り、彼らの関係の強さは普通ではないらしい。

「仲が良すぎるのも考え方だけね」

口ごもつた琉奈が言おうかどうか迷つている事柄を察したのか、恭子が苦笑しながら切り出した。

「親である私が言うのもあれなんだけど……あの三人は自分たちの生まれた環境や能力のせいで、普通と違う育てられ方をしてきたの。多分、一般の人より過酷な、ね。そんな中で三人は互いに支えあって生きてきたの。きっとその癖が今も抜けないのよね。誰か一人が倒れそうになつたら、残つた二人が全力で支える……他人を頼らずに。そういう生き方しか知らないのよ」

琉奈は話を聞き、過去のある光景を想起した。

一年A組の教室に乗り込み、江田留菜に詰問した誠一と、わざわ

ざ中等部から駆けつけた彰の姿。

あれはきっとピンチ　本人はそう感じていなかつたが
つた祥吾を助けようと、反射的に起こした行動だつたんだろう。
「何かと手が掛かるけど、みんな根はいい子たちなの。これからも
仲良くしてやつてね」

そう琉奈に頼んだ恭子の笑みはどこか切なげだった。

翌朝。

久留井祥吾が起床し、リビングへやつてくると、そこにあつたのは朝食の準備をする恭子の姿のみで、客人である飛鳥川琉奈の姿はなかつた。

「おはよ、恭子さん。飛鳥川さんはまだ寝てるの？」

「もう帰つたわよ」

「そつなの？　朝食食べていけば良かったのに」

「学校行くなつて言つから。私服で行くわけには行かないでしょ

「あ、そつか」

恭子の指摘に祥吾はポン、と手を打つ。

「おはようございます……」

祥吾の背後から、呪いをかける呪文でも唱えるような口調で挨拶していく声がした。

振り返つた祥吾の前にいるのは、超ローテンションの末っ子・彰だ。

「おはよ、彰。相変わらずの低血圧つぶりだね」

半ば呆れている祥吾に、彰は「んむー」と意味不明な返事をする。「誠一はまだ起きてないの？」

「兄貴はいつも通りまだ熟睡中。美女の夢でも見てんのか、めっちやにやけてたよ」

「私の話が終わつたら、即行で現実に引き戻してやりなさい。……

今度の日曜日、由香理さんが来ることになったから

由香理、といつ名前を聞いた瞬間、祥吾は「え？」と小さく声をあげ、彰はそれまで眠気のあまり半開きだった瞼を限界まで開く。「飛鳥川さんにも日曜日開けておいてもらひよひつけた言つてあるから。

彼女の件、日曜にかたをつけなさい」

「ちょっと待つて、恭子さん！ それ、兄貴は

「知つてるわよ。ていうか、由香理さんを呼ぶよひよひ進言したのが誠一なの」

「でも、由香理さんつて誠一兄さんのことを毛嫌いしますよね。誠一兄さんもそのことを分かつてはずなのに、何故由香理さんを？ 同じような力を使える人なら琴子さ――」

彰は全てを言い終える前に慌てて口を開じる。が、既にノロードを口走ってしまった後だつた。

「……兄貴が由香理さんでつて言つたんだ？」

「そうよ。琴子さんじゃなく、由香理さんでつて」

「そつか。……俺、兄貴起こしてくる」

回れ右をした祥吾は足早にリビングを後にし、自分たちの部屋がある一階へ駆け上がる。

祥吾の姿が見えなくなつたのを確認した恭子は、引き出しの中からおたまを取り出し、

「いたつ！」

彰の頭を叩いた。

「馬鹿息子」

「すみません……」

祥吾は誠一の部屋のドアを勢いよく開くなり、

「兄貴！！ 朝だよ、起きるーー！」

と声を張り上げた。

ベッドの上で惰眠を貪っていた誠一は頭から被つている布団の隙間から、自分を夢の国から現実へ強制送還した弟を恨めしげに睨む。

「早く起きないと遅刻するよ？」

「いーんだよ、ヒーローってのは遅れて登場するもんなんだから」

「訳の分かんないことを」

溜息をつき、祥吾は誠一が寝ているベッドの腰を下ろした。

「兄貴が由香理さん呼ぼうって言つたんだって？」

「……そーだけど」

「なんであの人の？」

「別に。ただ、あの人独身だし、あのでかい屋敷で暇してんだろうなって思つたから」

「またそんな毒吐いて」

「いーの。どうせ俺はこれ以上嫌われようがないってくらい嫌われてんだから」

鼻で笑う誠一の体を横切るように、祥吾は仰向けに倒れこむ。

「ちょっと祥ちゃん、重いっス！」

「ごめん」

「なんで祥ちゃんが謝るの？」

「兄貴にとつては母さんを呼ぶ方が気が楽だったのに。氣を遣つてくれたんでしょ？」

「……俺は祥ちゃんの兄貴だもん。俺の我慢でどうにかなるくらいなら、いくらでも我慢するよ。それに、男の泣き顔なんて可愛くないし」

「泣かないよ！……ありがと、誠一兄さん」

誠一は上体を起こし、田元に手の甲を押し当てる祥吾の頭を乱暴に撫でた。

思惑（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syose
tu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syose
tu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syose
tu.com/n1078u/

1 - 22

世間的には早朝と呼ばれる時間に帰宅したにも関わらず、両親の姿がリビングにあったことに、琉奈は目を見張った。

「ずっと起きてたの？」

「まさか。ちゃんと寝たさ。けど、俺も母さんもお前がこのくらいに帰ってくるだろうと思つてな」

「……あたしのことなら何でもお見通し?」

「親子だからな」

父の言葉を聞いた刹那、琉奈の胸に小さな、けれど鋭い痛みが走る。

「けど、本当は

「親だ」

父親が断言する。母親もその言葉に深く頷いた。

「確かに私たちの間に血の繋がりはほとんどないけど、私たちにとってあなたはかけがえのない娘。それは何があつても変わらないわ。だからあなたにも、これからも私たちが自分の親だと認めて頂戴」

「……そんなの、当たり前に決まってるじゃん。あたしにとつて、親はお父さんとお母さんしかいないよ……！」

琉奈の涙ながらの言葉に両親は安堵の溜息を漏らし、彼女を強く抱きしめた。

「アスカ！！」

「アスカ、大丈夫なの！？」

琉奈が教室に入るなり、松下綾と秋川浩太の二人が一斉に駆け寄

つてきた。

「一体何事かと思ったら、琉奈だつたが、昨晩家出した後、両親が彼女の行方を特定すべく、久留井家から連絡が来るまで様々な場所に電話を掛けた、という話を思い出し、友人たちの慌てよう納得する。「心配かけてごめんね、綾、浩太」

「琉奈が家出したって聞いて気が気じやなかつたんだからね！？連絡取ろうにもケータイも持つてないって言つし！」

「ケータイのこと考える余裕もなくて……。ホントにごめんね、あたしは見ての通り無事だから」

涙目になつて、綾や浩太を宥めるように、穏やかな口調で琉奈が言つ。

「結局、昨日はどこにいたんだよ！？」

「それが……家出の途中に久留井くんに会つて、そのまま久留井くんの家でお世話になつちゃつた」

「ええ！？ 久留井くん家に泊まつたの！？」

綾が驚きのあまり、琉奈の十倍のボリュームで叫ぶ。

琉奈は慌てて綾の口を両手で塞ぐが、既に綾というスピーカーによつて、琉奈が久留井祥吾の家に泊まつたという事実が、教室にいるクラスメイト全員に知れ渡つてしまつた後だつた。

「く……久留井の家に……！？」

「何ショック受けんの、浩太？ 久留井くんの家には先輩も彰ぐんもお母さんもいるの知つてるでしょ？」

「あんた、まだあの男と関わつてんの？」

「三人の会話に別の声が突然割り込んできた。

琉奈たちは声の主へと視線を向ける。そこにいるのは江田留菜だ。彼女の姿を目にした途端、琉奈たちの目つきが険しくなる。

「別にいいでしょ、クラスメイトなんだから」

「でも家に泊まるなんて、ただのクラスメイトにしては随分親しいみたいじゃない」

「……まだ久留井くんのこと好きなんだ？」

綾の指摘に江田留菜は頬を紅潮させ、「そ、そんなわけないでしょ！？」と、まだ未練があることが丸分かりな態度で否定する。

「あんな酷いことしといて今でも好きつて……よく分かんないなあ」「分からないつて何が？」

肩を竦めて呟いた綾に尋ねたのは、登校したばかりの久留井祥吾だ。

「あ、おはよう、久留井くん！ 今日は『めんね、声もかけないで勝手に帰っちゃって』

「ううん、気にしないで。俺がぐーすか寝てたのが悪かつたんだし」「本当にこいつの家に泊まつたのか、アスカ……」

「『めんね、秋川くん。でも安心して、飛鳥川さんには何もしてないから』

「当たり前だ！」

顔を真っ赤にして憤慨する浩太に苦笑する祥吾。そのくつきりとした大きな瞳がすぐ側にいる江田留菜を捉えることはない。そのことに耐え切れなかつたのか、江田留菜は足早にその場を立ち去る。

小さな背中が遠ざかっていくのを無言で見送る琉奈に祥吾が

「ところで、日曜のことなんだけど」と突然話しかけた。

「『日曜って何！？』

祥吾の発言に、鬼すら取つて喰いそうな形相で綾と浩太が囁み付く。

「いや、日曜に飛鳥川さんの件の決着を付けようつてことになつて、その説明をしようとした……」

「決着？ どういうことなの？」

「……詳しい話はお昼休みにでもしよつか。それでいいよね、飛鳥川さん？」

「うん。そこまでいたら、綾と浩太にも聞いて欲しいし」

祥吾に同意する琉奈。

決意を固めた彼女を賛美するように、スピーカーからチャイムが高らかに鳴り響いた。

昼休み。高等部の屋上。

雲一つない、澄み切った蒼穹の下に集まつた面々を、その場にいる部外差の生徒たちが凝視している。

設置されているベンチのうち二つを占領している、注目の的となつてゐる集団は、普段屋上をよく利用している飛鳥川琉奈、松下綾に加え、部員との昼食をパスしてやつてきた秋川浩太、そして誠一・祥吾・彰の久留井三兄弟の六名だ。

イケメン兄弟として校内で評判の三兄弟は、当然周囲の視線をその身に浴びているのだが、三人とも全く気にすることなく、自然体を貫いている。

却つて注目されていない他の三人の方が動作がギクシャクしている。

そんな六人の手元にあるのは、各自の本日の昼食。

琉奈、綾、祥吾、彰の手中には弁当箱があり、浩太はコンビニのパンを、誠一は学校の購買部のパンを手にしている。

「……先輩、それ何パンですか？」

綾が誠一の手にしているパンを覗き込む。

「これ？ これはトリプル焼きパン！」

高らかにパンの名前を告げ、掲げたそのパンの間には、焼きそばとたこ焼きとお好み焼きが少しづつ挟まつていて。

「うちの学校の購買はずいぶん変り種のパンを作つてるんだね」

「これで購買のパンの半分は制覇したかんね」

呆れ顔の祥吾に、誠一は眩しいくらいの笑顔と共に親指を立てる。一方、同じくパンを手にしている浩太は、至つて普通のサンドイッチに口をつける。

「久留井くんたちはお弁当なんだね」

琉奈が目を遣つた弁当箱の中には、ふりかけがかかつたご飯と卵

焼き、ウインナー、温野菜などのおかずが詰まっている。

「あ、たこさんウインナー！」

「あげませんよ」

宝物でも見つけたような声をあげた誠一を彰が牽制する。いじわる、と誠一は恨めしげに咳く。

「久留井くんが作ったの？」

祥吾と彰の弁当を見比べながら綾が尋ねる。
彼らの弁当は同じおかずが同じ位置に配置されており、同一人物が作ったものであることが伺えた。

「ええ、祥吾兄さんに作って頂きました。僕は祥吾兄さんの弁当じゃないとお昼食べた気にならなくて」

「恭子さんが作ると、たまにとんでもない弁当になるもんな。その点、祥ちゃんなら安心。料理も上手いし」

兄と弟に立て続けに褒められた祥吾の頬に淡く朱が差す。
「……祥奈ちゃんのはお母さんに作ってもらつたの？」

「はい。今日帰った後に急ピッチで」

「……大丈夫だった？」

心配そうに顔を覗き込んでくる祥吾に、琉奈は「うん」と微笑んだ。

琉奈は綾と浩太に、昨日明らかになつた自分と、自分の本当の親について話した。
綾は時折口を挟みながら、浩太はずつと無言で、琉奈の話に耳を傾けた。

そして、今の両親とは今までの関係をどこにでもいる親子の関係を続けていくことも、綾と浩太、三兄弟にも告げた。

「じゃあ、今度は日曜日のことについて説明するね」

琉奈の話が一頻り終わったところで祥吾が切り出す。

「次の日曜日、飛鳥川先輩の件のかたをつけます」

彰はそう明言し、自身の弁当の最後のワインナーを口の中に放り込む。誠一が涙目で「たこさんワインナー……」と呟く。

「方法だけど、うちの一族の一人に当日来てもらつて、飛鳥川さんの父親の魂が彼女をトコロノ国に引きずり込むよう働きかけて、それに相手が乗つてきたところで俺たちも便乗して一緒にトコロノ国へ行き、魂を散らす。これでいこうと思うんだけど」

祥吾は誠一の手にしているパンの上に、残っていた自分のウインナーを乗せる。誠一は絢爛たる笑みを浮かべ、救世主でも見るような瞳で祥吾を見つめる。

「一族の人って誰？」

「久留井由香理。僕たちの伯母にあたる女性です」

綾の疑問に答えたのは彰だ。

「彼女はさほど強い力を持つているわけではありませんが、それでもトコロノ国に何かしら働きかける程度の力はあるので、今回来てもらつことにしたんです。既に承諾もしてもらっています」

「それ、アスカに危険はないのか？」

「……正直に言えば、危険がないわけじゃないんだ」

「!?

率直な意見を口にした誠一を、浩太が鋭く睨みつける。

「以前、琉奈ちゃんの父親の魂と対峙してみて、強い魂だつてことが分かつたんだ。不意打ちとはいえ、彰を吹っ飛ばしたりさ。それでも俺たち三人でかれれば散らせる自信はあるけど、多少琉奈ちゃんに危害が及ぶ可能性は否定できないんだ。もちろん琉奈ちゃんを守るために全力は尽くすけど」

「……それでも構いません」

誠一の至誠溢れる言葉に琉奈が応える。

「もうトコロノ国に引きずり込まれることがなくなるのなら、それでもあたしは構いません。だから、力を貸して下さい！」

懇望する琉奈を見つめ、誠一、祥吾、彰の三人は一様に、力強く

頷く。

「なあ、それって俺も行つたらまずい？」

「あたしも！ あたしも行きたい！」

「え？ それは……どうする、兄貴？」

綾と浩太の申し出に困惑した祥吾が誠一に助言を求める。

「うーん……そうだなあ、トロコノ国に一緒に行くのは許可できな
いけど、それでもいいなら」

誠一の提案に、綾と浩太は口を開けて「行きますー」と答えた。

「じゃあ、日曜の朝十時いうちに集合つてことだ」

空になつた弁当箱に蓋をし、祥吾が言つ。

午後の授業の予鈴が決意に満ちた屋上に響き渡つた。

結束（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

1 - 2 3

数日後。

空を舞う小鳥たちが暢気に互いの歌を聴かせ合っている中、飛鳥川琉奈、松下綾、秋川浩太の三人は自転車に跨り、久留井家にやって来た。

「いらっしゃい。どうぞ上がって」

三人を優しく迎え入れたのは久留井恭子だ。

彼女に促されるまま、久留井家のリビングへと歩を進めた琉奈たちを待っていたのは、どこからだった様子の誠一、祥吾、彰の三人。

「お、おはようございます……」

「ん？ ああ、いらっしゃい、三人とも！」

三兄弟の様子に不安を覚えつつ、声をかけた琉奈にこたえた誠一は普段と変わらぬ明るい笑顔を、先ほどまで苛々全開だった顔に浮かべる。

「何があつたんですか？」

「いや、伯母さんがなかなか来ないもんだから」

恐る恐る尋ねた綾に、祥吾が溜息混じりに答える。

「九時三十分には来て頂くよう伝えておいた筈なんですが。約束の時間からこつして二十分経過しても音沙汰なしなんです。困ったものですよ」

祥吾の発言に補足説明をした彰もまた、海よりも深い溜息を漏らす。

「つてことだから、三人ももう少し待つてもうつって

「その必要はないわよ」

誠一の言葉を即行否定した声は、琉奈たちの背後から響いてきた。

鋭く、高圧的かつ威圧的なその声に、琉奈は思わず眉を顰める。無遠慮に琉奈たちを分け入つて三兄弟の前に歩み出たのは、ウーブのかかったロングヘアが印象的な、目元を大きなサングラスで隠し、派手な柄の入つた黒のワンピースを身にまとつた中年女性。

「いらっしゃい、由香理お義姉さん」

「久しぶりね、恭子。上がらせてもらつたわよ。それにしても、また随分狭い家に住んでるのね」

「向こうのお屋敷に比べたら、どんな家も狭くなっちゃうわよ」

ストレートな嫌味に対し、恭子は笑顔で応対する。

「ご無沙汰しています、由香理伯母さん」

「彰！ 元気そうね。祥吾も元気？」

「はい、見ての通りですよ」

「たまにはその元気な顔を琴子に見せに、こっちにいらっしゃいな」祥吾は一瞬、苦々しい表情を浮かべるが、すぐに笑顔に切り替え、「はい」と返事する。

「……こんにちは、由香理さん」

「ああ、そっか。あんたもいたんだつけ

「ええ」

「いつの間にかあんたの姿を屋敷で見かけなくなつてすつきりしたと思つたら。そう、ここにいたの」

彰や祥吾の時とは違う、誠一への、全く血の通つていらない応対に、琉奈たちは脳裏をハテナマークでいっぱいにする。

「お義姉さん、後ろの真ん中にいる子が電話で話した飛鳥川さんよ」誠一と由香理の素つ氣無いやりとりの間に割つて入り、恭子が切り出す。

由香理はロングヘアを靡かせながらくるりと振り返ると、サングラスを持ち上げ、琉奈の顔をまじまじと見つめる。

「この子？」

「そう」

「ふうん……なるほど、確かにトコトコノ国の大澤が体中にこびり

つこてるわね

「へー?」

思いもよらないことを言われ、琉奈は思わず素つ頓狂な声をあげる。

「じゃ、準備をするから、みんなどつかで待つてなさい。あ、恭子と誠一はここに残つて手伝つて

「え? 僕え?」

あからさまに嫌そうな顔をした誠一に由香理は、

「テーブルどかしたりつていう力仕事を祥吾や彰にやらせるのは可哀想なもの

と平然と言い放つ。

誠一は肩を落としつつ、「分かりました」と答えた。

「あの人何なの!?

待機場所にすることにした祥吾の部屋に入るなり、綾が叫んだ。

「ちょっと、綾! 声大きいつてば!」

「だつて、誠一先輩にあんな言い方……!」

すっかり憤慨している綾を、琉奈がどうぞいへと宥める。

「なあ、なんであの先輩はあんなに嫌われるんだ?」

浩太の素朴な疑問に祥吾と彰は俯き、視線を琉奈たちから逃がす。

「……伯母さんは兄貴の母親が嫌いなんだ」

しばらくして、先に口を開いたのは祥吾だった。

「え? だつて母親つて

「恭子さんは兄貴の生みの親じゃないんだよ」

「!?

祥吾の発言に琉奈たちは絶句し、彰は唇を噛み締める。

「俺の生みの親も恭子さんじゃない。俺たちはみんな、母親が違うんだ。兄貴の母親 咲良さんっていうんだけど、伯母さんは咲良さんをすごく嫌つてたみたいで、咲良さんの子供である兄貴のことも嫌つてるんだ。兄貴に自分のことを伯母って呼ばせることすら許

さないくらいね」

「嫌つてたみたいって……会つたことないのか？」

「咲良さんは兄貴を生んですぐ亡くなつたんだよ。だから、俺と彰は咲良さんに会つたことはないんだ」

「写真は見せてもらつたことがありますけどね。すゞく綺麗な方ですよ」

「そつなんだ。久留井くんのお母さんはどんな人なの？」

琉奈は訊いてしまつてから、己の軽率な発言を酷く後悔した。

祥吾が表情を曇らせ、沈黙してしまつたから。

無意識のうちに彼を傷つけてしまつたと自覚したから。

「しょ、祥吾兄さんの母親は琴子さんといつて、彼女もすこく美人なんですよ！ 僕たちの母親つてみんな美人なんです！」

代わりに答えたのは彰だつた。

兄を気遣い、茶化すような言い草で、敢えて明るく振舞つているのが四人にもすぐ分かつた。

「おーい、準備終わつたよー」

階下からの誠一の声に五人は安堵の表情を浮かべ、足早に祥吾の部屋を後にした。

好嫌（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

琉奈、綾、浩太、祥吾、彰の五人が戻ってきたリビングは、先ほどまでと風景が一変していた。

テーブルなどの家具は奥へと追いやられ、大きく開いたスペースには、漫画などで出てくる魔方陣のような、記号らしきものが細かく描き込まれた円陣の描かれた布が敷かれている。

布から少し離れたリビングの隅には、肩で息をしている誠一が座り込んでいる。

彼の疲れ具合からして、家具の移動は全て誠一がやらされたらしい。

「誠一先輩、大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、綾ちゃん……。これくらいじゃへこたれないよ、男の子だモン」

誠一は天に拳を突き上げるが、その腕は伸びきっておらず、空元気を出していることが丸分かりだ。

「じゃ、始めるから、あなたは陣の中心に立つて」

由香理は琉奈を指差し、相変わらず高圧的な口吻で指図する。他人を見下すような由香理の態度に、琉奈は内心苛立ちつつ、言われるまま円陣の中心に立つ。

「祥吾と彰と……誠一は、陣の外に描いてある星に似た記号の上に立つて」

三兄弟たちもまた、由香理に指示された通りの場所に立つ。

「トコヨノ国に行かない人は絶対に布に触らないで。それじゃ、始めるわよ」

由香理は持参した鞄の中からやたらと長い数珠を取り出すと、それを自分の首や手に絡める。

布のうち、何も描かれていない部分に正座し、目を閉じ、両手を合わせ、精神を統一する由香理。

やがて、由香理の額につつすらと汗が浮かび出し、眉間に深い皺が刻まれる。

ト「ヨノ国へ向かう琉奈たち四人は初め、正面に座る由香理を見つめていたが、いつの間にか眠るように目を閉じてい。

「！ 早いわね……。来るわよ！」

不意に由香理が叫ぶ。

その鋭い声を知覚した瞬間、沼の中に引き込まれるような浮遊感が琉奈の全身を覆い。

蝉の鳴き声。

指先さえも汗ばむほど蒸し暑や。

狭いアパートの一室。

ここはト「ヨノ国だ。

琉奈は辺りを見回す。周囲に人影はない。

「……あたしだけ来ちゃった、とか？」

計画では祥吾たち三兄弟も同行するはずなのに。

まさか、失敗？

嫌な予感が琉奈の胸中を過ぎた時。

「琉奈」

名前を呼ばれた。

聞き覚えのない声のはずなのに、どこか懐かしい声。

声の主は琉奈の背後に立っていた。

振り返った琉奈に微笑みかける、一人の青年。

琉奈は反射的に口走った。

「お父さん」

「俺のこと、覚えていてくれたのか、琉奈」

柔軟な笑みを浮かべる男性を、琉奈は無言で見つめる。

何か言いたいのに、それを言葉に変換することができず、唇を振

るわせることしかできない。

「何度も何度もこっちに呼んじゃつて悪かつたな」

男性はより一層深い笑みをその顔に刻む。

曲線を描く唇はチエシャ猫のそれのように大きく、不気味に映る。

「だつて、お前がなかなか殺してくれないからさあ！」

一切の躊躇いなく、包丁が琉奈の脳天めがけて振り下ろされる。目に痛いほどに輝く刃が描く軌跡を見つめるしかない琉奈の頭に

包丁が食い込む

「ギリセーフ！」

のを受け止めたのは、誠一の光の剣。

刹那、光り輝く矢が男性に向かつて飛んでくる。

男性は後ろに跳躍し、回避する。

「飛鳥川さん、大丈夫？」

駆け寄ってきたのは祥吾だ。

「邪魔すんな！」

床に転がっていた空き瓶が男性の絶叫と共に浮き上がり、四方から琉奈たちに襲い掛かる。

が、その全てが琉奈たちを覆つように形成されたドーム型の光りの壁に阻まれ、力なく落下する。

「遅くなつてすみませんでした、飛鳥川先輩」

歩み寄ってきた彰が言う。

「ガキが、邪魔しやがって」

「あんたが穂積悟だな。今日限りで散つてもうひざ」

誠一は不敵な笑みを浮かべ、剣を構える。

「ちつ、久留井の人間か」

「！？ なんで俺たちのことを」

「死ね！ クソガキ！！」

男性 穂積悟が手にしてた包丁を、僅かに隙を見せた誠一に投げつける。

誠一はそれを剣で叩き落すが、その間に悟は誠一の懐まで接近し、

喉元を切り裂こうと手にした包丁を振り上げる。

体を晒して攻撃を回避した誠一はそのままバク転し、悟と距離をとる。

悟は更に誠一に攻撃を仕掛けるが、彰が光の壁を出現させて阻む。舌打ちする悟に、祥吾の放った矢が幾本も襲い掛かる。

素早く移動して避けようとした悟だったが、一本の矢がその左肩に命中した。

矢を引き抜く悟。その肩は輪郭を失い、消えかかっている。

「……なめるなよ、ガキ共が」

低く呟いた悟の姿が突然、霧が晴れるように消失する。

「お……終わった、の？」

「いや、あれくらいで終わつたりはしないよ。気をつけて、飛鳥川さん」

誠一、祥吾、彰は琉奈を背で守りつつ、一箇所に固まる。緊張の糸が四人の体に絡みつく。

「！？」

不意に、部屋に散乱していた新聞が彰の顔や腕にまとわりついてくる。

引き剥がそうともがき、他の三人からやや離れた彰を誠一が追いかけようとした時。

「危ない！！」

「！」

彰の背後に悟が現れ、彼の背中に包丁を振り下ろした。

崩れ落ちる彰の体。

返り血を浴びた悟は唇を三日月形に歪めて微笑み、琉奈たちを見遣る。

「うあああああ！！」

鼓膜が痺れんばかりの絶叫をあげ、誠一は剣を手に悟に突進する。しかし、何の捻りもない、あまりに直情的な攻撃はあっさりとかわされ、

「兄貴！」

バランスを失った体を強く蹴られ、誠一は床に倒れこんだ。

悟は更に、誠一の胸に包丁を突き立てようと腕を振り下ろすが、祥吾が咄嗟に放つた矢が迫っていることを途中で察知し、その場から飛び退く。

「ぐ、久留井くん……」

「大丈夫。彰は能力を発動させて極力ダメージを少なくしたし、兄貴も氣絶してるだけだから」

祥吾は冷静に説明するが、その額には冷や汗が伝っている。
玲奈と祥吾の正面に立つ悟は、両手に包丁を携え、攻撃を仕掛け
るタイミングを計っている。

互いに視線をぶつけ合う祥吾と悟。

と、僅かに悟がその目を祥吾から逸らした。

祥吾はそれを見逃さず、同時に悔やんだ。

次の瞬間、いつの間にか玲奈たちの背後に浮いていた空き瓶が、
祥吾の後頭部を殴りつけた。

「久留井くん！！！ しつかりして！！！」

成すすべなく倒れた祥吾の背を、玲奈は懸命に揺さぶる。

「やつと二人きりになれたなあ、玲奈」

歩み寄り、玲奈を見下ろす悟が優しく語りかける。
悟を見つめる玲奈。

眼前の穏やかな笑み。

言いようのない恐怖を覚える。
直感する。

連れられない運命を。

己の死を。

リセットのない終わりを。

「そんなことさせない！！」

「 え？」

我に返った玲奈の目に映ったのは、予想外の光景だった。

見知らぬ若い女性が突然現れ、悟を羽交い絞めにしたのだ。

「明美！！ てめえ！！」

明美と 琉奈の母親の本当の名を悟が喚く。

「お母、さん……なの？」

「あなたはまだ死んじゃいけないの、琉奈！」

「お母さん…！」

「そこ」の君、早く！ あたし！」と散らしなさい…！」

明美の絶叫の呼応するように、一閃が琉奈の視界に飛び込んでくる。

思わずきつく目を閉じた琉奈が次に見たのは、明美を背中から、彼女と悟の胸を貫く光の剣。

二人の背後には、意識を取り戻した誠一の姿。

「ちくしょう……ちくしょおおおお…！」

「琉奈……あたしたちの分までしつかり生きるのよ

痛恨の咆哮と慈愛に満ちた言葉がアパート中にこだまする。やがて二人の体は霧散し、琉奈に降り注いだ。

決着（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syose

tu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syose

tu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syose

tu.com/n1078u/

両親の魂が散つてから数日後。

飛鳥川琉奈はいつものように松下綾と昼食をとつていた。相変わらず暢気に青い腹を晒している空の下、ぼんやりとおかずの卵焼きを口の中に放り込む。

そんな琉奈の元へやつてきたのは、一人の男子生徒たち。

「久留井くん。……あ、先輩！」

「誠一先輩！　もう大丈夫なんですか！？」

綾は弁当を放り出し、久留井誠一に駆け寄る。

「ごめんね、心配かけて。もう大丈夫だよ！　まあ、激しい運動はするなつて言われるけどね」

誠一は苦笑しながら右脇腹を軽く叩く。

彼はトコトコノ国での戦いで、肋骨にヒビが入つてしまい、数日の静養を余儀なくされていた。

「彰くんはどう？」

琉奈が久留井祥吾に尋ねる。

彼は「あいつも大丈夫だよ」と微笑んだ。

「さすがに何針か縫つたけど、出血の割に傷は浅かったから。来週には登校できると思うよ」

「そつか。良かつた」

「心配してくれてありがとね」

礼を言う祥吾。彼は特に怪我もなく、琉奈同様、翌日から普通に登校している。

「飛鳥川さんはどう？　あれから何ともない？」

「うん。やっとトコトコノ国から解放されて、すごく清々しい気分だよ。あ、そういえば、一つだけ気になつてることがあるんだけど」

「何？」

「両親の魂が散つた時、あたしに降つてきたのは何でかな？　久留井くんたちの説明だと、トコトコノ国他の魂に吸収されるはずなんでしょう？」

祥吾は小首を傾げ、「うーん」と唸る。

「血縁つていう強い繋がりがある飛鳥川さんが自分たちの分まで生きつていうのが可能性として考えられるけど……」

「けど？」

「俺としては、じ両親の魂が、飛鳥川さんが自分たちの分まで生きる力になりたかったんじゃないかなって。……ちょっとキザっぽいかな」

照れくさそうに頭を搔く祥吾に、琉奈は思わず笑ってしまった。

「あ、あたしのことはアスカでいいよ。飛鳥川って長つたらしいし」「じゃ、俺のこと祥吾で。これからもよろしくね、アスカさん」手を差し出してくれる祥吾。

琉奈は「うわうわよろしく、祥吾くん」とその手を握った。

五時間目。数学。

定年間近の老齢教師が黒板に書き出す数列を見つめながら、琉奈はトコトコノ国のことを考えていた。

得体の知れない空間。

けれど、幼い頃から馴染みのある場所でもあった。

もうトコトコノ国で危険な目に遭うことになくなつたが、同時に自分のアイデンティティーの一つを失つたような寂しさも覚えていた。

最後に、もう一度くらい。

そんなことをふと願つた時だった。

心臓が一度大きく跳ね、体が地面の下に沈んでいくような感覚に襲われる。

急速に失われていく現実感。

「ちゅうと」

隣の席に座る祥吾が琉奈の腕を掴んだ。
茫然と祥吾を見つめる琉奈。

青ざめたかおで琉奈を見る祥吾。

「え？ なんで？」

田を見張り、尋ねる祥吾に琉奈は首を横に振った。
授業終了を告げるチャイムが、新たな始まりを告げるように鳴り響いた。

始まり（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/
転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/
久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

2 - 1

高等部。三年B組。放課後。

「え……えつと……」

クラスの一員となつて日の浅い転校生・久留井誠一は、教室の隅に追いやられ、うろたえていた。

目の前にいるのは、彼を凝視する女子のクラスメイト六名。「な、なんでこんなことになつてるのかな？」

無理やり笑顔を作り、場を取り繕おうとする誠一。

彼に詰め寄る女子生徒の視線が厳しさを増す。

「久留井くん！」

「は、はひ……」

「いい加減に答えて。彼女、いるの？」

「……どう思つ?」

「はぐらかさないで！」

ぴしゃりとはねつけられ、思わず誠一はきつく目を瞑る。

どうこの場を切り抜けようかと思案していたその時、誠一の元に一人の助つ人が現れた。

「兄貴、いる!？」

「！ 祥ちゃん!？」

教室のドアを勢いよく開けて教室に駆け込んできたのは、誠一の弟である久留井祥吾だった。

修羅場への乱入者の姿を見た女子生徒たちの眼が、狩人のそれに切り替わる。

「もしかして、久留井くんの弟!？」

「カッコイイ!」

「ていうかカワイくない!？」

「めっちゃイケメンじゃん！」

女性特有の黄色い声を一斉に向けられ、祥吾は青い顔で慄く。

「祥ちゃん！ 逃げろ！」

誠一の叫び声をきっかけに祥吾は駆け出し、女子たちもまた彼を追つて走り出す。

祥吾という新たな獲物を見つけたハンターたちからようやく解放された誠一は、机の上に置いておいた携帯電話のランプが点滅していることに気付き、本体を手にする。

開いたディスプレイには、『メール受信1件 祥ちゃん』と表示されている。

「メールの返信がないからわざわざ来ててくれたんだ。にしても、何だろ？」

独りじまいのメールを読んだ誠一は、その内容に目を見張った。

女子の集団から無事に逃げ切った祥吾の姿は、夕暮れ色に染まる屋上にあつた。

激しく乱れた呼吸を整えている祥吾の元に、誠一がやつて来る。

「な、んで……ここにいる、って……？」

「弟のことなら何でもお見通しよ」

満面の笑みでブイサインを作る誠一に、祥吾は苦笑を返す。

「ところでさ、さっきのメール。あれ、ホントなの？」

「うん。今日、俺のすぐ隣でトコトコノ国に行きそうになつた」

「琉奈ちゃんがトコトコノ国に行く原因になつてた父親の魂は完全に散らしたじゃん。それなのに、なんでまた？」

困惑気味の誠一に、祥吾は「分かんない」と首を横に振る。

飛鳥川琉奈。彼女は祥吾のクラスメイトであり、長年、死者の魂の集積場であるトコトコノ国に度々引き込まれるという現象に悩まされていた人物だ。

その元凶は、幼い彼女に殺された父親の魂であり、誠一、祥吾、そして末子である彰の三人は自分たちの特殊能力をもつて父親の魂を散らし、全てを解決したはずだつた。

琉奈が再びトヨノ国へ引き込まれてしまつたのは、祥吾たちにとって予想外の出来事だつた。

「アスカさんの両親の魂が散つた時、散り散りになつた魂が彼女に降り注いだんじょ？ てことは、その魂の欠片が悪さしてるんじゃない？」

誠一は祥吾の推理を「それはないつしょ」と否定する。

「完全に散らされた魂はもれなく生前の人格を失う。んなことありえないだろ」

「でも、そうじゃないと説明つかないし」

「確かになあ……。琉奈ちゃんは？」

「兄貴を連れてくるから待つてつて言つて、今図書館で待つてもらつてるけど」

「そつか。そしたら琉奈ちゃんをつちに連れて行こう。恭子さんなら何か知つてるかもしね」

誠一の提案に、祥吾は深く頷いた。

「すみません。何度もお世話になつちゃつて……」

「いいつていいくつて！ 困つた時はお互い様つて言うでしょ。それに、久留井さんはアフターサービス万全でお馴染みだから」

申し訳なさそうな飛鳥川琉奈に誠一が明るく笑いかける。

「大丈夫だよ、アスカさん。きっと恭子さんが何か知つてるから」

続けてフォローする祥吾の言葉に琉奈は安堵する。

乗つてきた自転車を、到着した久留井家の駐輪スペースに停め、

三人は誠一を先頭に家の中に入る。

「おかえりなさい、誠一兄さん、祥吾兄さん」

三人を出迎えたのは、現在自宅療養中の三男・久留井彰だ。その顔には、今にも蕩けんばかりの笑みが浮かんでいる。

気味が悪いほどの笑顔に三人はたじろぎ、微動だにすらできなくなる。

「あら、いらっしゃい、飛鳥川さん」

遅れてやつてきた、三兄弟の母である久留井恭子が客人である琉奈の姿に気付き、声をかける。

更にもう一人、別の女性がやつて来た。

二十代半ばと思しきその女性は、艶やかな黒髪を短く切りそろえ、すっと通った鼻筋とぱっちりとした二重が印象的な女性だった。

「おかえり～、誠一！ 祥吾！ 可愛いお客さんも、いらっしゃい快活な笑顔と共に三人を迎える女性。

彼女の姿に誠一と祥吾は目を丸くし、「朱里さん！」と彼女の名を叫んだ。

「飛鳥川さんは初対面よね。彼女は久留井朱里さん。^{くるい しゆり}この子たちの父親の妹さんよ」

恭子が人数分のハーブティーと水饅頭をテーブルに並べながら、琉奈に説明する。

「どうも。久留井朱里です」

「初めてまして。飛鳥川琉奈です」

「琉奈ちゃんか。名前も可愛いのね」

ストレートに褒められ、琉奈は「ありがとうございます」とはにかむ。

同時に琉奈は戸惑いも覚えていた。

三兄弟の親類にはもう一人会つたことがあった。

久留井由香理。彼らの父親の姉だ。

自分の問題解決の手助けをしてくれた人物だが、きつい性格で愛想がなく、笑顔もほとんどなかつた。

今日の前にいる朱里とは間逆の人間だつた。

「伯母さんと全然違うでしょ？」

琉奈の戸惑いを察知したらしい誠一が言つ。

「はい。ちょっとびっくりしました」

「あのオバサンはプライドの塊みたいな人だからね」「オバサンって……自分のお姉さんでしょ？」

思わずツッコミを入れた祥吾に、「いいのいいの」と朱里は手を縦に振る。

「自分は特別な一族の人間なの、他人とは違うのよつていう自己陶酔の世界にずっと生きてる人だから。相手にするだけ損なの、あんな人。気にするだけ時間のムダなんだからね、誠一」

朱里の真摯な瞳に、誠一は「分かつてますよ」と微笑む。

「にしても、朱里さんはどうして今日うちに？」

「姉さんがここに来たつて聞いたから、それならあたしも来なくちやつて思つて。みんなの顔も久々に見たかつたし。なに、あたしは

来ちゃダメなの？ 祥吾はあたしのことキレイ？」

「んなわけないじゃないですか！ 僕は朱里さんのこと好きですよ」

「ありがと。あたしもスキよ、祥吾。チューしてあげよっか？」

「いえ、間に合つてます」

「なによ、小さい頃はこつちがつんざりするくらいチューをねだつてきてたのに」

「もうホンシト勘弁してください」

完敗です、と言わんばかりに頭を下げる祥吾に、琉奈は他の久留井家の面々と共に笑つてしまつた。

由香理と誠一の母親との確執の話や、三兄弟の母親が異なることなど、問題が山積してばかりの一族だと思っていたが、こういった和やかなシーンを目にすることが出来て、琉奈は何故かほつとした。あまりにもほのぼのとしていたので、

「ところで、飛鳥川さんはどうして來たのかしら？」

「…………あ」

誠一も祥吾も琉奈も、本来の目的をすっかり忘れていた。

来訪者（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syose

tu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syose

tu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syose

tu.com/n1078u/

琉奈が再びトコロノ国に引き込まれたと告げた時、彰と恭子は「それ、本當ですか?」

「嘘でしょ?」

と、俄かには信じられない、といった反応を示したが、事情を朱里は首を傾げてしまった。

誠一と祥吾は朱里に、琉奈の身に起つていていたことを説明し、改めて再び琉奈が引き込まれたことを告げると、「何で?」

と、ようやく彰や恭子と同じ反応をした。

「飛鳥川さん、授業中に引き込まれちゃった時、何かいつもと違うことしたりしなかった?」

「いつもと違うこと、ですか?」

恭子は「そうそう」と頷く。

「あなたがしたことが、あなたの両親以外の魂を刺激したって可能性もなくはないし」

琉奈は首を傾げる。

トコロノ国に引き込まれそうになつたのは数学の授業中で、ぼんやりと考え事はしていたものの、普通つに授業を受けていただけだつた。

ただ、ぼんやりと、

「……トコロノ国のことを考えました

ぱつりとそつ漏らした琉奈に、周囲の視線が集中した。

「トコロノ国について、どんなこと考えてたの?」

隣に座る祥吾がやや身を乗り出し、琉奈に尋ねる。

「えつと……その、ちょっとだけなんだけど……もつかいくらいに行

つてみたいなあ、なんて

久留井家の面々に協力してもらひ、トコヨノ国へ引き込まれないで済むよつにしてもらつた手前、少々言いにくそうにしつつ答える琉奈。

「きつとそれがきつかけね」

朱里が琉奈を指差し、断言する。

「何度もトコヨノ国に行つてた琉奈ちゃんには、トコヨノ国に対する、ある種の親和力がついてしまつたのよ。そのせいで、自らトコヨノ国に行きたいと願つてしまつと、向こうに引き込まれるようになつちやつたんだわ。今まで考えなかつたから氣付かなかつただけで」

朱里に指摘された通り、両親の件が解決するまで、自らトコヨノ国へ行こうなどと考へたこともなかつた。

久留井三兄弟に出会つまで、トコヨノ国に引き込まれることは迷惑でしかなかつたし、自分から行こうと思わなくても勝手に引き込まれてしまつ以上、そんなことを考へる必要すらなかつた。

父との決着をつける際も、向こうから手を出してくるのを待とうと言っていたので、自ら向こうへ行くといつ考へは浮かばなかつた。

トコヨノ国へ行くことができる能力がついていたなど、全く知らなかつた。

「自分の意志でトコヨノ国に行けるつて……それ、巫女の能力じゃないの。巫女の能力は久留井の女性にしか発現しないんじゃないの？」

恭子に問われた朱里は「分からない」と首を横に振り、肩を竦める。

「ただ、うちにある資料に何か参考になるものがあるかも。巫女の能力から解放する方法も分かるかもしれないし」

「資料、ですか？」

「そ。久留井家はずつと昔からトコヨノ国や、そこに存在する魂た

ちと関わってきたの。だから、トロリノ国関係の資料もたくさんあるのよ。ねえ、琉奈ちゃん、今度の日曜にうちに来ない？」

え？ と戸惑う琉奈に朱里が微笑みかける。

「ここから電車で少し行ったところに本家があるからいらっしゃい。誠一と彰も、たまには本家連中に顔出したら？」

急に話をふられ、困惑の表情を浮かべる誠一と彰だったが、

「しゃーない、たまには行くか」

「朱里さんの命令とあれば、仕方ありませんね」と承する。

「じゃあ、日曜の午前十時までに来る」と。一人とも、しつかり琉

奈ちゃんをエスコートしていくのよ」

「へいへーい

「はー！ 任せください！」

誠一が面倒くさそうな返事をし、彰がやたらと張り切る中、祥

吾はずつと無言でハーブティーを口にしていた。

と笑いかけた。

祥吾もつられて「ありがと」^リと微笑む。

「気持ちといえばさ、彰くんって朱里さんのこと好きだつたりしない？」

「あ、やつぱり分かつた？」

琉奈と祥吾は向かい合つて互いを指差し、闇夜に瞬く色とりどりの星たちに届かんばかりの大声で笑う。

「すげえ分かりやすいでしょ、あいつ！」

「あそこまで露骨な人、初めて見た！　あたしの話の時以外、周りのことなんて目に入りませんつてくらい朱里さんのこと見てたし！」「会話中、終始朱里を見つめていた彰の姿を思い出し、二人は腹を抱えて笑い合^リう。

「彰は昔から朱里さんが好きなんだよ。末っ子で甘えたがりなところがあるから、大人な朱里さんを好きになっちゃうのは自然なことなんだろうな。それが本当の恋なのかどうかまでは分かんないけど」「ふうん。ていうか、祥吾くんってさ、時々同じ年とは思えないくらい周りのことが見えてる時あるよね」

「え？　そうかな？　俺の周りが子供っぽい人ばっかりだからそういう見えちゃうだけじゃないかな？」

祥吾が照れくさそうに後頭部を搔く。

「特にうちは兄貴がね。頼もしい時もあるにはあるけど、基本的に子供っぽいから。……あの人、たまに勉強教えてって、俺の部屋に乱入してくることがあるんだよ」

宝物の在り処を話す盗賊のような怪しい顔で祥吾が言^リう。

「ホントに！？」

「マジマジ。数学とかね。弟に聞くなつて感じでしょ？　文系はわりと得意みたいだけど。あと、美術もね。まあ、毎日グラビアとか見てるからだろ？」

祥吾の更なる暴露に琉奈はまた笑ってしまった。

数日後。

遠出する家族連れやデートへ向かうカップル、休日出勤のサラリーマンなどで混雑する駅に、飛鳥川琉奈、久留井誠一、久留井彰の三人の姿があつた。

「本家までは乗り換えの時間も含めて、だいたい一時間くらいかな」携帯電話で乗り換える電車や時刻を確認しながら、誠一が説明を始める。

「で、駅からバスで三十分くらい。ただ、向こうはバスの本数が少ないからなあ。ちょうどいいのがあればいいんだけど」

「もし時間が合うバスがなかつたら、車で迎えに行くって朱里さんが言つてましたよ！」

田を輝かせる彰。一方、誠一は「あの人運転下手だよな……」と呟き、バスがあることを心の中で切に願つた。

やがて、電車の到着を告げるアナウンスが駅構内に流れ、銀色の車両がホームに滑り込んできた。

三人は口を大きく開けた電車内へと歩を進め、久留井家本家を目指す。

三人三色（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syose
tu.com/n8885v/
転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syose
tu.com/n1198u/
久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syose
tu.com/n1078u/

「琉奈ちゃんの家はあれからどう? 変わりない?」
運良く空いていた席に誠一、琉奈、彰の順で座るなり、誠一が琉奈に尋ねる。

「うちですか? はい、特に以前と変わりないですよ」

トコヨノ国件を解決する際、琉奈の本当の両親は既に故人で、今の両親は伯母夫婦であることが判明した。

しかし、その後も伯母夫婦は今まで通り、琉奈を本当の娘として育てているし、琉奈も伯母夫婦を本当の両親だと、これまでと変わらず思っている。

「そつか、良かつた。仕方のないことだつたとはいえ、大変な秘密を暴いちゃつたわけだから、琉奈ちゃんの家の環境が悪化したりしてたらどうしようかと……」

「悪化なんて全然。あ、変わったといえば……ちょっととしたことなんですけど、兄と話すようになりました」

「え? お兄さんと?」

「はい。今回の件であたしとの関係を見つめ直してくれたみたいで。両親はあたしを引き取った時、すごく気にかけて、可愛がつてくれたと思うんです。起きた事件が事件でしたし。幼い兄は急にやって来た、血の繋がりもあんまりない女の子に突然、大好きな両親を奪われたって思いますよね。その気持ちが悪い方向に捩れていって、今までの冷たい対応に繋がつたのかなって。

最近は、ホントにちょっとなんですが、おはようつて声かけてくれたりとか。これでもかなりの進歩なんですよ」

「そうなんですか。うちは半分しか血の繋がりありませんけど、誠一兄さんはうざつたいくらい話しかけてきますけどね」

しみじみと話す彰に、「うざいとかゆーなよ」と誠一がむくれる。その誠一の仕草に、琉奈は思わず吹き出してしまつ。

「ちょっと、なんで笑うの、琉奈ちゃん！？」

「すみません。この前、祥吾くんの言つてたこと思い出しちゃって……」

「？ 祥ちゃん、何て言つてたの？」

「先輩は基本的に子供っぽいって……」

「あいつー！！」

拳を固め、歯軋りをする誠一。彰は琉奈の陰で小さく笑つている。「ていうか琉奈ちゃん、祥ちゃんのこと名前で呼んでるんだ？」

「はい。前に、あたしのこと飛鳥川って長つたらしく呼ぶのもなんだから、アスカでいいよつて話したら、じゃあ自分のことも祥吾でいいよつて」

琉奈の説明に、誠一は感慨深げに「なるほどねえ」と相槌を打つ。

「ダメですかね？」

「へ？ いやいや、そういうんじゃなくて。祥ちゃんが他人に自分のことを名前で呼ばせるのって珍しいから。しかも女の子に」「そうなんですか？」

「そうそう」

誠一は答えながら、満面の笑みを浮かべる。

何故誠一がこんなにも嬉しそうなのか、理由が分からぬ琉奈は頭上に巨大なハテナマークを浮かべる。

「先輩」

琉奈と誠一の会話を黙つて聞いていた彰が口を挟んでくる。

「何？」

「あの、僕もアスカ先輩つて呼んでいいですか？」

「もちろん。飛鳥川先輩つて長いもんね。いっそ、アスカさんとかでもいいけど」

彰は琉奈の提案を「いやつ、先輩は先輩でっ！」と慌てて全力拒否する。

それを見た誠一は、「彰つて変なとこだわるよなあ」と呟いた。

出発からおよそ一時間。

途中、誠一や彰への逆ナンパをかわしつつ、一度の乗り換えを経て、三人は久留井家本家の最寄り駅に到着した。

「今更だけどさ」

駅の改札を出るなり、誠一が口を開いた。

「何ですか、誠一兄さん？」

「俺たち、こんなカツコで大丈夫かな？」

「…………」

沈黙が三人を包み込む。

琉奈は他人の家に行くということで、大きなフリルの付いた淡い黄色のキャミソールに、かぎ編みの白いカーディガン、紫色のロングスカートにピンクのパンプス、という余所行きの出で立ちだ。

一方、誠一と彰はそれぞれ色や柄の全く違うロングTシャツにジーパン、そしてスニーカーと至つてラフな格好だ。

「どうせ何回も言ったことがあるしって思つたけど、ラフ過ぎじゃない？」

「いいんじやないですか、別に。どこぞに嫁いだ娘が実家に帰るようなものなんですか？」

全く男らしくないとえで誠一を説得する彰。

誠一も何故か「そうだよな」と納得してしまった。

「さてと。バスは……つと。お、十五分後に出るバスがあるな」バスの時刻表を指でなぞりながら誠一が言つ。

それを聞き、彰が小さく舌打ちする。

「おやおや、彰くん。せつかくちょうどいいバスがあつたのに、どうして舌打ちしちゃうかなあ？」

誠一は彰の肩に手を回し、連れられないようにきつく引き寄せた。

「ちゅう……やめて下さこよ！」

「少しきらり、我慢しろよ。急がなくとも、わいじき朱里さんに会えるんだから」

「な、な、なんの話ですか！？」

顔を真っ赤にして慌てふためく彰。

朱がさした彰の頬を指でつつき、「赤くなってるー！　かわいいー！」と、わざと高い声を作り、ギャルのよつた口調で弟をからかう誠一。

琉奈はそんな二人の姿をちゅうと離れたところから見守る。

「あんたたち、駅前で何してんの？」

ぎやあぎやあと喚く誠一と彰、そして琉奈の前に、一台の乗用車が通りかかり、下がるパワーウィンドウの向こうから呆れ気味の声が投げかけられる。

「朱里さん！　来てくれたんですね！」

誠一の腕から逃れ、飼い主を見つけた犬のように嬉しそうに駆け寄つてくる彰に、乗用車の運転手　久留井朱里はサングラスを外し、ウインクする。

「……あの、バスあつたんだけど」

誠一が言う。その顔はすっかり青ざめている。

「バスじゃお金かかるでしょ。あ、琉奈ちゃん、いらっしゃー！」

「ここにちは。今日はよろしくお願ひします」

「よろしく。じゃ、みんな乗つて乗つて！」

「……いや、俺はバスでオッケーなんで。大丈夫なんで、ホント」「乗りな、誠一」

どすの効いた声で朱里が命令する。

すつかり萎縮し、小さくなつた誠一は「……はい」と答えるしかなかつた。

心模様（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/
転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/
久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

何故誠一が朱里の運転する車への乗車を頑なに拒んだのか。

琉奈はその理由を、走り出してから三十秒も経たずに理解した。

とにかく運転が荒いのだ。

常に急停車、急発進。ハンドル捌きは荒々しく、同乗者は前後左右に揺らされ続けた。

車が久留井家本家に到着する頃、朱里以外の三人はすっかり疲れ果てていた。

「みんな、着いたわよ！ つて、どうしたの？」

顔に死相が出ている琉奈たちを見て、目を丸くしている朱里。

本人は自分が酷い運転をしているという自覚がないらしい。

「さ、さすが朱里さん。非常にワイルドな運転でした……」

田を回し、頭を揺らしながら彰が親指を立てる。

朱里は「それって褒めてんの？」と眉根を寄せた。

「しゅ、朱里さん、早く中に入ろうよ。調べるんでしょう、巫女のこ
と……」

「なんか誠一もダメダメ状態だけど……。まあ、いいか。行きまし
よ」

唯一元気な朱里と、彼女曰くのダメダメ状態三人組は、久留井家本家へ向かうべく乗用車のドアを開けた。

「でつ……か……！」

大きな門をくぐり、久留井家本家を目の当たりにした琉奈は思わずそう零した。

広大な敷地に悠然と腰を下ろしている大きな屋敷は、テレビドラマなどで見る、代々続く名家の屋敷そのものといった風情だ。

「ただ大きいだけの古い家よ」

建物の巨大さに慄く琉奈に、朱里が溜息混じりに言ひ。

「や、入つて入つて。誠一と彰は琉奈ちゃんと客間に行つてくれる? あたしはお茶の用意をせてくるかい」

「はいよ。じゃ、行こつか、琉奈ちゃん」

「は、はい」

屋敷内も非常に広く、玄関から客間までは歩いて数分かかった。滅多に田にする」とのない、古き良き日本家屋の趣を残した屋敷に、琉奈は視線をあちこちに泳がせてばかりだ。

「そんなに珍しい?」

客間に到着してもなお、エレベーター中を見回している琉奈に誠一は苦笑した。

「あ、すみません。うち、親戚とかみんな都会に住んでて田舎がないから、こういう家に来たことなくて……」

「そりなんだ。でも、居住性はあんまり良くないよ。な、彰?」

「ですね。広さがある分、エアコンの効きが良くないので、夏は暑いし冬は寒いし。僕は今の方方が好きですね」

「あたしもそっちの家に住もつかなあ」

茶碗を載せたお盆を持って現れるなり朱里が呟く。

彰は「それいいですね!」と同調しつつ朱里からお盆を取り、各人に配る。

「ダメですよ。あの家は四人が限界です」

「じゃあ誠一、あたしと交代ね」

「無理」

もつぱりと拒否する誠一に、朱里は「冷たい奴め」とむくれる。

「せじと。お茶飲んだら、誠一と彰は兄さん挨拶してきなさい」

「「」」

「本家に来た以上、それくらいは当然。琉奈ちゃんはちょっと待つててね。すぐに済ませてくるから」

「あの、朱里さんのお兄さんって、先輩たちのお父さんですよね？今こいつしてお邪魔してるわけですし、あたしもご挨拶した方が…」

琉奈の申し出を、朱里は首を横に振つて拒絶する。

「兄さんに会える人は限られてる。気持ちは嬉しいんだけど」「ですか……。分かりました」

面会できる人が限られる人物。

そんな人間は今や、架空の世界にしか存在しないと琉奈は思つていた。

少なくとも自分の身近には存在しない。

琉奈は急に、自分が別の世界に来てしまったような気分になつた。

居間から自室へ戻るべく廊下を歩いていた久留井由香理は、急に顔を顰めた。

見たくないものを見てしまつた。

自分にとつて、不淨と、穢れと言つべき存在。

それを己の視界に入れてしまつたことが酷く口惜しかつた。

「何故この子たちがここにいるの、朱里？」

甥である誠一と彰の前を歩く朱里に由香理が問う。

「ここに来ちゃいけない理由はないでしょ、姉さん」

由香理の威圧的な語氣に一切気圧されることなく朱里が言い返す。

「そうね。彰にはないわね」

「誠一にもない。咲良さんにもなかつた」

「黙りなさい、朱里」

咲良、といつ名前が出た途端、由香理が鬼女の如き形相で言い放つ。

さすがの朱里も、これには口を閉ざした。

「飛鳥川琉奈さんが巫女の能力を有してしまつた可能性があるんで

す。僕たちはそれについて調べるためにここにきました

沈黙する朱里に代わり、彰が答える。

「飛鳥川琉奈？……ああ、この前の件の子ね。けど、あの子は久留井の人間じゃないじゃない？」

「ええ。ですから、そのことも含めて詳しく調べる必要があるので本家に」

「そうなの。大変そうだけど、頑張って」

心のこもつていな、抑揚のないホールを送った由香理は三人とすれ違い、去つていった。

「……朱里さん。俺、ちょっと出かけてきていいかな？ 行きたいところがあるから」

しばらくして、誠一が切り出す。

「分かった。兄さんのところへは、あたしと彰で行つてくるから。『めんね、勝手に咲良さんの名前出したりなんかして』

「ううん、気にしてないから。じゃ、行つてきます」

誠一は来た道を引き返し、玄関へと急ぐ。

「……さ、行きましょ、彰

「はい、朱里さん」

朱里と彰が琉奈の元へ戻つてきたのは、彼らが客間を出てから二十分後のことだった。

「琉奈ちゃん、お待たせ」

さぞ待ちくたびれているだろ、と朱里たちは思つていたのだが、琉奈は全く退屈していなかつた。

先ほどまではいなかつた、一人の幼い男の子といたからだ。

「……啓太」

今は琉奈の腕の中でにこにこと笑つてゐる、二歳前後の小さな男の子を見た朱里が呟く。

「お帰りなさい。あれ？ 先輩は？」

「誠一なら別件があつて。それより琉奈ちゃん、その子は……」

「（）で一人で待つてたら突然入ってきて。呼んでも誰も来ないので、しばらく一緒に遊んじゃったんですけど。……あの、まずかつたですか？」

「ううん、それは構わないけど」

「！ シュリ！」

朱里の姿に気付いた男の子は琉奈の腕から飛び出すなり朱里に駆け寄り、抱きついた。

「可愛い子ですね。利発そうだし。朱里さんのお子さんですか？」

「あたしの子じゃないよ。琴子さんの子」

「琴子さん？ つて、ええっと……？」

「祥吾兄さんのお母さんです」

彰の返答に琉奈は手を打つた。

「祥吾くんの弟なんだ！ 道理で似てると思った！」

「……祥吾に似てる？」

「はい、そっくりです」

「そつか。啓太、あんたは祥吾にそっくりだつて」

朱里が抱き上げた啓太に言つ。啓太は祥吾が誰だか分かつていな

いらしく、きょとんとしている。

「（）にいちゃんだよ、啓太。何回も念つてる（）に

「ぼく、（）にいちゃん、きらい」

啓太は眉をきゅつと寄せ、ぽつりと呟く。

「（）にいちゃん、（）わい。だからきらい」

「……彰、啓太を琴子さんのところに連れてつてくれる？ 今頃搜してるだろ（）から」

彰は朱里に言われるまま啓太を受け取り、その場を後にした。

血縁（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

琉奈は朱里に連れられ、屋敷の隣に建つてゐる蔵へとやつて来た。朱里は慣れた手つきで門を外し、歴史を感じさせる重厚な木の扉を開く。更に、その向こうにある鋼鉄の扉を、複雑な形をした鍵で開ける。

「ここにトコヨノ国に関する資料が収めてあるの」

朱里が説明しながらスイッチを入れると、天井に吊るされている電球に明かりが灯り、闇の中に眠つていた資料が姿を現す。琉奈はぽかんと口を開け、周囲を見回す。

広々とした蔵の中に所狭しと棚が並び、その中には本や巻物などが隙間なく積まれている。

「すごく古そうな資料ばつかですね……」

「最近の資料は家にあるんだけど、あたしが知つてゐる限り、久留井の人間以外に巫女の能力持つてる人つていないから。昔の方から調べた方が早いと思って」

じゃ、適当に資料漁つてみて、といつ朱里のアバウトな指示を受け、琉奈は彼女と共に蔵の資料を調べ始める。

途中で彰も合流し、三人で次々に資料を見ていく。

古すぎて琉奈や彰では解読できないものを朱里が担当し、それ以外のものを学生コンビが担当する。

資料にはトコヨノ国に関する様々な記述があつた。

転生の時を待つ、魂の集積場。トコヨノ国。

常夜であり、常世である場所。

魂はそこで生前の記憶を灌ぎ、転生に備える。

しかし、生前の記憶を宿し続ける魂も時に存在する。

正にしろ負にしろ、強い想いを残して死んだ魂ほど記憶が残りやすい。

その記憶が、トコヨノ国に新たな場所を創造する。

魂たちが一番、強烈に記憶している場所がトコヨノ国に造られては消え、造られては消えていく。

トコヨノ国は魂の力が強く作用する世界。

魂の力が全て。

人間の力では干渉できない世界。

……でも、久留井くんたちは違うんだ。

琉奈は資料を読みながら、内心独りごちる。

誠一、祥吾、彰はトコヨノ国で、己の魂の力を武器の形に具現化し、現世の人間に危害を及ぼす魂と戦う。

他の人間とは異なる力を持つている。

昔から、と言っていた。

幼い頃からずっと、あんなふうに彼らは戦ってきたのか。
苦しくなかつたのだろうか。

己の力を憎み、疎み、周囲にその怒りをぶつけたりしなかつたの
だろうか。

琉奈は資料のページを繰っている彰を見て、ふとそんなことを考
えた。

数時間後。

陽が傾き、木組みの小さな窓枠に切り取られた橙色の空から西日
が差し込む蔵の中に、膝を折って座り込む琉奈、彰、朱里の姿があ
つた。

三人は肩を落とし、ほぼ同時に深い溜息をついた。

「こんだけ資料があるので、久留井以外の巫女に関する情報が全然ないなんて……」

力ない朱里の咳きに、琉奈と彰も無言で頷く。

「……こうなつたら」

「「なつたら？」」

「琴子さんに見てもらおう！」

朱里は勢いよく立ち上がり、言い放つ。

「ええ！？ 琴子さんですか！？」

「何よ、文句あるの、彰？」

「文句つて訳ではありませんが……琴子さん、大丈夫ですかね？」

見知らぬ人と会うなんて……」

朱里は腰に手を当てて、「なんことでも言つてられないでしょ」と彰の苦言を切り捨てる。

「とりあえず、琉奈ちゃんが本当に巫女になっちゃったのかだけでも確かめなくちゃ。じゃないと、わざわざここまで来てもらつたイミがないし」

「……それもそうですね」

「琉奈ちゃん、これから琴子さんつていつ、祥吾のお母さんに会いに行くんだけど……彼女の前では祥吾の名前を出さないでもえるかな？」

「え？」

琉奈は思わず眉を顰めた。

祥吾と、彼の母親である琴子の間には何か問題がある。

先日、祥吾に彼の母親について尋ねた時の彼の反応から、琉奈もそれには気付いていた。

しかし、母親の前で息子の名前を出すことを禁じられるほどまさすがに思わなかつた。

一体祥吾と琴子の間にどれほどの事情があるのでどうか、と琉奈は疑問に思わずにはいられなかつた。

「理由はそのうち話すから。ね？」

胸の内を見透かしたような朱里の言葉に、琉奈は頷くしかない。今はとにかく、自分の身に起きたことの真相に辿り着くのが先決だ。

蔵から屋敷へ戻った三人は、朱里の先導で廊下の奥へと進む。歩くこと数分。

到着したのは、一枚の襖の前。

「朱里様。何の御用ですか？」

襖の側に立つ、黒い着物の中年女性が問う。

「琴子さんにこの女の子を会わせたいんだけど」

「何故です？」

「巫女の能力を得てしまったかも知れないの。だから、琴子さんに見てもらって、本当に巫女になってしまったのか確かめて」「菊野」

襖の向こうから突然、女性の声がした。

玉を転がすように美しく、そして愛らしさも感じさせる声。

黒い着物は「はい」と答え、膝をつく。

「その方たちを中へ」

「しかし、琴子様……」

「朱里さん、入ってちょうだい」

美しい声が朱里を中へと誘う。

朱里は言われるまま襖を開け、室内へと足を踏み入れる。琉奈と彰もそれに続く。

室内は至つて普通の、広い和室だ。しかし、静謐な空気が保たれており、おいそれと歩み入れないような、莊重な雰囲気に包まれている。

三人を待ち受けているのは、部屋の奥に座っている、白いワンピースの小柄な女性。

「ここにちは、朱里さん。……あら、久しづりね、彰くん」

女性はしなやかな動きで立ち上がり、三人に歩み寄り。

どんな御伽噺の王子でも一瞬でひれ伏すだろう、天女のよつた美
しい女性に、琉奈は言葉を失った。

物思い（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syose
tu.com/n8885v/
転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syose
tu.com/n1198u/
久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syose
tu.com/n1078u/

「あなたが巫女になつた女の子？」

「は、はい。飛鳥川琉奈と言つます」

「私は琴子。久留井琴子よ」

ワンピースの女性 久留井琴子に微笑みかけられ、琉奈は顔を紅潮させつつしゃちほこばる。

「ごめんなさいね、朱里さん。菊野がお邪魔して。今日は調子がいいって言つておいたのだけど」

「いえ、構いませんよ。……それで、どうですかね？　彼女、巫女ですか？」

朱里に問われた琴子は琉奈に近づき、彼女の頬に細い指を添える。間近の麗人に、琉奈はますます固まってしまう。

琴子は美しい上に若々しく、とても自分と同じ年の息子がいるようには思えなかつた。

「……そうね、この子はおそらく巫女だわ」

琴子が静かに告げる。

朱里はそれを聞き、「やつぱり」と頭を振る。

「実際の能力を見せてもらえるとありがたいのだけど。今、彰くんと一緒にちょっと行つてきともらえるかしら？」

近所におつかいに行つてきて、とでも言つよつて話す琴子に、琉奈と彰は思わず「は？」と聞き返す。

「行つてきてつて……どうやつて帰つてくれればいいんですか！？」

「簡単よ。戻つてくるように念じればいいのよ、行くのと同じ要領で。ただ、向かつた先にあなた以上の力を持った魂がいた場合、その空間の支配者は魂の方になるから、その時は彰くんに散らしてもらつて」

何か問題でも、と言わんばかりの琴子に琉奈は絶句する。

「朱里さん、誠一兄さんが戻つてくるのを待つた方が良くないですか？」

「それが、さつき調べものを手伝わせようと思つて電話かけたんだけど、繋がらないのよ、あいつ。多分まだ病院にいるんだと思つんだけど」

朱里は自分の携帯電話片手に溜息をついた。つられて彰も溜息を漏らす。

「……仕方ありませんね。アスカ先輩、行きましょう。僕が必ず、全てなんとかどうにかこうにかしますから」

彰から、頼りになるよつながらないような後押しを受け、仕方なく頷く琉奈。

目を閉じ、精神を集中させる。

彰はその肩に手を掛ける。

行こう。

あの場所へ。

魂の世界へ。

トコヨノ国へ。

不意に、懐かしい感覚が琉奈の全身を覆つ。沼の底へ、地の底へ引きずりこまれる感覚。

トコヨノ国へ向かっている。

そのことを肌で感じた。

「アスカ先輩」

己の名を呼ぶ声を知覚し、琉奈は我に返る。

莊重な和室から一転、琉奈たちの周囲は草木が生い茂り、木漏れ日が燦々と降り注ぐ森林に変わっていた。

「ここは……」

「トコヨノ国ですよ。近くに魂がいて、その魂の生前の記憶がこの

森を造つていらるんですね」

彰は淀みなく説明しながら周囲を見回し、この森林を形成している魂を探す。

と、突然一つの白い光りの塊が、木々の間から琉奈たちの前に飛び出してきた。

光は輪郭を崩したかと思うと、一人の老年女性の姿に再構築される。

『あなた方はどなた?』

「お邪魔してすみません。僕たち、たまたまここに迷い込んでしまつて」

老婆は『ここはそういう迷い込むような場所じゃないのだけど』と彰を訝るが、すぐににこりと柔軟な笑みを浮かべる。

『まあいいわ。せつかく来てくれたんだもの』

「あ、あの……ここは?」

『ここはね、私がプロポーズしてもらった場所なのよ。縁がたくさんあつて素敵でしょう?』

少し照れくさそうに話す老婆に、琉奈は自然と微笑んでしまう。

しかし、その笑みは老婆の次の言葉であつたりと拭われる。

『私が一番つて言つていたのに、知らない間に一番に落として。だからこの手で殺してあげたのよ』

「! 先輩!」

彰が素早く琉奈の前に立ち、光の壁を出現させる。

刹那、鋭く尖った木の枝が琉奈の体を串刺しにせんと襲い掛かってくるが、全て彰の壁に弾かれる。

魂の力。トコヨノ国で大きな影響を及ぼす力。

琉奈の脳裏を、資料で目にした様々な言葉が次々と駆けていく。多種多様な空間を造り出す、トコヨノ国の魂。

自らの魂の力で戦う彰たち。

ならば、今トコヨノ国にいる自分は。

自分の魂の力とは 。

『私、聞いたことがあるのよ。生きてる人間の魂を取り込むと、私たちもっと強くなれるって』

「誰がそんなことを？」

鋭い声で問う彰を老婆は笑つて指差し、言い放つ。

『女さ。お前にやつべつのね』

「何……！？」

驚きのあまり、思考を停止させてしまつた彰。

その隙を突き、老婆は予め彼らのは語に浮かばせておいた巨木で、二人いつぺんに押しつぶしてしまおうとした。

が、それは叶わなかつた。

周りの景色が突然薄れ始めたのだ。

更に、薄れ行く森林に代わり、学校の教室のような風景が滲み出てくる。

「これは……うちの学校……！？」

『何なんだい、これは！？ あたしの森が……！ ちくしょうつー。老婆が心底悔しそうに吼えたかと思つと、次の瞬間、

「……あれ？』

琉奈と彰は元の和室に戻つていた。

どうやら老婆の魂により、強制的に現世に戻されたらしい。

「お帰りなさい』

茫然と立ち尽くす琉奈と彰に琴子が声をかける。

『？ どうしたの、彰？ 琉奈ちゃんはともかく、あんたは何回もトコトコノ国に行つてゐるでしょ？ 何驚いてんの？』

「えつと……、後で説明します。それより、琴子さん。どうでしたか？』

琴子は深く頷き、告げる。

「飛鳥川琉奈さん、貴女はトコトコノ国への転移能力を持つた巫女です」

琉奈は返す言葉が見つからなかつた。

やつぱり、とつ諦めに似た気持ちと、この先再びトコトコノ国と

関わる破目になることへの不安と、他人と違う力を得たといつちょつとした優越感どが入り混じり、心の中に巨大な渦ができていた。その渦中では、何を言つのが正解なのか分からなかつた。

「おつかれーー」

琴子の部屋から客間に戻つた琉奈、彰、朱里を出迎えたのは、いつの間にか屋敷に戻つていた誠一だつた。

「誠一兄さん！　いつ戻つてたんですか？」

「ついさつき。蔵にいながら客間かと思つて来てみても誰もいないから、てっきり俺を置いて帰つちゃつたのかと思つたよ」

「遅かつたじゃない、誠一」

「すみません。用事済ますついでに墓参りにも行つてきたんで」

「お墓参り……？」

琉奈はつい訊いてしまつてから、悪いことをしたと後悔した。けれど、誠一は全く気にする様子はなく、世間話でもするように「母親のね。俺が生まれてすぐに死んじゃつたんだけど」と答えた。墓の掃除、朱里さんがやつてくれてんの？　思いのほか綺麗だつたからびっくりしたよ」

「できる時だけ、だけどね」

「そつか。ありがとーございます。で、琉奈ちゃんの方は？」

「はい。あたし、やっぱり巫女つていつになつちやつたみたいです」

琉奈の返答に、誠一は困惑と疲労が入り混じつた溜息を漏らした。

「マジなんだ？」

「琴子さんに確認してもらつて確定。蔵の資料はめぼしいものはなし。」
「こんなとこよ」

「え？　琴子さんに？　大丈夫だつたの？」

心配そうな誠一に、「今日は大丈夫だつた」と朱里がウインクす

る。

「わいと。やるやう日が暮れるし、今日のといひせりふまでかな。
こつちでもまた詳しく調べてみるから。何か見つけたら連絡するね」
瑠奈は朱里の言葉に「よろしくお願ひします」と深く頭を下げる。

呼謳（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

「巫女になつたらどうすればいいんでしょう?」

帰りの電車内。

行きに比べて人の少ない車内で琉奈がぽつりと呟いた。

琉奈自身はあまり実感は湧かないが、それでも自分が他人と違う能力を得てしまったのは事実だ。

果たしてこれから自分はどうしていくべきなのか、この能力とどう付き合つていけばいいのか、まだ掴めずについた。

「無理にその力をどうこする必要はないと思うよ」

隣に座る誠一が優しく語りかける。

「琉奈ちゃんはやつとトロヨノ国から解放されたばつかだつたんだから、無理してまたトロヨノ国に関わる必要なんてない。琉奈ちゃんは久留井の人間じゃないわけだし」

「それはそうですけど……」

「今日行ってみて分かつたと思つけど、うちの一族つて結構閉鎖的だから、琉奈ちゃんが巫女の力を得たからつてみんながみんな歓迎するとは思えないしさ」

苦々しく吐き捨てるように言つ誠一。

彼の横に座る彰は、現実から視線を逸らすように目を伏せている。誠一の言つ通りなのかもしれない。

今日、久留井家であつたことを思い返し、琉奈は胸中でひとりごちた。

大きな屋敷も、中にいる人々も、琉奈の日常とは違う、異質な世界に住んでいた。

もし今後、自分が巫女として能力を役立てていくならば、本家の人々とも関わることになるだろう。

それは自分にとつていいことではないような気がした。けれど、もし自在にトコトコノ国へ行けるようになれば、誠一たちの力になれるかもしない。

トコトコノ国といつ、異世界で戦う彼らの力に、自分が 。

琉奈、誠一、彰の三人を雨雲のように重く垂れ込めた空気が包む。それを打ち破ったのは、突然鳴り出した電子音だった。

流れるメロディは『津軽海峡冬景色』。

レトロな着信メロディを奏でる携帯電話の持ち主は、彰。

「なんでその曲だよ。つーか、マナーモードにしどかなきゃダメだ

う

誠一に注意され、「すみません」と殊勝に謝りつつ、彰は鞄の中から携帯電話を取り出す。

「あれ？ お前、いつの間にスマホにしたの…？」

演歌を流し続けるスマートフォンを自慢げに掲げ、操作する彰。

「メールか……げ、野乃さんだ」

げんなりした顔で彰が呟く。

野乃という名前を聞いた誠一もまた、心底嫌そうな表情を浮かべる。

「あの、野乃さんって誰なんですか？」

「……由香理さんの娘」

疲れきった表情で答える誠一。

琉奈はなんとなく誠一が嫌な顔をしている理由を察し、「ああ…

…」と漏らす。

「由香理さんにそつくりでさあ。自分は特別だつて考えがちで、自己中で。親類じやなかつたら関わりらないタイプだね。関わらなきやいけないのがホント残念。んでもって、祥ちゃんのことが大好きなの」

「祥吾くんの方はどうなんですか？」

「祥ちゃんも苦手なタイプだと思うけど、邪険にはしてないよ。優

しいからね、祥ちゃん。俺だったら蹴飛ばしてやるね。まあ、俺は嫌われるからいいんだけどさ。つーか、彰はいつの間にあいつとメアド交換したわけ？」

「交換したわけではないですよ。今日、父さんのところに行ったら鉢合わせして、強制的にメアドを奪取されたんです」

答える彰はきつく顔を顰めていて、眉間にたくさんの皺が刻まれている。

「そりゃ大変だつたなあ。で、メールには何て？」

「ええっと……要約すると、帰りの挨拶をしなかつたことに対する叱りと、祥吾兄さんを連れてこなかつたことに対する文句ですね」「何様だよ、あいつ」

誠一が言い捨てる。

どうやらよっぽど野乃という女の子を嫌つているようだ。

「何をどう考えたら祥ちゃんが本家に来るつて思うのかね？」

「あの人のことだから、自分のためになら来てくれると思ってるんじゃないですか？」

「おめでたい思考回路だな。生きるの楽しそうで羨ましいよ」

誠一と彰の辛らつな物言いで、琉奈は珍しいものを見た気分になる。

「……あつ、琉奈ちゃん！ 僕たちいつもほこんなこと考えないからね！？」

「そ、そうですよ！ 誤解しないで下さいね！ 普段は至つて善良な一市民なんですよ僕たち！ ていうか駅に着きましたよ！ ちやんと送つていきますからね、アスカ先輩！」

恥部を見られたかのように慌てふためく兄弟の姿に、琉奈は思わず苦笑した。

琉奈を自宅へ送り届けた誠一と彰が帰宅したのは、夜九時を回った

た頃、だつた。

「お帰り、一人とも」

一人を迎えたのは、自宅で休日を過げていた次男の祥吾だ。

「今、恭子さんが夕飯の支度してるよ。今日は恭子さんのカレーライスと、俺が作った鶏肉の炒め物だよ」

「ホントですか!? 嬉しいなあ。僕、ちよつと母さんのところに行つてきますね」

彰は靴を脱ぎ、足早にキッチャンくと駆けていく。

「ちゃんと手洗つてうがいしろよ……って聞いてないな、あいつ」

やれやれ、と言わんばかりに誠一は頭をがしがしと搔く。

「ところで祥ちゃん」

「何?」

「俺、カレー大好物」

「? 知つてるけど」

「彰は祥ちゃんが作ったものが好きじやん」

「まあ、そうだけど」

「今日の夕飯、祥ちゃんがリクエストしたでしょ?」

「……うん」

祥吾の返答を聞いた誠一は、おもむろに膝で祥吾を蹴った。

「つ! ちょっと、痛いんだけど」

「ばか」

「はあ! ?」

「兄弟に氣イ遣つてんじやねえよ」

「……」

祥吾は目を見開き、不機嫌になつた兄を見つめる。

「祥ちゃんは普段から氣イ遣つてんだから。俺らに対してまで遣つてたら気がなくなつちやつじやん」

「なくなるつて、回数券じやあるまいし」

「ものの例えだよ、例え! 俺が言いたいのは」

「

「……分かつてゐるよ。ありがと、兄貴」

祥吾が柔らかく微笑む。その姿に、誠一は安堵の溜息を零す。

「それと、一応報告。琴子さんも啓太も元気そうだったってさ」

「そつか。なら良かつた」

「ん。じゃ、早くリビング行こつぜ。俺、腹減つたわ」

「今日の炒め物、超美味しいよ」

白慢げな祥吾に、「そりゃ楽しみだ」と誠一が笑つた。

「母さん」

忙しくキッチンで夕食の準備をしている恭子の背に、彰が声をかける。

「あら、お帰りなさい、彰。今日はカレーよ。そうそう、祥吾つたら酷いの。私が干し柿入れようとしたら全力で止めるの。いい出汁が出て美味しくなると思うのに」

「……それは祥吾兄さんが大正解だと思いますけど。それより、聞きたいことがあるんです」

「何?」

振り返った恭子の目に映つたのは、いつになく真剣な目をした息子の姿。

ついられて恭子も真顔になる。

「母さん、僕……女の兄弟つていますか?」

「」

恭子は彰の問ひの真意を掴みかね、小首を傾げる。

「……妹が欲しいの?」

「! ち、違いますよ!」

顔を真っ赤にして否定する彰を恭子が鼻で笑う。

「そうじやなくてですね……何て言えばいいんだ、もう

「何? 向こうで何かあったの?」

「はい……。今日、トコヨノ国に行つたんですけど、そこで会つた老婆の魂に言われたんです。僕とそっくりの顔した女と会つたこと

があるって「

「……は？」

恭子は首を傾ける角度を深めた。

「言つておくけど、私はトヨタ国に行つたことないわよ?」

「知つてます。ていうか、そもそも僕はどうせらかと言えば父さん似

ですし。でも、父さんは男だし。意味分からないんですよ」

「ホント分からないわね……。あまり厄介なことにならなきゃいい

けど」

心配する恭子に「えりですね」と答へ、彰は嘆息した。

深縁（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

「琉一奈ー！」

翌日。月曜日。

教室に入るなり、友人の松下綾が琉奈に詰め寄ってきた。その顔は怒りで満ち溢れている。

綾の怒りを買った覚えのない琉奈は困惑しつつ、「落ち着いて、綾」と友人を宥める。

「ごめん、なんでそんなに怒つてるのか全然分かんないんだけど…」

「昨日！ 誠一先輩と出かけたんだって！？」

「え？ あ……うん。調べものしに一緒に」

「あたしが誠一先輩のこと好きだって知つててなんでそんなことすんの！？ 酷くない！？ 一人で出かけるなんて、それでも友達なの！？」

「二人つて、違うから！ 彰くんも一緒だつたから！…」

綾の怒りの炎を鎮火すべく、早口でまくし立てる琉奈。琉奈の弁明に綾は目を点にする。

「……二人きりじゃなかつたの？」

「違う違う！ あたしと先輩と彰くんの三人！」

「……ホントに？」

「先輩か彰くんか、なんなら祥吾くんに確認取つてくれていよい。マジで先輩と二人きりじゃないから」

力説する琉奈に綾もようやく納得し、「それならいいけど」と胸を撫で下ろす。

「二人きりだつたらちゃんと綾に言つよ」

「そつか。でも三人でも誠一先輩とあたし抜きで出かける時は教え

てよね。抜け駆けされちゃたまんないし」

「抜け駆けつて……。友達が好きな人を好きになつたりしないよ」苦笑している琉奈の言葉を綾は「甘い！」という力強い一言で一蹴する。

「恋つてのはね、相手がどんな人だろうと、気付いたら落ちちゃつてるもんなの。例え相手が身分の差がある人だろうと、テレビの向こうでしか会えないアイドルだろうと、友達との好きな人だろうとね」

「そういうもんなの？」

「そういうもんなの！」

琉奈は「ふうん」と、納得している成分と納得していない成分を半分ずつ含んだ咳きを漏らした。

「ずい分賑やかだね、二人とも」

遅れて登校してきた祥吾が琉奈と綾に声をかける。

「あ、おはよう、久留井くん」

「おはよう。ごめんね、うるさくて」

「おはよ。いいんじゃないかな、二人ともいつも明るくて」微笑みかける祥吾。その瞬間、星のように瞬く光が無数に飛び散つたように琉奈と綾の目に映つた。

何故か照れてしまつた一人は「あ、ありがとう」と口ごもつつ言う。

「なあに朝から殺し文句炸裂させてんだよ、久留井」

三人の会話に新たな声が割つて入る。

声の主は、朝の部活を終えたばかりの秋川浩太だ。

浩太に睨まれた祥吾は肩を竦める。

「殺し文句つて……。俺は思ったことをそのまま言つただけなんだけど？」

「それがダメなんだよ。久留井はただでさえ顔で得してんだから、せめて言つことはもつと氣イ遣つてくれよ。俺に不利じやんか」褒められているのか貶められているのか判然としない浩太の台詞に、

祥吾が苦笑する。

「不利って何なの、浩太？」

顔を覗き込みながら尋ねてくる幼馴染に、浩太はやや顔を紅潮させつつ「何でもない」そもそもこのままくると清々しいな」と内心呟く。

さりぱり事情が分かつていらない様子の琉奈に、祥吾と綾は「鈍感さもここまでくると清々しいな」と内心呟く。
祥吾と浩太は以前、琉奈のトヨコノ国関連の件を解決する際に協力し合い、浩太は祥吾を敵視するのをやめていたのだが、事件以降、琉奈が祥吾のことを名前で呼ぶようになつてから、再び祥吾を勝手にライバル扱いするようになつた。

とはいって、祥吾はほとんど相手にしていないが。

「あ、久留井くん。今日の放課後、お願ひね」

「あー……あれかあ。うん、こっちこそよろしく」

「放課後つて何？」

小首を傾げる琉奈に、綾は不敵な笑みを浮かべる。

「校内新聞の特別企画で、学内のプリンス＆プリンセスを決めようつていうのが持ち上がったの！ 新聞部が周囲の意見プラス独断と偏見込み込みで、中等部と高等部から合わせて、男女それぞれ六人候補に出して、メールで投票してもらって一位を決めようつていう。で、候補者には事前の新聞に載せるインタビューをお願いすることになつて、それが今日なの」

「へえ、そんなことしてたんだ、新聞部。ていうか、祥吾くん選ばれたんだね」

「うん。正直、じついうのはちょっと苦手なんだけど」

「そうなの？ 同じように選ばれた誠一先輩は結構ノリノリで、さつきも「インタビューではよろしくね」ってメールが来てたけど綾の言葉に琉奈と祥吾は顔を見合せ、思わず吹き出してしまう。その横で浩太が嫉妬の炎を燃え盛らせているが、二人は全く気付いていない。

「ちなみに、中等部から彰くんも選ばれてるの。インタビューのお

願いしに行つた時に超渋い顔されたけど

「彰くんの渋い顔……」

「めっちゃ顔に皺寄つてそうだね、あいつ」

彰の超渋い顔を想像し、今度はお腹を抱えて笑い出す琉奈と祥吾。その様子を涙目でじっと見つめる浩太の姿に、綾はもりい泣きしそうになってしまった。

「なんだ、じゃあ結局俺たち三人とも選ばれてんだ」「

昼休み。低く雲が垂れ込める灰色の空に、久留井誠一のつまらなそうな咳きが響いた。

「ここ最近、誠一、祥吾、彰の三兄弟は琉奈、綾と共に屋上で昼食をとっている。

青空の下で食事をするのが思いのほか気持ち良かったのと、食堂は人が多く、落ち着いて食事ができない、というのがその理由なのだが、今日は朝から太陽が分厚い雲に邪魔されて顔が出せない、生憎の空模様となっている。

「せっかく祥ちゃんと彰に自慢しようと思つてたのに」

不満げに咳きつつ、誠一はナポリタンとカルボナーラを挟んだ、パスタミックスドックを頬張る。

「残念だったねえ、兄貴」

「すみません、僕もハンサム認定されてしまいまして」

弁当に箸をつけつつ、全く悪びれることなく謝る祥吾と彰。誠一はそんな弟たちを見て、フン、と鼻を鳴らす。

「先輩はもちろんですけど、祥吾くんも彰くんも選ばれないわけないじゃないですか。みんなカッコイイんですから」

「それはそうかもしれないけどさあ。つまんないじゃん、三人とも選ばれるなんて」

「でも、決戦はこれからですから! きっと誠一先輩が一番ですよ

！」

拳を握り、力説する綾。

その言葉に、荒々しくパンに歯を立てた誠一の目が不敵に歪む。「にしても、新聞部も頑張るよね。準備とか大変なんじゃない？」
「大変は大変ですけど、部としては楽しい話題を提供して、学校を盛り上げていきたいんです。あ、そうそう。これも新聞部情報なんんですけど、明日、高等部の一年A組に転校生が来るらしいですよ」「転校生？ また来るんだ。でも、一年生じゃ誰も一緒にじゃないね」高等部一年A組の琉奈の言葉に、同じクラスの綾と祥吾、三年B組の誠一、中等部の三年A組の彰がそれぞれ頷く。

「でも、もうクラスまで分かるんだ。新聞部の情報って早いね」「それもあるけど、うちの学校つて試験結果でクラスが決まるから、すぐ分かるんだよね」

綾の説明を聞き、祥吾と誠一は「そうなの！？」と目を丸くする。一方、彰は知っていたようで、驚いている兄たちを見て嘆息する。「てっきりランダムにクラス分けされてるんだって思つてた」

「クラスは全学年試験結果で決まるんです。誠一先輩たちは多分、編入試験の結果ですね」

「なるほど、そんで俺はB組で……」

そこまで口にしたところで何かに気付いたらしい誠一は、一瞬目を大きく見開いたかと思うと、急に表情を曇らせ、肩を落とした。

「気に病むことはないですよ、誠一兄さん」

「そうだよ、兄貴。一人だけB組でもいいじゃん」

誠一が落ち込んだ理由 自分以外全員A組 に気付いた祥吾と彰が兄の方を優しく叩く。

慰められてしまつた誠一は、「どうせ俺はB組だよ。つーか、B級品なんだよ」といじける。

「て、転校生は男子なの？ それとも女子？」「女子らしいって話だよ」

慌てて話題を変えた琉奈に綾が答える。

「まあ、どんな子が来ようと、あたしたちには関係な……あ
話している途中、綾がおもむろに視線を天へと持ち上げる。
琉奈たちもつられて空を見上げた。

「！」

琉奈の額に一粒の水滴が降ってきた。雨だ。

そうこうしているうちに空は本格的に泣き出し、涙の量を次第に
増やしていく。

五人は急いで広げていた昼食を片付け、屋上から退散する。
今日雨が降るなんて、天気予報で言つてなかつたのに、
屋上から走り出しながら、琉奈は胸中でひとりごちた。

不平穏（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/
転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/
久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

「そういえば、さつき話しそびれたんですけど」

放課後。新聞部が企画した、『学内のプリンス&プリンセス決定戦』のためのインタビューを行うために呼び出された、新聞部の部室前の廊下で久留井彰が口を開いた。

「何?」

「どうかしたの、彰?」

側にいる兄の誠一、祥吾が尋ねる。

「本家に行つた時のことなんですけど。僕、アスカ先輩と一緒にトヨノ国に行つたんです。先輩に本当に巫女の能力が備わっているのか確かめるために」

「あれだろ、そこにいた老婆の魂から、お前そつくりの女に会つたことがあるって言われたって話だろ? それなら昨日、俺たちも恭子さんから聞いたけど」

話のショートカットをしようとした誠一だったが、彰は「それもあつたんですけど、違うんです」と否定し、話を続ける。

「僕は老婆が攻撃してきたので応戦していくんですけど、途中で周囲の風景が変わったんです」

「風景が変わった……?」

自分の言葉を反芻する祥吾に、彰は「ええ」と頷き、更に続ける。「具体的に話すと、老婆の魂が造り出した森林が、学校の教室に変わりました。こんなこと、僕は今まで体験したことないんですが、兄さんたちはありますか?」

彰の問いかけに、誠一と祥吾は首を横に振る。

「なんこと一度もないよ。なあ、祥ちゃん?」

「うん。トヨノ国の魂が造り上げた空間を変えるなんて、よっぽ

ど強い魂の持ち主じゃないと出来ない芸当だと思つよ。彰、そんな力あつたの？」

「ありませんよ、そんなの。それに、僕はあの時戦闘に集中していて、学校のことなんて全く考えていませんでしたし、学校が僕の一番印象に残つてる場所とも思えませんし」

「じゃあ……琉奈ちゃんつてこと？」

誠一の一言に、祥吾と彰は沈黙する。

長きに渡つてトコトコノ国と関わってきた久留井の人間ではない飛鳥川琉奈。

彼女は久留井家の者ではないにも関わらず巫女の能力を得た上、トコトコノ国の魂を凌ぐほどに強い力を得たというのか？
だとしたら、何故彼女はそんな力を得ることになったのか？
一体彼女に何があつたのか？

疑問に次ぐ疑問に頭を悩ませる誠一、祥吾、彰の三兄弟の元へ、「お待たせしました！」と新聞部員の松下綾がやつて来る。
「綾ちゃんも大変だねえ、みんなからインタビューなんて」
先ほどまでの険しい表情から一転、朗らかな笑顔で誠一が綾に話しかける。

「大変だけど、楽しいですよ。じゃ、せつかくなんで、三人は一緒にお願いします」

三人は綾に促されるまま新聞部の部室へと入つていった。

翌日になつても雨は降り止まず、自転車通学をしている琉奈や綾は、親に車で送つてもらい、登校した。

土砂降りの雨は絶え間なく降り続け、その雨音は時折、談笑している生徒たちの会話をかき消すほどに激しく教室中に響き渡る。

「琉奈琉奈琉一奈！」

巨大な水溜りと化してゐる校庭を窓越しに見下ろしてゐる琉奈に、

綾が教室に入つてくるなり声をかける。

「お、おはよ、綾……。朝から元気だね」

綾のハイテンションぶりに顔を引き攣らせつつ琉奈が言つ。

「あのねつ、さつき職員室に行つて、転校生の顔を覗いてきたんだけど、めっちゃ可愛いの！ も、超つ絶美少女！！ アイドルみたいだつた！！」

興奮氣味に「なんでうちのクラスじゃないんだろう！？」と喚く綾を、琉奈は苦笑しつつ見つめる。

「朝からテンション高いね、松下さん……」

遅れて登校してきた久留井祥吾が言つ。彼の表情は暗く、かなりのローテンションだ。

「おはよ。どうしたの、祥吾くん？」

「昨日、兄貴と一緒にうつかり徹夜でプレステやっちゃってさあ「なになに、エッチなやつ？」

「なんでそうなるの、松下さん！？ ただのレースゲームだよ。兄貴はやり込んでるから上手くて、徹夜の変なテンションで挑み続けちゃつて、気付いたら朝だよ……」

げんなりしている祥吾に、琉奈と綾は哀れみの目を向ける。

「きっと久留井くんも転校生の顔見たら元気になるよ！」

「転校生？ ああ、昨日話してた？」

「そうそう！ もうね、有り得ないくらい可愛いの！－！ 目の保養になること間違いなし！－」

「へえ。けど、俺は目の保養は必要ないかな。アスカさんと松下さんで十分だよ」

穏やかな微笑みを浮かべて話す祥吾に、琉奈と綾は思わず赤面し、彼らの近くにいた女子生徒たちまで顔を赤らめ、祥吾に視線を送る。

「何だよ、その女たらし発言」

いつの間にか朝練を終えて教室へやつて来ていた秋川浩太が祥吾を睨む。

浩太の中で、祥吾は完全に敵に戻ったようだ。

「おはよ、秋川くん。最近また当たりが強いね……。ていうか、今のが女たらし発言だと思うつてことば、秋川くんはアスカさんや松下さんが側にいても目の保養が必要なんだ?」

「え! ?」

想いもよらない祥吾の逆襲に浩太がたじろぐ。

「そ、そんなこと……俺だって、アスカがいれば目の保養なんて……」

…

「浩太、キモい」

「あたしは、ふさいくだつての! ?」

更なる琉奈と綾からの攻撃でますます後退する浩太に、祥吾が思わず苦笑してしまった。

嵐前（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

昼休みになつても雨は止まず、琉奈と綾、そして久留井三兄弟は、昼休み中は使用していないといつ新聞部の部室で昼食をとることにした。

「食堂だと人多いし、俺ら三人が揃うと目立つちゃうみたいだから。でも、ホントに部室使っちゃつていいの？」

購買で予め購入しておいたパンが入った紙袋を机に置いた久留井誠一が言つ。

「全然。他の部は結構部室でお昼食べたりしてますし」

ちやつかり誠一の向かいの席を確保しつつ綾が答える。

「確かに、浩太もバスケ部の部室でお昼食べたりしてるし」

「そりなんだ。どこで食べるんだろうって思つてた」

琉奈が綾の隣に座り、その向かいの席に祥吾が座りながら話す。

「おおう！ 祥吾兄さん、今日もまた美味しそうなお弁当ですね！」

祥吾の隣に座る彰は弁当箱を開け、その彩り鮮やかな中身に目を輝かせる。

「いいなー、俺も購買パンをコンプしたらお弁当作つてもらおつ」

「やだよ、面倒だから。兄貴は恭子さんに造つてもらひなよ」

顔を顰めた祥吾の提案に、「それはヤダ」と誠一も顔を顰める。

「恭子さんのお弁当、そんなにすごいんですか？」

琉奈の問いに、三兄弟は揃つて頷く。

「昔、タッパーいっぱいのうどんと、水筒いっぱいのビーフシチュー持たされて、うどんにかけて食べろって言われたことがある」

渋い顔で話す誠一の体験談に、琉奈と綾は何も言えなくなる。

女子一人の沈黙を重く感じた祥吾の「じゃ、食べよつか」という言葉をきっかけに、口々に「いただきます」と告げ、一同は自分の

昼食に口を付け始める。

その時だつた。

「見つけたつ……」

突然、ものすごい勢いで部室のドアが開かれたと同時に、女の子の声が飛び込んできた。

一体何事かとドアへと視線を向けた十個の目に映つたのは、高速で琉奈たちの方に向かつてくる、一本の尻尾のようなものが生えた物体。

それは猛烈な速さで部室内を駆け、祥吾の体に突撃した。ようやく動きを止めた物体の正体は、長いツインテールの小柄な少女で、強く祥吾に抱きついている。

「あ……あの……？」

「やつと見つけた！ 会いたかったよ、祥吾！」

祥吾の胸に埋めていた顔を上げ、彼を見上げる少女。

その顔を見た誠一、祥吾、彰は「はあ！？」「ええ！？」「なんで！？」と零す。

「やだ、転校生！？」

思わず叫んだ綾の言葉に、三兄弟は「「「なにい！？」」」と同時に声を張る。

「んふふ、びっくりした？ 野乃、祥吾に会いたくて、こっちに来ちゃつた」

野乃、と名乗った少女は嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「彼女は佐虎野乃さん。せいの伯母の由香理さんの娘で、俺たちの従姉妹」動搖が落ち着いたらしい祥吾が琉奈と綾に紹介する。が、野乃是祥吾のことしか見ておらず、一人には全く関心がないようだ。

「こんな可愛い親戚がいるなんて、久留井家つて美形しか生まれない家系とか？」

野乃を見つめながら綾が溜息混じりに尋ねる。

佐虎野乃是身長が一五〇センチあるかないかと小柄だが、顔も小

さい。しかし長い睫に縁取られた瞳は大きく、アイラインが引いてあるかのようにぱっちりとしている。ふくよかな唇が印象的な彼女は、可憐という言葉をそのまま人間にしたかのようだ。

「本とは前から転校するつて決めてたんだけど、祥吾をびっくりさせたくて、ずっと内緒にしてたんだよ」

両耳の上で結った、腰の辺りまである長いツインテールを揺らしながら野乃が言う。

そっぽを向き、野乃から視線を逸らしている誠一はそれを聞き、はん、と鼻で笑う。

琉奈は野乃という名前と誠一の態度から、久留井本家からの帰りの電車内での会話を思い出していた。

自己中で、あまり関わりたくないタイプ。祥吾のことが大好きだが、誠一のことは嫌っている。

今見ている限り、誠一と彰が話していた通りの人物のようだ。

「野乃、こちらは俺のクラスメイトで、飛鳥川琉奈さんと松下綾さん」

祥吾に女子一人を紹介され、ようやく野乃是琉奈たちを見るが、その宝玉のように美しい瞳は冷たく、彼女たちに興味がないのは明らかだつた。

「なんでこんな平民が祥吾と同じクラスで、野乃は違うクラスなの？」

愛らしい唇が零した「平民」という言葉に、琉奈と綾は絶句する。「学年が違うからに決まってんだる。小学生でも分かるぞ、んなこと」

「うるさい、誠一」

「年上を呼び捨てにしてんじゃねえよ、ガキが」

誠一と野乃の刺々しい言葉の応酬に、久留井家のい人間ではない琉奈と綾は口を挟むことができず、沈黙する。

「二人とも落ち着いて」

琉奈と綾の戸惑いを察し、祥吾が慌てて誠一と野乃の仲裁に入る。

誠一は苛立つた感情を剥き出しにした顔のまま、荒々しく立ち上がる。

「どこに行くんですが、誠一兄さん？」

「教室に戻る。こいつが一緒にどんな飯も不味くなるから」

そう言い捨て、誠一は新聞部の部室を出て行ってしまった。

普段と全く違う誠一の態度に、琉奈と綾は特に綾は茫然として、ただ誠一を見送ることしかできなかつた。

「短気な男ね。品もないし。同じ久留井の人間として恥ずかしいわ」

「野乃。それ以上兄貴のこと悪く言つたら、今度は俺が怒るから」

「！」「めんね、祥吾。もう誠一のことなんて何も言つたりしないから許して」

野乃是科を作り、祥吾に許しを請う。

祥吾は答えず、ただ深い溜息をつくばかりだ。

「あの……あたしたちも邪魔だつたら教室に……」

「！　だめ、ここにいて！」「すぐ教室に戻つて頂戴」「できればこのままいて下さい、先輩！」

すっかり居心地が悪くなつてしまつた琉奈の発言に、祥吾、野乃、彰が一斉に食いつく。

どう対応すればいいのか分からなくなり、たじろぐ琉奈に祥吾が、

「アスカさん、お願ひだからここにいて

と、捨て犬のような瞳で懇願する。

琉奈と綾は見つめ合い、このまま部室に残ることに無言で決めた。

結局、その後も終始祥吾に引っ付く野乃の姿を見せられ、琉奈、綾、彰はほぼ無言で昼食を済ませた。

やや疲れた面持ちで先に教室へと戻つた琉奈と綾の携帯が同時に鳴り出した。

二人が携帯電話のディスプレイを確認すると、誠一からのメール

が届いていた。

開いたメールに書かれていたのは、途中で部屋から出て行つてしまつたことに対する謝罪と、その後を心配する文章だつた。

「あんな態度取られたら、誰だつて出て行くよ。ね、アスカ？」
綾の問いかけに琉奈が深々と頷く。

佐虎野乃の態度は彼女の母親を彷彿とさせた。

三兄弟の伯母である、久留井由香理。

彼女は誠一に対しても常に冷たく対応しており、その光景は琉奈も綾も目の当たりにしている。

そして、野乃の誠一に対する態度は由香理のそれと全く同様であり、年上に対する敬意の欠片もなかつた。

彼女の態度には、琉奈も綾も傍らで見ていて気分が悪くなつた。
「いつもにこにこ笑顔で優しい誠一先輩があんなにキレるつてことは、あの子よっぽど酷い性格してんだろうね。ああもう、アイドルみたいとかはしゃいでた朝の自分を殴りたいよ！」

「あの子や伯母さんの先輩嫌いは、先輩のお母さんと関係あるらしくけど、見てて気分いいもんじやないね」

「ホントだよ！ 誠一先輩、可哀想だよ……」

「……心配かけてごめんね、アスカさん、松下さん」

遅れて教室に戻ってきた祥吾が、琉奈と綾に開口一番謝つた。

「！ 祥吾くん、大丈夫だつた？」

「なんとかね。無理やり一年の教室に置いてきた」
心配する琉奈に祥吾が苦笑しつつ答える。

「まさかあいつがこっちに来るなんて……。先が思いやられるよ」

裏来（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

祥吾の嫌な予感は早々に的中することになった。

帰りのホームルームが終わるなり、祥吾は鞄を抱えて駆け出した。もちろん、再び祥吾を訪ねてくるだろう野乃から逃れるために。しかし、その努力も空しく、あと一步で教室から脱出できる、といふところで恐れていた事態に陥ってしまった。

「祥吾！ そんなに慌ててどこへ行くの？」

満面の笑みで一年A組にやつてきた佐虎野乃に、祥吾は大きく肩を落とした。

その後姿を琉奈と綾が憐憫の情溢れる瞳で見守る。

「来るの早いね、野乃……」

「でしょ？ ホームルーム抜け出して、こっちのが終わるまで待つてたの」「

「抜け出して……ダメだろ、そんなことしちゃ」

「だつて野乃、早く祥吾に会いたかったんだもの。授業の合間の休み時間は短いから会いに来れないし。やっぱり、無理にでもこのクラスに来てもらえば良かつた」

「それはどうしたって無理でしょ……」

溜息を漏らす祥吾。野乃是そんな彼を見てもなお、嬉しそうに微笑んでいる。

「何、その子つてもしかして久留井の彼女？」

側にある席に座っていた浩太が野乃を指差しつつ、祥吾に話しかける。

祥吾と野乃に興味を持つていたらしい他の男子一人も続いて、「すげえ可愛いじゃん」「何年生?」「どこで知り合ったんだよ?」などと問いかける。

無遠慮に話しかけてくる彼らの姿に、野乃の顔から笑顔が消え失せ、代わりに憤怒が現れる。

「祥吾や野乃にそんな口の利き方……無礼者ね」

「！ 野乃！」

祥吾が鋭い叫び声をあげる中、野乃は自分と祥吾を取り囲んでいる男子たちに向けて、野球のバットを振るように大きく腕を振った。

一瞬の間の後。

男子たちは突然、床に膝をついた。その呼吸は何百メートルも全力疾走した後のように荒く、大量の汗をかいしている。

「こんのバカ……！」

男子たちの異変を目撃したクラスメイトたちが茫然とする中、祥吾は野乃の腕を掴み、共に教室から出て行く。

「浩太！ 大丈夫！？」

我に返った玲奈が浩太に駆け寄る。

浩太は突如わが身に起こったことに思考を停止させつつも、「ああ……」と答える。

「なんか、急に体が……立つてらんないくらい、力、入らなくなつて……。あの女、一体俺らに何したんだ？」

「祥吾くんなら何か知ってるかも。行こ、玲」

玲奈が後ろについてきていた玲に声をかけ、彼女も頷く。

二人は急いで祥吾と野乃の後を追つた。

「何でことすんの！？」

祥吾の怒号が駆け込んだ進路指導室に響き渡つた。

野乃是両耳を人差し指で塞ぎつつ、「そんなに怒らないでよ」と

祥吾を宥めるが、眼前の男の怒りが収まる気配はない。

「俺たちみたいな力を持たない人にあんなこと……有り得ないよ！」

「だつて、あの人たちしつこかつたし。だいたい、力がないのが悪いのよ。力があればあんなの簡単に防げるもの」

「言つてることがめちゃくちゃ過ぎる……」「……」

祥吾は疲れた顔で頭を抱える。

「祥吾くん、いる？……あ、いたいた」

不意に指導室と廊下を隔てるドアが開かれ、琉奈と綾がやつてくれる。

「アスカさん。松下さん」

「……あなたたちはお昼に会つた人たちね」

野乃が琉奈たちに警戒の眼を向ける。

「祥吾くん、浩太たちは一体どうなつちゃつたの？ この子は浩太に何を……？」

「野乃是秋川くんたちの魂の力を切り取つたんだ」

「魂の力を、切り取る……？」

「それつてマズインじゃないの？ 秋川たちはどうなつちゃうわけ？」

青ざめる琉奈と綾を、「大したことないわ」と野乃が鼻で笑う。「魂の力なんてそのうち回復するわ。そもそも、私たちのように魂の力を利用する術を知らない一般人は必要以上に溜まつた魂の力を日常的に、無意識に放出してゐるし。私はそれを少し早めたようなものよ」

全く悪びれることなく、歌うようにスラスラと説明する野乃に、琉奈も綾も開いた口が塞がらない。

彼女は自分のせいで、例え短い間でも苦しむ羽目になつた人間を見ても、何とも思わないのだ。

「野乃。秋川くんたちに謝りなさい」

「ええ！？ 嫌よ、悪いのはあっちじゃない」

「なんでそうなるかな……。能力使えない人に対してもうなつて言われてないの？」

「別に。みんなに話しても、きっと力が使えない方が悪いって言う

わ」

野乃の主張に、祥吾は「確かに本家の奴らはほとんどがそう言いそุดけど」と額を押さえる。

「あの、あたし、浩太の様子を見に戻るね」

祥吾と野乃の話が平行線で終わりそうな気配を察した琉奈が告げる。

綾も「あたしも！」と便乗し、一人が進路指導室を出ようとしたら剎那。

祥吾、野乃、そして琉奈の三人は悪寒がした。

微動だにすることすら躊躇われるほどの重圧にも同時に襲われ、三人は身動きが取れなくなる。

「？ どうしたの、琉奈？」

唯一人何も感じず、平然としている綾が琉奈の肩に手を置いた瞬間、進路指導室にいた四人の意識は別次元に飛ばされてしまった。

「アスカさん！ 松下さん！」

祥吾に名前を呼ばれ、琉奈と綾は目を覚ました。

一人は辺りを見回し、すぐに再びトロコノ国に来てしまったことを実感した。

周囲の風景は先ほどまでいたはずの進路指導室ではなく、時代劇のセットのような江戸時代風の街並みに変化していたのだ。

「暴ん坊将軍がいそうな世界ね」

「そう？ あたしは鬼が浮かんだ」

「アスカ、池波太郎好きなんだ？ 知らなかつた」

「あの……渋い話してるとこ悪いけど、いい？」

江戸時代を舞台にした作品トークをしている琉奈と綾の間に、祥吾が呆れ顔で割って入る。

無言で前を指差す祥吾。つられてその先へと視線を向ける琉奈と綾。

そこには光の塊が三つ浮いている。

宙に浮く三つの光 魂たちは次第に形を変え、やがて侍、日本軍兵士、着物の女性の形をそれぞれ取つた。どうやら周囲の景色は侍の魂が影響しているらしい。

「この戯け者共め」

侍が差している刀の柄を握る。

「われらが守護せし子孫に何たる仕打ち！」

「此度の狼藉、許しませぬ！」

兵士がサーベルを抜き、着物の女性は衿から短刀を抜き出す。

「守護せしつて……そつか、この人たちは秋川くんたちの守護靈か」

「あ、守護靈つてやっぱいるんだ」

綾の咳きに祥吾が頷く。

「トコヨノ国に渡つた先祖の魂のうち一つが子孫を守るために現世に戻つて、守護靈としての役割を果たすことになるんだ。そして、力を使い果たして守護する力がなくなつたら別の靈と交代する。彼らは今、秋川くんたちを守つている魂だよ」

琉奈と綾は改めて三つの魂 秋川浩太らの守護靈と対峙する。彼らは誰もが怒りに満ちており、今にも琉奈たちを取つて喰わんとせんばかりの殺氣を放つてゐる。

「参つたなあ……

祥吾がぽつりと漏らす。

「や、やばいの？」

「戦えなくはないけど、良くて相討ちだね。守護靈つてのはそういう役割を任されるだけあって、力が強い靈が多いんだよ。まして相手は三人だし。説得できればいいんだけど……」

琉奈の問いに答える祥吾のこめかみから流れ落ちた冷や汗が頬を滑り、顎へと伝い落ちる。

いかに自分たちが苦境に立たされているか実感した琉奈と綾は返す言葉を失う。

「説得なんて、面倒なだけよ」

野乃が この事態を引き起こした張本人が、結つた髪の今朝氣

を指で弄りながら言い捨てる。

その一言に琉奈たちは絶句し、守護霊たちは怒りを倍加させる。

「野乃、お前今の状況が分かつて」

「やつつけちゃえばいいだけの話でしょ」

現状を悪化させた野乃を叱責する祥吾の言葉を遮り、傲慢な口調で野乃が言い放つ。

刹那、野乃の右手が強い光に包まれたかと思うと、次の瞬間、彼女の背丈よりも大きな光の鎌が、その小さな手に握られていた。

「大丈夫よ」

鎌の出現に茫然としている守護霊たちに、野乃が砂糖菓子よりも甘い微笑を向ける。そして、地面を強く踏みしめ、

「あんたたちの代わりなんていくらでもいるか、らああああッ！！！」

力一杯鎌を振るう。

突然の攻撃に対処できなかつた守護霊たちは、三人いっぺんに大鎌に薙ぎ払われてしまつた。

彼らはすぐさま立ち上がろうとするが、耐え切れず地面に崩れ落ち、やがて次々に霧散していった。

騒乱（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/
転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/
久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

2 - 12

気が付けば、琉奈たちは進路指導室に戻っていた。侍たちの魂が倒されたことにより、トコヨノ国から脱出できたらしい。

「守護霊のわりに大したことなかつたなあ。もつと手こたえがあると思ったのに」

腰に手を当てて咳く野乃。先ほどまでその手が握っていた大鎌は既に消え失せている。

「彼らはただ、子孫を守りたかっただけだつたんだよ」

「そうかもしだいけど、野乃や祥吾を殺そうとしたのよ？ 攻撃するのは当然でしょ。ああしなくっちゃ野乃たちが殺されてたのよ」「けど……」

「祥吾は甘いのね。そういうところも大好きだけど」野乃是組んだ両手を朱の差した自分の頬に寄せ、祥吾の側で囁くが、祥吾は険しい表情を崩さぬまま、野乃を見つめるばかりだ。

「あの……祥吾くん、浩太たちの守護霊は……」

沈黙している祥吾に、琉奈がおずおずと話しかける。

「ああいうのはいないとマズイって、前にテレビか何かで見たことがあるんだけど。浩太、大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、アスカさん」

視線を野乃から琉奈に移し、祥吾が答える。

「不測の事態で守護霊が消えてしまうことはたまにあるんだ。その場合、すぐに次来る予定の魂がトコヨノ国から来る。今回もきっとそうなると思うよ」

「……祥吾『くん』？」

野乃が琉奈と祥吾の会話を割つて入る。

琉奈を見つめる大きな瞳には、ナイフに似た鋭い光が宿っている。美しい眼に射抜かれた琉奈は全身を縫いとめられたように動けなくなり、無言で野乃と視線を絡める。

「さっきから気になつてたんだけど、なんで平民が祥吾を名前で呼んでるの？」

「俺がそう呼んでって言つたんだ」

抑揚のない声で問い合わせる野乃に、祥吾が代わりに答える。

「どうして？」

「別にいいじゃん、友達なんだから」

「友達？ 平民風情と？」

「……さっきから聞いてりや、平民平民つて……」

琉奈の後ろにいる綾が静かに呟く。力のこもつているらしい彼女の両肩は激しく震えていた。

「ちょっと他人と違う力があるからつて何なのよ偉つそーに！ あんたなんて力がなればちょっと可愛いだけのただの小娘じゃない！」

額に青筋をたて、野乃を指差しながら、綾が怒りを爆発させる。綾の発言に、野乃も不機嫌そうに眉を顰める。

「小娘……？ なんて無礼な奴なの、無力なくせに。あの男たちのように戦の力削がれたいわけ？」

「野乃！」

祥吾が野乃の脅しを制止する。

注意された野乃はばつが悪そうに俯く。

「野乃。せっかく教室まで来てくれたのに悪いけど、先に帰つてて

もらえる？」

「え？ でも野乃是

「帰つてて」

野乃是不満げな表情を浮かべつつも、黙つて進路指導室を後にした。

従妹の姿が見えなくなつたのを確認した祥吾は肩を竦め、

「じゃ、秋川くんたちの様子見に行こつか」と琉奈と綾に笑顔を向けた。

佐虎野乃から目に見えぬ攻撃を受けた秋川浩太他三名の男子は、琉奈たちが教室に戻つて来た時にはすっかり元気を取り戻し、教室掃除に励んでいた。

「浩太！ もう大丈夫なの？」

「もうすっかり良くなつたよ。五分くらいしたら普通に」力瘤を作る仕草で元気になつたことをアピールする浩太の姿に、琉奈は安堵の表情を浮かべる。

「久留井」

浩太が真剣な面持ちで、琉奈の後ろに立つ祥吾に声をかける。

「ちゃんと説明してくれよな」

「……うん、分かつた」

祥吾は真摯な眼差しで浩太に答えた。

掃除が終わり、大半の生徒が部活や帰宅で去つていった二年A組の教室で、久留井祥吾は飛鳥川琉奈、松下綾、秋川浩太の三人に、佐虎野乃について話し始めた。

トコヨノ国^{トコヨノクニ}の魂に干渉する能力を持つ久留井一族の一人、久留井由香理の娘であり、祥吾たち三兄弟同様、魂を散らす能力を有していること。

その能力を現世で用い、浩太たちの魂の力を削り、一時的に立てなくなるほどまでに消耗させたこと。

能力者ゆえのプライドと、他者に対する強烈な優越感を持つていること。そのため、極端に他者を見下す傾向があること。

そして、由香理同様、祥吾の兄である誠一を嫌っている一方、祥吾のことは好いていること。

これらのことと祥吾は身振り手振りを交えながら説明した。

「久留井くん自身はどうなの？あの子のこと、好きなわけ？」

「恋愛感情はないよ。ただ、従妹だから蔑ろにはできないし」

「そういえば、前に先輩が、親戚じゃなかつたら関わらないタイプつて言つてた」

「兄貴は特にそうだと思うよ。兄貴も野乃も、お互いに嫌つてゐるし」「さつきアスカから、あの子が誠一先輩を嫌つてるのは、あの子の母親と誠一先輩の母親が関係してゐて聞いたんだけど、具体的にどうじうことなの？なんで先輩のお母さんは嫌われてんの？」

「簡単だよ。兄貴のお母さん　　咲良さんが久留井の人間じゃないからだよ」

祥吾が告げたストレート過ぎる理由に、三人は返す言葉を失つた。「俺の母親と、彰の母親の恭子さんは久留井の人間。だから兄貴のように伯母さんや野乃から嫌われてはないんだ。昔から久留井一族は近親婚が多くて。今も、遠縁との結婚が多いとはいえ、その風習は残つてゐる。きっと俺たちも、久留井の血筋の女性と結婚させられるだろうね。

けど、咲良さんは久留井とは全く無関係の人だつた。当時、父と咲良さんの結婚に反対した人間は多かつたらしいよ。だから、伯母さんと同じ理由で咲良さんを嫌つてゐる人は他にもいると思うよ」

「……なんで、それでも一人は結婚したの？」

ぱつりと零した琉奈の問いに、祥吾が答える。

「恭子さんが生前の咲良さんに同じこと訊いたら、咲良さんは「好きになつちゃつたから」って答えたんだつて。咲良さんらしい、ストレートな答えたつたつて、恭子さん笑つてたよ」

天気はすっかり回復し、帰路は茜色に染まつてゐる。
前日高校に置いていつた時点のペダルをゆっくりと踏んでいる綾

が、「ねえ、アスカ」と声をかける。

「んー？」

「あたし、今の普通の家に生まれてきて良かったわ」

「あたしも。今の普通の家に引き取られて良かったよ」

「ね。自由に恋愛もできないなんて辛いし」

「だね。まして綾は恋愛体质だもんね」

太陽は燃えるような赤をその身に宿している。

コンクリートの山の中に埋もれつつあるそれは大きく、手を伸ばせば届きそうな気さえする。

「ねえ、アスカ」

「んー？」

「誠一先輩も、一族の人と結婚しちゃうのかなあ？」

「どうだろ？ 先輩はお母さんが一族の人じやないから、大丈夫じゃないの？」

「でも、久留井くんは俺たちって言つてたし」

「綾、彰くんのこと忘れてるでしょ」

「あ」

「その当たりは分かんないけど……少なくとも、祥吾くんはそういうのかなあ？」

「どうだろうねえ？」

女子高生一人の、答えの出ない問答は片方の家に到着するまで続
き、その後もなお、彼女たちの胸中で続いた。

矜持（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 http://ncode.syosetu.com/n8885v/

転校初日の久留井三兄弟 http://ncode.syosetu.com/n1198u/

久留井三兄弟のお引越し http://ncode.syosetu.com/n1078u/

「なんにいいい！？」

帰宅して間もない久留井誠一の絶叫が、夕食時を迎えた閑静な住宅街に響き渡つた。

「近所迷惑ですよ、誠一兄さん」

あんぐりと口を開け、一点を見つめたまま呆然としている兄を、弟である彰が奢める

「驚き過ぎでしょ、兄貴」

「だ、だつてなんでこいつがここに！？　てか、なんで祥ちゃんも彰もそんな平然としてられんの！？」

混乱しきりの誠一。その切れ長の瞳に映つているのは、転校してきたばかりの従妹・佐虎野乃。

しかも彼女はルームウェアに着替え、ソファの上ですっかり寝いでいる。

「つるさいわよ、誠一。今日から野乃是ここに住むの」

「はあ！？」

誠一はますます開いた口が塞がらなくなり、ショックのあまり、肩に下げていた鞄を床に落とした。

「祥ちゃんも彰も知つてたの？」

「知りませんでしたけど、なんとなくそんな気はしていたので」

「女子高生に一人暮らしさせる訳にはいかないでしょ、普通に考えて」

至つて冷静に分析していた弟たちに誠一は絶句する。

「読みが甘いのよ、誠一は。だからトヨトヨノ国の人間に對しても、いつも直情的な攻撃しかできないのよ」

野乃が溜息混じりにマグカップいっぱいのアーレグレイを啜る。

「そういうことだから、よろしく頼むわね、誠一」「キッチンにいる恭子が手を合わせる。

誠一はうなだれながらも「ハイ……」と答えるしかなかつた。

「それにしても、誠一だけ帰りが随分遅かつたわねえ」

五人で囲む食卓。

白い平皿に、大半を祥吾が作ったクリーミーシチューを装いながら恭子が言つ。

「あー……実はさ、友達何人かと掃除の時間中にふざけてたら、うつかり備品壊しちやつて。化学の先生にがつたり搾られちつた」「後頭部を掻きながら苦笑する誠一を、呆れかえつた八つの目が凝視する。

「何やつてんの、兄貴……」

「いやー、つい白熱しちやつて。弁償とかは大丈夫だつたんだけど、先生が超つ怖かつた。篠田先生つつたつけ、あの女の先生。目とかこんなだつたもん」

中指で自分の目じりをつり上げながら力説する誠一に、「僕、あの先生が怒つたところ見たことないですよ」と彰が溜息を漏らす。

「なんて男なのかしら。久留井家の恥さらしね」

年下に罵られたものの、反論することができない誠一は小さく「うるせつ」と呴ぐ。

「危ないことしちゃダメじゃない、誠一。今度そんなことしたら、誠一だけ一週間三食全て私の手料理にするからね」

「！ やめて、恭子さん！ それだけはやめてえ……！」

「つーか、料理オーナーの自覚あつたんだ、恭子さん」

夕食後、三人に一部屋ずつ割り当てられていた子供部屋の部屋割りを、誠一・野乃・祥吾＆彰、という割り当てに変更したこと、家

具などは野乃の荷物を届けに来た業者と既に行つたこと、そして、部屋割りの変更ついでに各人の部屋の簡単な掃除を行つたことが老子の口から説明された。

説明が終わり、各自夕食の片付けや入浴準備、自室へ戻るためにダイニングを離れていく。

「誠一兄さん」

自分の部屋に戻るため、一階への階段を上つていた誠一を彰が呼び止める。

「何？ どうしたの、彰？」

笑顔と共に振り返る誠一。彼を見つめる彰の眼は穏やかなものではなかつた。

「なんだよ、怖い目つきして」

「どうしてそんなにはしゃいだんですか？」

「んな」と言われても……。はしゃいじやつたもんはしちうがないじゃん

「はしゃいで、何を紛らわそうとしてるんですか？」

刹那、誠一の顔から笑みが消える。最初からそんなものは存在していなかつたの如く。

感情の読めない、漆黒の瞳が彰を見つめる。

彰はその眼と正面から向かい合つ。

「このところ、無理してますよね。今日のこと然り、プリンス決めの話のとき然り。本家から戻つた頃からでしょうか。あの時、何があつたんですか？ 誠一兄さんは何から目を逸らそうと

「彰」

誠一が彰の話を遮る。

たつた一言。ただ名前を呼ばれただけだった。

なのに、彰は話の続きを声として紡ぎ出すことができなくなつた。抑揚のない声。

暗い瞳。

それだけで、先の見えない奈落の底に叩き落されんばかりの恐怖

に全身を支配された。

あと一步でも進めば、闇の中へ落ちていく。

あの一言は、そんな己を制止するものだったのだと、彰はようやく理解した。

「やだなあ。俺、隠し事とか下手なの知つてんだろ? 何でもないつてば」

普段と変わらぬ口調で誠一が言ひ。

「……そうですか。ならいいです」

「そうやう。じゃ、俺は部屋に戻るから」

「分かりました。あ、誠一兄さん、母さんに見られたらまずそうな本やDVDは僕の部屋に避難させておいてあるので、後で取りに来て下さい」

「ん。サンキュー」

弟の気遣いに感謝し、誠一は再び階段を上り始める。

が、その途中でぴたりと立ち止まり、

「あいつ……いつの間に新しい隠し場所見つけたんだ?」
と首を傾げた。

「すみません、遅くなりました」

恭子と祥吾が夕食の片づけをしているキッチンに彰が戻ってくる。

「大丈夫だよ、もうほとんど終わつたし。……彰、何かあつた?」

眉を顰める兄に、彰は「何ですか?」と問い合わせる。

「汗す」によ

「あ、本当ですね」

祥吾に指摘されて初めて、彰は自分の体が汗に塗れていることに気が付いた。

「大丈夫か? 何があつた?」

「いえ、何でもないですよ」

祥吾がいくら問い合わせても、彰は詳細を話さずとはしなかつた。話してはいけない気がした。

翌日以降も、佐虎野乃による久留井祥吾への、久留井誠一日ぐの襲撃は続き、その姿を見る度に飛鳥川琉奈や松下綾は心の中でエールを送つた。

そうして日々は過ぎてこそ、日曜日がやつてきた。

休日ではあるものの、特に出かける予定もなく、出かける気もない飛鳥川琉奈はソファの上に寝転び、ぼんやりとバラエティ番組を見ていた。

「琉奈、『ご飯食べてすぐ』に横になつたら太るわよ」

「それって嘘らじいよ。右向きに横になると、消化の助けになるんだって」

「もう、ああ言えばいつでもうんだから……」

母の溜息に琉奈が楽しげに笑つた時、不意に飛鳥川家のインター
ホンが来客を知らせる電子音を鳴らした。

「あら、誰かしら？」

「お前が頼んだダイエット食品が来たんじゃないか？」

夫の意地悪な一言に、「そんなもの頼んでません！」と反論しつつ、琉奈の母が応答する。

「はい。……ちょっと待つてもうえるかしら？」琉奈、あなたにお客さんよ」

「え？ あたしに？ 綾？」

「ううん、久留井くんつて男の子」

「男！？」

琉奈より先に、父親が素早く反応する。

父親は読んでいた新聞を折りたたみ、鋭い眼光と共に娘に問いか

ける。

「……彼氏か？」

「違うから。ただのクラスメイト！」

否定したにも関わらず、「ホントか！？ ホントにか！？」としつこく訊いてくる父を無視し、琉奈は玄関へと向かった。

飛鳥川家の門の前にいたのは久留井祥吾、久留井彰、そして佐虎野乃の三人だつた。

「ごめんね、突然押しかけて」

側にやつてきた琉奈に祥吾が謝る。

「ううん、構わないけど……。どうかしたの？」

「ちょっとアスカさんに訊きたいことがあって」

「訊きたいこと……？」

「とりあえず、あなたの家にお邪魔させてくれない？ こんな所で立ち話もなんでしょう？」

祥吾と琉奈の会話に、不機嫌そうな野乃が割つて入る。

「野乃！」

「いいよ。確かにいつまでも外で話してゐるのもなんだし。上がつて」

琉奈の言葉に甘えることにした祥吾と彰は申し訳なさそうに、野乃は澄ました顔で飛鳥川家の門をくぐつた。

客人たちを自室に通し終え、飲み物などを用意するために一階へ降りてきた琉奈を待つていたのは、興味津々顔をしてゐる両親だった。

「な……何？」

「琉奈、いつの間にあんな綺麗な子たちと知り合いになつてたの！」

？」

「いつたいどつちがお前の彼氏なんだ、琉奈！？」

娘に詰め寄る両親たち。その姿に、ソファで寛いでいる琉奈の兄は深い溜息を零した。

松下綾は駅の側にあるショッピングモールへと向かっていた。

ファッショントマトで見つけたワンピースが欲しくなり、小遣いをはたいて買つつもりだつた。

しかし、彼女の予定はすぐに変更されることになる。

「……あれ？」

モールの入り口までやつて来た綾の視界に、一人の男性が不意に飛び込んできたのだ。

綾は彼の元に駆け寄り、その肩を叩いた。

「誠一先輩！」

「！あ……綾ちゃん。おはよつ

肩を叩かれた瞬間、久留井誠一は警戒心剥き出しの表情を浮かべるが、自分に声をかけたのが綾だと分かつた途端、その顔は柔軟な笑みに変わった。

「奇遇ですね。朝から先輩に会えるなんて！」

「ホントだねえ」

心底嬉しそうに微笑む綾。

誠一もまた笑顔を浮かべてはいるものの、その表情はどこか固い。

「綾ちゃんは買い物？」

「はい！誠一先輩も買い物ですか？」

「いや、俺はちょっと遠出しひ」

「どこに行くんですか？」

「えっと……その……」

答えを言い淀む誠一。

いつになく歯切れの悪い誠一の姿に綾は小首を傾げる。

やがて、誠一はジーパンのポケットにかけている手を強く握り締めた。

「綾ちゃん」

「あの、言いたくなければ言わなくていいですから」「じゃなくて。もし良ければ、今日俺に付き合ってくれないかな」

「え?」

突然の懇願に、綾は大きく眼を見開いた。

「で、あたしに訊きたいことって?」

予め作り置きしておいたアイスティーを注いだマグカップを祥吾、彰、野乃に配りながら、琉奈が問い合わせる。

「ええ、それなんですけど。先週うちの本家でトロコノ国と一緒に行つた時のことなんですが」

「彰くんと一緒に行つた時……って、お婆さんの魂と会つた時だよね」

「え? あなた、この前のが初めてじゃないの?」

いきなり話の腰を折つた野乃を、「後で説明するから」と祥吾が宥める。

「……続けますね。その時のことなんんですけど、僕たち、森林にいましたよね」

「うん。あのお婆さんが造つた森林だよね」

「ですよね。でも、僕があの魂と戦つている時、途中で風景が森林から学校の教室に変わつたんですよ。あの空間にいた三人のうち、僕は何もしていませんし、驚いていたようなので、老婆にとつても予想外のことだつたと思うんです。……先輩、何かしましたか?」

琉奈は顎に手を当て、当時のことを無言で思い起こしていたが、しばらくして、「あつ」と手を打つた。

「あそこに行く前、トロコノ国では魂の力が大きく作用するつてい資料をたくさん読んでたの。で、彰くんが戦つてる最中、あたしの魂の力はうまく使えないのかなって考えてて。それで、あの空間つてきつと魂にとつて次男の言い空間だろうから、それを変えちゃ

えばこっちに有利になるんじゃないかと思つたの。で、あたしと彰くんの共通点つてので咄嗟に学校が思い浮かんで、そうなるようはずっと念じてはいたけど。それかな？」

琉奈は淡々と話していたが、話の終わりに琉奈が祥吾たちに問い合わせた時、彼らは驚愕のあまり絶句していた。

「……えと、ヤバかつた？」

「ヤバイなんでもんじゃないよ……」

静かに答える祥吾。そして彼は琉奈の手を取り、

「すごいよ、アスカさん！　トコトコノ国の大魂が形成した空間を変化させるなんて！　そんなことができる巫女なんて今までいなかつたんじゃない！？」

「ですね。それにしても、魂の力を肉体にも分散させている人間に比べて、魂の力を純粹に自分の力として使えるトコトコノ国の大魂の方が、基本的にトコトコノ国空間に干渉する力は強いはずなのに。アスカ先輩はどうしてそんなことができるのでしょうか？　相当魂の力が強くないとできない芸当ですよ？　そもそも、先輩は久留井と無関係の人間なのに」

「魂の力の強化……つてもしかして、アスカさんの本当のご両親が関係してるんじゃない！？」

祥吾の指摘に、琉奈と彰が同時に「あ！」と声をあげると、突然バンッと何かを叩きつける音がして、琉奈たちの思考を一旦停止させる。

音の原因は野乃で、彼女は話に加わることができない苛立ちから、テーブルを平手で叩いたのだ。

「ちょっと！　何のことか全然分かんないんだけど！？　分かるように説明してよっ！」

怒りを爆発させる野乃。そんな従姉妹に、祥吾と彰は顔を見合わせ、溜息をついた。

「はい、綾ちゃんの」

誠一が差し出した切符を受け取る綾。

切符には見慣れぬ地名と、四桁を超える金額が書かれていた。

「誠一先輩、ここ、どこなんですか……？」

「うちの本家がある所」

「本家って、この前アスカと一緒に行つたつていう?」

「うん。でも、今日は本家には用はないんだ」

色々突っ込みたいトコあるだろうけど、まずは聞いててね、と野乃に前置きし、祥吾が説明し始める。

「アスカさんは幼い頃からよくトコヨノ国に引きずり込まれてたんだ。原因は彼女の実の父親の魂。父親はアスカさんことを憎んでいたから、トコヨノ国に引きずり込んで、殺そうとしてたわけ。でも、いつも実の母親の魂がそれを阻止して、彼女を現世に戻してあげてたから無事だった。

少し前、俺たちがアスカさんの両親の魂を散らしたんだけど、その時に両親の魂がアスカさんに降り注いだんだ。その後、彼女はトコヨノ国への転移能力 巫女の力を得てしまった。俺たちは、それが彼女に降り注いだ両親の魂が悪さでもしてゐのかなって思つた。

でも、そうじゃない。多分、アスカさんの両親の魂は自ら進んでアスカさんの魂の中に取り込まれ、彼女の魂の力をより強いものにしてるんだよ。そして、長い間トコヨノ国に引き込まれてたことに

よる親和性が相まって、巫女の力を得て、更にトロロノ国においても強力な魂の力を使って、空間を変化させることができるようになった。多分、そういうこと

「なるほど……。それなら辻褄が合いますね」

右手の指先で顎を摩りながら彰が言う。

「つまり、実の両親の魂の、おかげって言えばいいのか所為つて言えばいいのか分かんないけど、あたしは普通じやない力を持つちゃつたつてこと?」

琉奈の台詞に祥吾が深々と頷く。

「そういうこと。単純な魂の力の強さだけで言えば、俺たちより上だと思うよ」

「信じられない……。そんなの野乃、聞いたことないよ!？」

困惑する野乃に、「俺だつて聞いたことないけどさ」と祥吾は肩を竦める。

「でも、それ以外にアスカさんの身に起こったことを説明しようがないし」

「あたしの、本当の親の魂が……」

祥吾の推論についてそれぞれ沈黙し、頭の中で思案を巡らせている琉奈、祥吾、野乃に、彰が「あの、ちょっとといいでですか?」と切り出した。

「別件について、皆さんに相談と言うか、お願いしたいことがあるんですけど」

「一つ並んだ空席を見つけ、久留井誠一と松下綾はそこに腰を下ろした。

一度、大きく体を揺らした車両は次第にスピードを上げ、駅のホームを走り去っていく。

「途中の乗り換えとかは俺が言つから

そう言つたきり、いつもはお喋りな誠一は黙り込んでしまった。

綾もまた、口を閉ざすしかなかつた。

本当は訊きたいことがたくさんある。

本家ではない、どこへ行くのか？

何をしに行くのか？

どうして自分を連れて行くのか？

何故、祥吾でも彰でもなく、自分なのか？

しかし、綾は訊くことができなかつた。

小刻みに震える誠一の拳を見てしまつたから。

街の風景でも、自分でもない、別の何かを常に見つめている誠一の瞳に気付いてしまつたから。

飛鳥川琉奈、久留井祥吾、久留井彰、そして佐虎野乃の四人の姿は、複合型アミューズメントパークの一角にあるカラオケボックスの中についた。

彼らがこの場所に移動したきっかけは、

「本家からトコヨノ国に行つた時に会つた老婆の魂と、もう一度話がしたい」

という彰の申し出だつた。

「ずっと氣になつてゐるんです。僕にそつくりな女というのが」

彰の吐露した言葉に、琉奈と祥吾は「あ……」と小さく零す。

一方、またしても事情を知らない野乃是「女つて？」と首を捻る。「前にトコヨノ国で彰が会つた老婆の魂が、彰そつくりな女と話しことがあるつて言つたんだよ」

「彰にそつくりつて、彰、お姉さんか妹いたの？」

「いませんよ。母さんにも確認しましたし。だから氣になつてゐるです。真相を知るには、もう一度あの老婆に話を聞いてみる必要が

あります。そのために、アスカ先輩の力を借りたいんです

「あたしの力……つて、あ」

彰が言わんとしていることに思い当たつたらしい琉奈に、彰は頷き、告げる。

「先輩の巫女の能力で、僕をもう一度あの老婆がいる空間に連れて行つて欲しいんです」

彰と、彼の願いを聞き入れた琉奈、そして同伴を申し出た祥吾と野乃の四人がわざわざカラオケボックスにやつて来たのには理由がある。

琉奈の部屋でトコトコノ国への移動を行つた場合、彼女の親が部屋にやつて来て、彼らの以上に気付いてしまう可能性があるからだ。その点、カラオケボックスなら、他者に邪魔される可能性は低くなる。

とはいゝ、店員などが入つてくる可能性もゼロではないので、

「野乃是こっちに残つて見張つて」

と命令してきた祥吾に、野乃是「はあ！？」と眉間に深く皺を刻んだ。

「何よ、野乃だけ仲間外れ！？」

「じゃなくて。何があると困るから。……お願い」

手を合わせ、困ったような表情を浮かべながら小首を傾げる祥吾。可愛らしい仕草で惚れた弱みに付け込まれた野乃是、頬を紅潮させつつ、「し、仕方ないなあ」と了承する。

その姿に、彰は「祥吾兄さん、策士だな」と呴いた。

電車とバスを乗り継ぎ、松下綾が久留井誠一に連れられてやつて来たのは、とある大学病院だった。

「大きな病院ですね」

「そだね」

「気のない返事をする誠一。彼は慣れた足取りでエントランスをくぐり、多数の受付が並ぶ通路を通り、長椅子が大きく佇む待合所の前を通り過ぎ、エレベーターホールに到着する。

三機あるエレベーターのうち一機は上昇中で、一機は下降している。

「知り合いの人が入院してるんですか?」

「うん。五階で入院してるんだ。三年くらい」

数を減らし続ける階数表示を見上げながら、誠一が答える。

「誰なんですか?」

「幼馴染だよ」

6.....5.....4.....

「女の子、ですか?」

「うん。 同い年」

「お見舞いですか?」

「つづん」

3.....2.....1

「殺しに行くんだ」

閉ざしていた瞼を開けると、そこには一面、新縁の世界が広がっていた。

強烈な既視感を覚える琉奈と彰。

『おやおや……』

呆れ返った声が木々の合間から漏れ出した。

『またこの老婆に会いに来るなんて、随分と物好きな子達なのねえ』
琉奈たちの前に聳え立つ巨木の向こうから現れた、一人の老婆。それは紛れもなく、先日琉奈と彰がこの空間で出会った老婆だった。『気が変わって、私に食べられに来たのかと思つたけど、どうやらそうじやないみたいね』

老婆は見慣れぬ青年 久留井祥吾を舐めるように見上げる。
新たな戦力の出現。

それは以前彰と戦つた際、やや劣勢だった老婆にとって、己の確実な敗北を認めさせるのに十分な要素だった。

「僕たちはあなたと戦つつもりは毛頭ありません。あなたを散らせるつもりはないんです」

彰が老婆に説明する。

『じゃあ一体何しにわざわざこんなところへ?』

「訊きたいことがあるんです。あなたが出会つたといつ、僕にそつくりの女性について」

『?あの子は知り合いじゃないの?』

「僕には姉も妹もいませんから。いつ、どこでその女と会つたんですか?」

『かなり前のことよ。あの子は突然、私の森へやって來たの。他人と話すなんて久しぶりのことだったから、随分長話をしたわ。その

話の中で言つてたの。生者の魂を喰らひ、自分の中に取り込むと、更に強大な力を得ることができるつて。

「じゃあ、まずお前を食べてしまおうかしらって言つたら、あの子は笑つて、「あなたに私は倒せないわよ」なんて言つてたつけ。」

そう話す老婆もまた、楽しげな笑みを浮かべていた。

細田葵。
ほそだあおい。

誠一は、そつ書かれたプレートの横にあるドアをゆっくりと開ける。彼の顔は、緊張の糸に縫い付けてあるのかのように強張つていて、それを見た綾まで思わず身を引き締める。

病室へ足を踏み入れる一人。

白い室内。白いベッド。白い顔の少女。

「！ 誠一くん、来ててくれたのね」

夥しい数のチューブにその身を絡め取られたまま眠つている少女のベッドの横に佇んでいる中年女性が誠一に気付き、歩み寄る。

「葵もきっと喜んでるわ。……あら、後ろの子は？」

見知らぬ少女 綾へと視線を向ける女性。

「あの……ええっと……」

「知り合この子です。さつき、たまたま下で会つたもんで」

どう説明しようか困惑していた綾に代わり、誠一がさらりと嘘をついた。

茫然とする綾をよそに、「あら、やつの。初めまして」と女性は綾に笑顔を向ける。

「おじさんはまだなんですか？」

「やつのよ。こんな日に限つて仕事が片付かなくて。けど、もうじき来るはずよ」

「おじさんが来たら、ですか」

「ええ、やつよ」

会話を交わす誠一と女性。

口を挟むことができない綾は、じつとベッドに横たわる少女を見つめていた。

雪のようになびい肌の少女。

眉一つ動かさず、ずっと眠りに落ちている。体中から伸びるチューブ。それらは全て、点滴や彼女のベッドの周囲に置かれている大小様々な機械と繋がっている。どの機械がどんな役割を担っているかは分からぬが、それらによつて彼女の命が現世に留まっているのは明らかだった。

「幼馴染なんだ」

一旦病室の外に出て、エレベーターホールのすぐ近くにある休憩スペースに設置されている椅子に腰掛けるなり、誠一が口を開いた。「うちの　本家のすぐ近くにあるマンションに住んでて、小さい頃、俺たち三人といつも一緒に遊んでた。俺たちより男勝りで、明るくで、活発で、いつも笑つてたよ。

そうしていつも一緒にいるうちに、だんだん葵のことを異性として意識し始めて。葵のこと好きかもって祥ちゃんと彰に話したら、二人も俺も好きだつて言い始めてさ。そのせいでケンカしたこともあつたよ。あれはびっくりだつたね。でも、結局一人は身を引いてくれて、俺が葵と付き合つことになつたんだ。中一の時のことだつたかな。

付き合つつても、今考えるとママゴトみたいなもんだつたよ。擬似恋愛つていうか、子供の恋愛だね。ただ毎日一緒に登下校して、たまに公園ですつと喋つたり、川原で遊んだり。それだけでも十分楽しかつたし、幸せだつた。

中三の冬だつたよ、葵があんなふうになつたのは、現世で悪さしてたトコロノ国^{トコロノクニ}の魂を散らしたんだけど、完全には散らせてなくて、その魂は再結合した。でも、俺はそのことに気付かなかつた。何日か後、再結合した魂は下校中の俺をトコロノ国に引きずり込んだ。

一緒にいた葵」とね。その魂はどうにか、今度は再結合させることなく散らしたんだけど、俺がそいつと戦つてる間に別の魂が現れて

……葵の魂を奪つていったんだ」

「魂を奪つたって……でも、葵さんは死んでない、ですよね?」

「それが、どうやら葵の魂を奪つた魂が、あいつの魂を保管してるみたいなんだ」

困惑する綾に誠一が言つ。

「なんとかは分かんないけど、葵の魂 자체はまだ無事なんだ。そういう趣味でもあるのか分からないけどね。ただ、肉体と魂が離れてしまつてるせいで、葵は植物人間状態になつてしまつた。……全部、俺のせいなんだ」

「そんな……」

悪いのは誠一ではなく、彼らを襲つた奴と、葵の魂を奪つた奴の方。

綾はそう言つて慰めようと思つたが、自分の慰めなど何の役にも立たないことあ、誠一の悲痛な表情を見てすぐに分かつた。

誰が一番悪いのかなんて、誠一だつて本当は分かつている。

けれど、全て自分が悪いと思わずにはいられないほどの罪悪感に囚われているのだ。これまでずっと。

誠一の表情はそんなことを無言で綾に語りかけていた。

「今日、これから葵の生命維持装置を止めるんだつて。前、本家にきたついでに見舞いに来た時に聞いたんだ」

「……え?」

「三年近く経つても変化がないってことは、もう一生このままだろうから、自分たちの我倣で機械使つて生かし続けるより、静かに眠らせてあげた方がいい。葵の両親はそう考えたんだ」

「! そんな……。葵さんの魂を取り返すまで待つてもうえないんですか!? 魂を取り返せば、目を覚ますんでしょ! ?」

「かもしれない」

「だったら」

「」

細田葵の病室へ戻もどり立上がる綾。しかし、誠一は彼女の腕を掴み、制止する。

「もういいんだ、綾ちゃん」

「誠一先輩……」

『あの子もお前も、ぞつとするくらいに綺麗な顔をしているね』
彰を見て、彼にそつくりだという女性と会った時のことを思い出したのか、老婆が懐かしそうに呟く。

「他には何か言つていませんでしたか？」

『他に、ねえ……。何を言つていたかしら……ああ、そういえば、なんだか現世に生きる人間を随分憎んでるようだつたわね』

「人間を憎んでる……」

彰は老婆の言葉を反芻し、眉を顰める。

「誰かに殺された魂なのかな？　でも、それだと彰そつくりな理由が分かんないか」

後頭部を乱暴に搔きながら祥吾が言つ。

「やつぱりそこだよね。なんで彰くんにそつくりなのかな？」
「僕に恨みを持つ魂の仕業、という線が今のところ有力でしょうか」「でも恨みなら、トコヨノ国経験からいって、兄貴の方が買つてると思つけど」と思つけど

議論が行き詰まり、琉奈、祥吾、彰の三人は互いに顔を見合せ、うーん、と唸る。

『……良ければ、その女と会つたところまで案内してあげようか？』
三人の輪に加われず、無言で立ち去っていた老婆が助け舟を出します。

「一、ホントですか？」

『さすがに会えはしないだろうけど。ここから少し歩いたところよ』
『そう言つて、俺たちを罠に嵌めようつてんじやないだろうな？』
鋭い眼光を向けてくる祥吾に、老婆は呆れ顔で『今戦つても勝ち目がないことくらい、老いぼれでも分かるよ』と言い捨てる。

『ほら、じつちよ』

老婆の先導で森の中を歩き始める琉奈たち。
その時だった。

『あ?』

突然、周囲の木もろとも、老婆の体が腰から真っ二つに分断された。

あまりに唐突な出来事に、後ろを歩いていた三人は茫然と、倒れ行く木々と老婆を見つめることしかできなかつた。

霧散し、形を失つていく老婆の魂。

その向こうに佇む一人の女性。

槍を持ち、不敵な笑みを浮かべる彼女の顔を見た彰が呟いた。

「僕?」

刹那、森林から眩い光が放たれた。

細田葵の父親が来るまでの間、久留井誠一は眠つてゐる葵に付き添つていた。

時折、葵の母親と話し、葵の頬や額を、纖細な硝子細工にでも触れるようにそつと撫でた。

葵を見つめる誠一の瞳は様々な感情を帶びていた。

彼女に対する慈愛。助けられなかつたという後悔。これからやつてくる永遠の別れに対する悲しみ。彼女をこんな姿にした魂への、己への憤怒。

松下綾は病室の片隅で、そんな誠一の姿に胸を詰まらせることしかできなかつた。

「ごめんね。こんなことに付き合わせちゃつて」

帰路をひた走る電車内。誠一は綾にそう切り出した。

「怖かつたんだ」

「怖いって、何がですか？」

「何もかもが」

そう答え、誠一は深く息を吐き出した。

「何回も思つた。葵があんなことになつた本当の理由をあいつの両親に話そつて。本当は転んで頭を打つたんじゃなくて、トロロノ国^{トロノ}の魂にあいつの魂を取られたんだって。けど、信じてもらえるか分からぬし、信じてもらえたとしても、次に責められるのは俺だ。俺がしつかりしてりや葵はあんなことにならなかつたのにって、きっとある人たちに責められる。それが怖かつた。だから、あの時綾ちゃんを止めたんだ。

あいつと一緒に一度と会えなくなるのも怖かつた。今日起じる何もかもが怖かつた。こんな兄貴の姿、祥ちゃんや彰にはみせたくないくて、強がつて一人で駅まで来たけど、すごく不安だつた。だから、駅で綾ちゃんを見かけて、付いて来てくれるつて言つてくれた時、すぐホツとしたよ。もし、恐怖と不安のあまり倒れそうになつても、寄りかかる場所ができたつて。

本当にごめんね。今日一日、俺の事情に巻き込んで。こんなダメダメな先輩で

俯く誠一。綾はそんな彼に明るく微笑みかける。

「……先輩はダメダメなんかじゃないです。それに、もしダメダメだとしても、そんな先輩のことも久留井くんや彰くんは好きだと思いますよ。だって、先輩たち三人つて、たまにこつちが嫉妬しちゃうくらい仲良しですもん」

「だったら嬉しいなあ。ありがと、綾ちゃん。…………」「めん、ちょっと寝てもいい？ 安心したら、急に眠気が……」

「いいですよ。地元に着いたら起にしてあげますから

「おかえり。収穫はあつたの？」

現世に戻ってきた飛鳥川琉奈、久留井祥吾、久留井彰の三人に、一人力ラオケボックスの中で留守番していた佐虎野乃が声をかける。待っている間、野乃是歌つていなかつたようで、正面の大きなモニタには人気アーティストのプロモーション映像が流れている。

「……いた」

「？ 何が？」

「僕が」

目を見開いたまま答える彰。野乃是溜息混じりに「そりゃあんたは今いるわよ」と冷静にツッ込む。

「じゃなくて、彰そつくりの女がいたんだよ」

「！ 会つたの！？」

足らなかつた言葉を補つた祥吾の説明に、野乃是思わず飛び上がる。

「会つたつづーか、見ただけ。俺たちが会いにいつたおばさんの魂散らして、少しだけ俺たちを見てた。で、気付いたら戻つてきてた」「ホントに彰くんそつくりだつたね。びっくりした」

しみじみと語る琉奈に、祥吾が頷いて同意する。

唯一その女性を見れなかつた野乃が「野乃も見たかつたのに！」などと喚く中、彰が小さくひとりごちる。

「あの女、一体何者なんだ……？」

携帯電話のボタンを操作する指を止める綾。

隣で眠る誠一の頭が肩に凭れ掛かってきたのだ。

綾は誠一が熟睡しているのを確認し、そつと頭を彼のそれに寄せてみる。

小さき、力なく開かれている薄い唇から零れる寝息に、綾の心拍数が急上昇する。

が、それはすぐに急降下することになる。

「……ん、葵……」

眼前の脣が紡ぎ出した寝言。綾は体を強張らせる。
再び携帯電話を操作し出した綾。

その唇はきつく噛み締められていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0556u/>

久留井三兄弟の非現実的な日常

2011年10月8日03時28分発行